

始



504-239

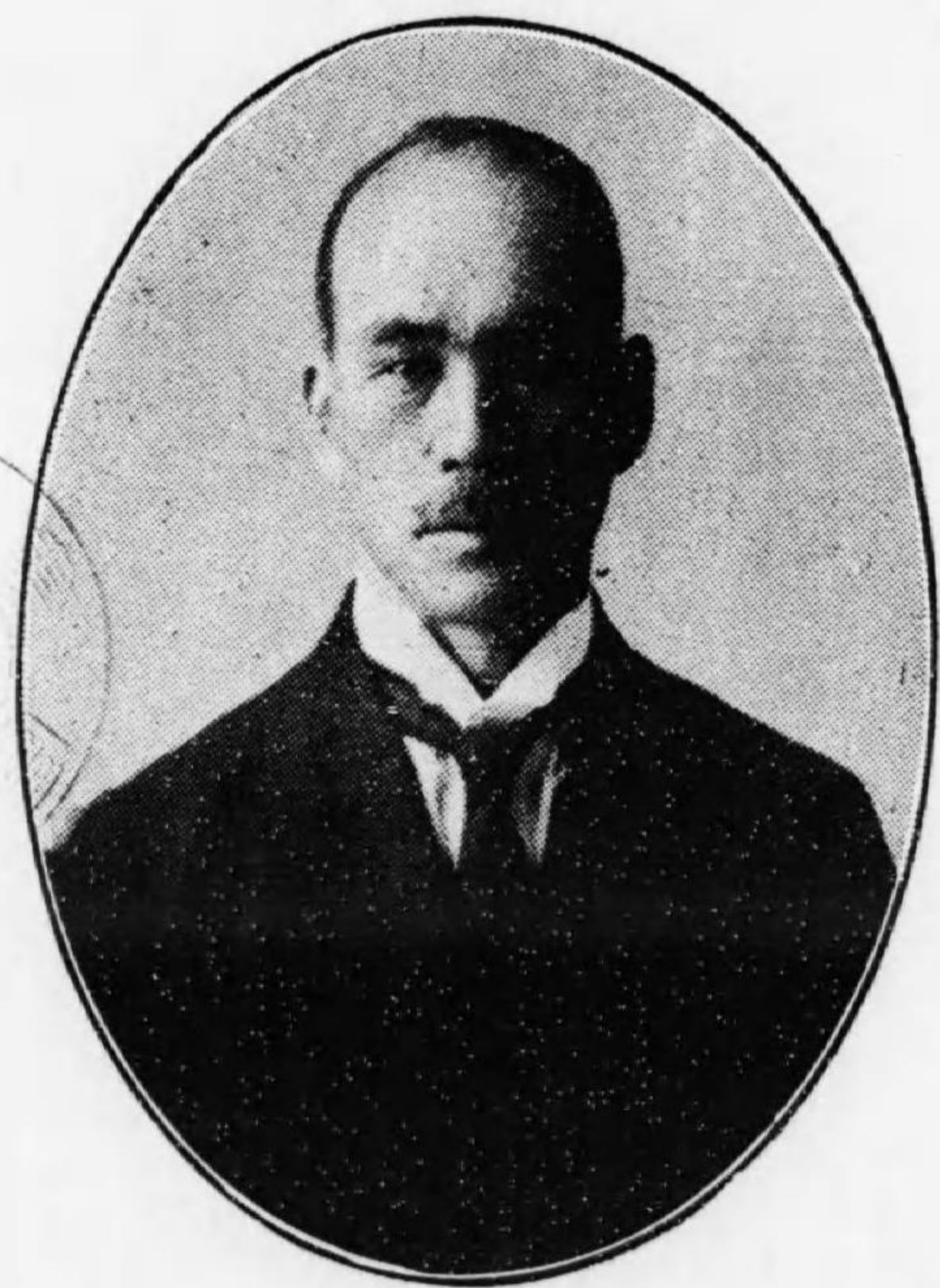
武本喜代藏著



神と偕に歩むの記

文書傳道會發行

大正
13. 1. 21
丙交



神と偕に歩むの記

はしがき

獨りで歩めば淋しく且迷ひ易い、惡魔と共
に行けばどうせ滅亡だ、所詮神と偕に歩む
外幸福の途はないのである、が併し自分が
エノクのやうに實際日々神と偕に歩んで
ゐると云ふのではない、唯どうかして歩み
たいと云ふ一片の希望に過ぎぬ、正直に毎
日の信仰生活の有りの儘を書いて、神と兄
弟らの公平の批判を仰ぐのである。

武本生

神と偕に歩むの記

武本喜代藏著

大正九年

五月

▲五日(水) 會員の宅集りから歸り十一時頃寝た、午前二時頃に眼が冴へて來た、近來トントこんなことはない、疲勞の勢か、神が私を喚び醒し給ふたのか、兎に角不思議なものである、床の上で祈つた、何だか心に油が漲つてゐるやうに感じ、祈つて居れば靈威が湧いて來る、火が燃へ出した。

英國で行はれつゝある「祈禱戰」の事を思ひ出した、プレーヤ、リーグと云ふ團體のあつても思ふた、併し規則などダメだ、又初めから團體を造らうとせず、自分でやつて居れば好い、神許し給はば何とか道が開けるであらうと思つた、ア、祈禱なる哉〜

自分は全く祈の人に成りたい。

此日或必要から圖書館に行かうかと思つたが行く氣に成れず、讀書する氣にも成れぬ、そこで二三の信者や、求道者を訪問した、そして到る所で祈り、大に力を與へられた、ア、今後の活動、自分は凡ての時間の十中の七迄祈らうと決心した、禮拜も、傳道も、祈り會も、訪問も凡てを祈禱中心となすべく決した。

ア、自分は愚かだ、何人集つたとか、受洗したとかそんなとばかり考へてゐた、若し靈的生命が人の心に湧き出す、又眞の神の生命に入つて歡喜に溢れなければ何十人の受洗、何百人の集會も畢竟無意味だ、徒勞だ、然るに従來は徒らにそんな外部の事ばかりあせつてゐた、集會が少いと意氣衰へ、受洗者が少いと云つて煩悶した、何たる愚かなとであらう。

一生一人に洗禮を授けないにしても若し多數の人々に眞の靈的生命を與へることが出來たなら、又彼らを生かし、失望より、悲哀より、罪より、惡習より救ひ出すことが出來たなら此以上の幸福はあるまい、ア、形式を壊はせ、統計に捕はるゝな、ヨシンば千

百人に洗禮して見ても、淺薄で、浮ツ調子で、深く人の靈性に喰ひ入る所もなく、一人の靈をも善化せず、一の家をも幸福にし得ないならば一切萬事ダメではないか。

▲八 日(土) 昨夜も十二時より殆んど不眠、併し非常に神に接近し快云ふべからず、神は確かに予に近き給ふた、今朝も三時頃より喚び起され、頻りに教へられた、予はフト祈禱團組織の必要を感じた、何か宗教運動、新らしい有力の團體の必要を感じつゝありし際、突然予が腦中に起つた考である。

かくて神は予に「靈化運動」開始の命を下し給ふた、誰にも相談せず、誰をも頼まず、只神と、自己の力に信頼して立つの外なきを感じた。

靈化運動の特色、

(一) 祈を唯一の武器とする事。

未信者の前にも大膽に祈り、從來の如く祈をそへ物の如くせず、説教よりも祈で、大道の側に立つても高聲に祈ると、祈を以て始終する事。

(二) 從來のソバイバルの如く感情的でない事。

祈に依つて人の理性、感情、意思の凡てを化へると云ふ靈化主義、常識を重んじ、熱烈にして同時に合理的、静かなれども靈火に燃へ盡さるゝ事。

(三) 未來的、個人的で、同時に現世的、社會的である事。

▲十六日(木) 朝四時眼さめ、床上に祈る、靈化運動の將來に付いて考へさせらるる所少くなかつた。

▲廿一日(金) 朝二時頃眼醒めて眠らず、横臥の儘頻りに思ふた、亂れた思想を纏むべく努めた、漸くにして今日の祈禱會のやり方等に付いて思ひを集注した。

祈禱中心主義を主張して禮拜よりも祈禱會に力を盡すべく決心せし我は、靈化運動の元氣の發源地として、どうしても天滿教會の祈會が振はなければダメだと思ふた、急に金曜の事務會を木曜に變へ、金曜は朝から晩迄祈禱斷食、心一杯の力を只此一事に傾注すべく決した。

▲廿五日(火) 夕中の島公園音樂堂前で第一の靈化運動を開いた集會約二百、トラクト六百枚配布、予は靈化運動の主旨に付いて語り、數名の證し、があつて、最後に

再び立つて熱烈に説教し、且盛んに祈禱した、誰一人妨害する者なく何れも靜聽した。

▲卅 日(日) 夕拜出席者約五十、予は感ずる所あつて突然説教を止め熱心祈禱に付て獎勵した、全會燃ゆるが如く、或求道の青年の如き散會後夜遅く迄會堂裏の土の上で跪いて泣り、數名の一月會や、九月會の人々は盛んに歌ふてゐたが、やがて皆首を鳩めて祈つてゐた。

翌月曜二人の商人体の人々は予を尋ねて來て、昨夜の集會で非常に感じ、一人は斷然禁酒、今後信仰生活に入るべく決心せる旨を語つてゐた、會員の一婦人は予に手紙をよこした、

「先生私は一昨日夕拜の節の御話を承りまして、ほんとに心に染渡りました、先生私の信仰は偽善でせうか、偽善でなうて何んと致しませう、昨日考へて／＼考へぬきました、どう考へても偽善としか思はれませんもの、それでも神様は、今日迄見捨て給はず御指導下されました事を心から感謝致します。

先生私のような智慧も學問も何もない愚かなものでも、徹底した信仰に入る事が出

來ませうか、先生此九月が來ましたら、私は洗禮を受けて滿三年になり升、此間人様よりも多く教會に出席致し、又多くの教を受けております、夫にも拘らず、信仰も進まず、祈禱の言葉さへも存じません、ほんとに神様に申譯御座いません。

一昨日の御話を承りて、いさぎよく信仰を捨て、しまはんかとも思ひました、けれ共形ばかりの信仰でも私は捨てる事が出来ません、神様はたへす凡の困難よりお救ひ下さいましたのですもの、どうして捨てられませう。私は眞個に徹底せる信仰に進みたいのです、……………」



六 月

▲五日(土) 今朝三時過ぎ眼さめ又眠る能はず、頻りに祈る、四時、五時と成るも眠り難し、神は愈或事を完成する迄予に安眠を許し給はざるが如し、かくて予は次ぎの禮拜説教を考へ、更に靈化運動に付て沈思祈禱した。

(一)靈化運動の集會。

屋外集會、屋内集會、特別祈禱會。

(二)靈化運動加盟式。

會員、會友、戰友等色々に考へしも何れも適當せず、漸くにして加盟者てふとに思ひ付き、直ちに次ぎの日曜夕集會後之を舉行すべく決した、其時フト感じた、若し儼かに加盟式を宣言しても誰一人立つて應ずるものがなかつた時はどうしようと、併し直ぐ自分は決心した、其時は神様が司會者で自分一人立つて加盟しよう、之れ丈けは確かだと思ひ、覺へず獨りで笑つた。

祈禱中左の如く加盟式の誓約を考へ、直ぐノートに書き留めた。

(一)余は日々幾回となく眞劍に祈禱し、反省し、徹底的信仰に入るべく努力すべし。

8

(二)余は祈禱に依つて靈肉内外の敵を亡ぼし、自己品性の建設と、社會の改造及廓清の爲めに奮闘すべし。

(三)余は集會、献金、祈禱、獎勵、勸誘、廣告等あらゆる手段方法を以て該運動を援助すべし。

▲六 日(日) 余は今朝二時、三時、四時と祈り、四時過ぎより暫時祈り、直ぐ起きて九時前教會へ出で、S.S.で兒童説教し、更に「眞の禮拜者」と題して禮拜説教した、祈禱に力あり、満場に靈氣の洋溢するを覺へた。

午後二時頃、九月會ありときき、予は態々武庫川畔迄行く、川は水なく、一面の白砂は青松と相映じて心地が好かつた、如何なる間違ひであつたか誰も來らず、予は一人若草の上に坐しつゝ、祈り、沈思すると多時、眠を覺へ、何時しか横臥してゐた。

四時頃教會に引返し、二階で祈り且考へた、今夜の加盟式を如何にすべきかと、が

併し一切を神に任せて心易きを覺へた、夕の説教は急に靈化運動屋内集會と變へ、靈氣堂に溢れた、予は起つて加盟式に付て語つた、祈りに力あり、「予は近頃殆んど眠る能はず、一心に考へ且祈りつゝあり」と云ふや、婦人達ははや涙を拭ふてゐた、二三の祈を求めた、ア、彼等の祈の力あるとよ、眞情切に、人の肺腑を衝くものがあつた、感激は充ち、靈火は燃へ上つた、かくて予は肅然起つて決心の出來し人々は前へ進み出で誓約書へ署名せよと云ふや、十七名の男女猛然壇下迄進み來つて署名した、實業家、官吏、店員、學生等色々であつた、予は溢るゝ感謝に充ちて、祈りを捧げた、かくて祈の結果に成れる靈化運動は正式に成立したのであつた、感謝く。

▲八 日(火) 夕七時音樂堂前にて運動開始、約三百の聽衆、我らを圍繞し、耳を澄しつゝ我らの証しを傾聽した、予は初めより聖靈に充たされ、三十分間説教、聲涙共に下つて人の心を動かすものがあつた、起立の儘祈ると約十五分、満場の聽衆誰一人動くものさへなく、森としてながら大會堂裏に獨り祈るが如くであつた。

▲十三日(日) 此日禮拜説教に力なく、集會何となく淋びしく感せられた、夕は第

9

二回加盟式六名の人々進み出で、親しく署名した、或人々は立つて加盟の理由を述べた、何れも真剣だ、靈氣に充ちてゐる。予は感極つて云ふ能はず、唯一言坐した儘語つた。

「ア、自分は不信仰だ、自分程不信のものはない、集會が少なければ直ぐ元氣鈍れ、……皆さんどうか私の爲に祈つて下さい……」

▲十五日(火) 連日の疲勞に朝や、遅く、六時頃起きて祈つた、九時家出、一會員の悲しむべき家庭の問題に約三時間を費し、それから會堂に往つて遠來の某氏に接し、午後二時主婦會、靈感涌くが如く、熱涙の祈禱續出した、散會後、余は一青年と樓上に語り、樓下には廣田書記と、數名の姉妹達が「歡喜に溢れて」發送の爲め忙殺されつゝあつた。

夕の靈化運動は雨の爲め中止の已むなきに到り、數名の兄弟等と祈つて別れた、歸れば九州で病みつゝあつた長男から手紙が來て、熱や、低く、食進めりとの快報、妻と共にやゝ愁眉を披いた、岐阜の某君より、

「今朝圖らず「歡喜に溢れて」を手にして只今(午後五時)迄中食の膳に着いた數十分以外、眼を此貴著に曝して二八八頁迄來ました、モー眼がはれ上つて重くるしく成つて仕舞ひ、頭は茫として夢の中のやうになつて仕舞ひました、眞に泣かされました、聲上げてモウ一度献身の祈を捧げた所です、ほんとにあなたの御働きは祝福されて、如何様な驚く可き結果が是から顯はれて参りませうか……私は今あなたが堪へられぬ程慕しいのです……」

▲十六日(水) 在宅日、雨繁く、庭前に蛙聲を聴く、朝二時頃より約一時間半祈り且考へた、頭腦朦朧として充分神と交ることが出来なかつたが、猶もくゝと祈る中、心氣頓に快晴を覺へた、やがて豪雨と化し、終日止まず、裏の畠は一面の池と化した、予は終日ケントの「ヒストリカル、バイブル」を読んだ。

▲十八日(金) 此日神は頻りに祈らしめ給ふた、どうしても讀書する氣に成れず、唯祈つた、暫し神學校側の深い森に這入つて又祈つた、夕の祈禱會迄に數家族を訪問しようかとも思ふた、が併しそれよりも神に近く事の今夜の祈會に更に一層大切だと思

つた、全身力と光に充たされつゝ、祈禱會に臨んだ。

外は降雨、電車は客稀れである、今宵の集會如何と案じた、こんな夕自分獨りでも好い、眞剣に祈らうと思ひつゝ、開會したが、意外の人々が、雨を犯して集つて來た、足音が何時になく勢ひが好い、而して二十三四名の男女は始めから緊張し、靈雨に浴して散じた、歸途或人は今宵の如く靈化に充ちた祈禱會は知らぬと云つてゐた、實際祈と祈がカチ合つて、獎勵に力があり、満堂の空氣がスツカリ變つてゐたのである。

▲十九日(土) 朝はマイヤー初じめ數種の註解書に眼を曝らし、午後一會員を訪問すべく途中でフト感じた、予は神を愛するよりも神を利用しつゝあるのではあるまいかと、宗教の最高目的は物ではなく、神ご自身である、ヨシそれがどれ程尊い目的にもせよ、神以外の何物かを獲んとして祈禱し、信仰するのは偶像的だ、既に神を得れば一切を獲たのである、具足圓滿である、大願成就である、何の富、健康、力、幸福をか求むべきぞ。

▲二十日(日) 朝五時より六時迄檐端で祈る、愛の燃ゆるを覺へた、會員一人／＼

を愛し、彼らを主に導かねば成らぬと思ふた、善き牧羊者のことも思つた、我と彼らとの關係は講演者と聽衆との淺い關係ではなく、永遠のかなたに迄續くのだと思ふた、一人／＼の顔も見へた、一人／＼の境遇をも考へた、心に火が起つた、集會の多少など第二第三だと思つた、五百六百の人々が集つて來てもそれが所謂聽衆ならダメだと云ふた、眞に靈に依り、愛に因つて結ばれたものでなければ力はないと思ふた。

花の會が十時過迄續いた、これから禮拜説教すべきか、大祈禱會にせんかと長い間決しかねた、小供の話中、予は一人事務所の二階に上つてそこで祈つた、何だか力の加つたやうに感じた、急に大祈禱會と云ふ聲をきゝ、忽焉しか決した。

かくて予は何か語らうとしたけれどもどうしても言が出ない、卑怯な感が起つた、何やら聖靈が自分の舌を抑へて語るのを止められたかの如く思ふた、祈るに若かずと自分直ぐ頭を垂れて祈り出した、約廿分間涙が堰き止められぬ、幾度か聲が途絶へた、「神様よ、こんな驚くべき時代に、我らクリスチャンは何たる無力な有様でせう、世人が渴いて汲まうとすれば、井戸にはもう水が涸れてゐます、何か得る事あらんと悶

へくしてあなたの會堂に入れば、牧師は冷たい説教し、信者も又形式や、習慣に捕はれて生命がありません、何たる情けないとせう、ア、神様よ……こんな教會を打破して下さい……活きた水が井戸の底から吹出すやうな生氣潑瀾たる教會……マ、神様よ、あなたの僕等の不信仰、卑怯、不熱心の罪を許して下さい……」かくて全會に祈を求むるや、七八名の男女は涙と共に祈つた、後で一婦人は「先生今日の集會はスツカリ空氣が違つてゐましたネ、眞個に涙が出ました」と謂つてゐた。

▲廿二日(火) 五時起床、大空拭ふが如く、木の間越しに朝日は輝き、小鳥は楽しく歌ふてゐた、予は先づ祈らんとして一種の重荷の双肩に懸れるを感じた、靈化運動野外集會の當日である、責任の重大を思ふた、無援孤立、神の外恃むべからざるを感じた。

梅花女學校理事會の通知があつたが、予は祈の中に辭職と決した、幾多の名譽職を身に帯びながら何らの働きをもせぬ現代の惡風潮を厭ふからである。

朝の七時頃迄祈つた、忽焉教會はイエスの名に依つて設立されてゐるのだと謂ふとに氣付いた、而して其名が未信者の前に汚されてゐるではないかと思つた、教會に這入つて來ても力がない、喜びがない、肉の病は勿論、靈的疾患も治らぬ、而して長い、冷たい、人性の切なる要求に殆んど無關心な説教計りしてゐるではないかと思つた、斯う思つた時、熱い涙の玉がハラ／＼と双頬に傳ふた、もう堪へられなく成つた、之れがどうして熱としてゐられよう、主の名が萬民に尊められ給ふ迄我は祈り且努力しようと思つた。

▲廿三日(水) 終日雨、天暗く閉づ、朝八時頃某教會の役員の一人來訪、近頃自分の教會に火の消へたるを慨し「私は寧ろ祈禱會の全廢を叫んでゐます」と、予は直ちに賛同した、然り神なき祈會、力なく、生命なき祈會は斷然廢止するに若かずと、妻は教會へ、小供は學校へ、予一人書齋に祈ると幾回、靈氣總身に迫るを覺へた。

▲廿四日(木) 天暗く、鬱陶し、朝一時頃より四時頃迄祈る、頻りに神を獲、キリストを捕へんとして悶へた、五時頃から暫し眠り、八時に起床した、教會事務所へ出で、暫時教務を執る、誰を訪問しようかと思ふてゐたが、突然一老婦人、永眠の報に接し

直ちに往く、同姉は二ヶ月前予が病床にて洗禮せし人、温良にして死に到る迄キリストの來り迎へられんことのみ俟つてゐた。

夕方附近の一商店を訪ふ、若夫人の歡迎懇篤を極む、余語ること約一時間、聖書を讀み且祈つた、不信の夫の放蕩に悶へつゝあつた彼女は落涙滂沱、爾今斷然信仰に入るべく告白した、歸途予は思ふた、かゝる氣の毒な家庭の爲めには此身を粉碎するも厭ふ所でない。

▲廿五日(金) 深夜眼醒め、横臥しながら思ふた、今後の教會は説教中心でなく、祈禱中心でなくては成らぬと、今朝フト感じた、妥協せず、調和せず、飽迄純信仰を宣傳し、實行しよう、一昨夜も數名の青年達が會堂で深更迄電燈を消して祈つたと聞き、信仰復興の徴歴然たるものあるを思ふた、今朝S、S、の一教師から手紙が來た「生れつきゾボラな小生も近頃は祈を好み、聖書の趣味を深く感ずる様に相成候、誠に不思議に存じ申候、誰か私の爲に熱烈なる祈りを捧げ居らるゝ人の有之候事と思ひ居候」

午後葬式を終り、大阪城の濠端で祈り、夕の祈禱會に臨んだ、熱火の如き祈禱は續々起り、一時間で止まず、約二時間も祈り続け、それでも足らず一度に思ひ／＼祈り出した。

▲廿六日(土) 朝庭の落葉を掃除しながら自分の信仰の未だ甚だ不徹底なことを感じた、徹底的に聖書を信じ、神の子を信するか、然らずんば故加藤博士や、中江兆民のやうに、又徹底的に一切の宗教を否定するかだと思ふた、我らの教會の今日神學上の立場程、上にも附かず、下にも附かず不徹底を極めたものはないと思ふた。

▲廿七日(日) 朝より夕迄、大雨小止みなく風さへ交つた、加ふるに大阪の月末と來た、金が生命の商人、よく／＼の人でないと思ふた、朝の禮拜八十に足らず、夕の如き二十七八名しかなかつた、が併し此日の如く恵まれた日曜は近來稀れた、朝にも力あり、特に夕の集會の何ぞ活氣に充てる、予の説教も初より終迄靈氣溢れ、引續き起る熱切の祈禱は十時に到るも猶止まなかつた、こんな晩に風雨を犯して出席するものはいよ／＼眞剣な信者か求道者のみである、千百の大聴衆にも優つて嬉しかつ

た、散會後妻と二人篠衝く雨の中を歸つた、傘は折れ、着物はビシヨ濡れ、が併し満身の喜悅に花の春野を行く感じであつた。

▲廿九日(火) 雨、昨夜遅く迄執筆、今朝七時前眼醒め、フト家庭祈禱會てふ事に氣付いた、從來の家庭集會には祈禱が足りなかつた、何故其家庭内の未信者に氣兼ねするかと自分で自分を叱つた、路傍でさへ祈るものを、何の彼らに遠慮があらうかと思ふた。



七 月

▲一日(木) 早天神と交り、力に充たされ、事務所に出で教務に忙しくしてゐると、岡山夫人が尋ねて来て先づ病兒に同情を寄せ、更に二人の娘と、一人の婦人求道者とを予に托し、今後何なりとも適當の神の御事業に自分をも用ひて貰ひたいのとてであつた。廣田書記と共に、靈化運動機關雜誌發刊の件に付色々協議を凝した暫し午睡して間もなく起き、獨坐祈禱すること多時、責任のいよ／＼重大を感じた、夕は青年等の晩食會に臨んだ。

▲二日(金) 五時眼醒めて祈る、牧者たる自分の双肩に重荷の懸つてゐることを感じた、會員中一二の悲むべき事件を耳にしたからである、家庭の悲事を公けにして彼らを慚死せしめんよりか、寧ろ牧者たる自分が全責任を負ふべきだと思つた、後で詰問さるゝやうな場合に立到らば、自分は自分の名譽と地位とを賭して彼らの爲に陳謝する迄だと思つた。

午後三時頃一食、朝より夕方迄祈り且考へた、十數種のデボーションナル、ブックを取出して讀んだ、復興運動の歴史をも調べて見た、十九世紀に於ける雄大なる講壇を論じて後「**神・秘・的・精・神**、**内・的・生・命・の・宗・教**なくんば**改・革・事・業**は全く**不・可・能・也**」との著者の言に共鳴した。此晩の祈禱會は例に依つて活氣に充ちてゐた、餘り祈と祈とが合ふたので總體一度に聲を出して祈ることを命じた、濱寺や、今津の邊から態々來たものもあつた、自分は最後に勸告の如く、祈禱の如く、神へ語るのか人に談すのか分らないやうな口調と態度で、聖前に己を顧みなければならぬことを儼かに述べた。

▲三 日(土) 昨夜十二時前就寢、今朝七時半頃醒む、疲労甚だし、昨夜來フト予が心上に懸りし一抹の輕雲容易に去らず、今朝も猶曇つた空のやうな感じがした、靈化運動の將來も思ふた、何か淋びしい氣も起つた、漸くにして椽側に危坐して祈つた、十分間にして心氣一轉、希望の光りの更に一段の色彩を放つて予が全身を取圍むが如く感せられた、今後如何に成り往くかは知らねど獨りに成つても奮戦するのみだと思つた、朝食を了つて間もなく「讓二義に付き一昨日ハートフォード神學校より電報

を以て「讓二本日(日限なし)腎臓病にて死す後書面」とのみ申來り候間不取敢御通知迄」との父杉田潮氏よりの端書に接した、ア、傷まし、可憐の青年牧師、渡米後未だ二ヶ月ならずして異郷の土と化した、老父母の胸中想ひやられる、我も又病兒を持つる身、同情の涙が出た。終日マイヤーを讀み説教の準備に忙はしかつた。

▲四 日(日) 昨夜九時過臥床、今朝四時より眼醒めて祈つた。祈に手答へがあつた、朝拜は「愛の力」夕は「神の現在」此日程二回とも講壇に自由と、恵みと、一種の靈力をとを與へられた事は少い、全會に云ひ知れぬ感激が充ちてゐた。朝夕共意外の人々が出席して、多年見なかつた古い會員達の嬉れしさうな顔や、會員の男女が夫れぞれ伴ふて來た新らしい紳士淑女達の姿も見へた、熊本から態々尋ねて來たと云ふ高等學校の一學生にも逢ふた、感謝と、希望がみんなの面に輝いてゐた。

▲五 日(月) 朝晝晩と一日に三回ゆつくり祈つた、特に薄暮、椽側で祈つた時は恍惚として、所謂「第三の天」にでも上つたかと思はれる程愉快であつた、二三の來訪者あり、次ぎの説教の準備もした。

▲六 日(火) 六時起床、一天拭ふが如し、心氣爽かに、イエスの生涯を徹底的に考へた、而して小さい、失敗だらけの自分の過去の生涯をも又思ふて見た、主の御生涯と、自分の生涯とを時々聖前に痛切に考へることが我らの信仰生活に取つての何より強いインスピレーションである。

午後二時、戸田姉宅での主婦會は例になく惠まれた、緊張した集會であつた、十五六名の婦人達が祈禱の精神に燃されてゐた、夕の靈化運動に臨んで、二三の兄弟等が話してゐる中、妻はあわただしく馳せ來つて神戸からの至急電報を手に示した、ソール院長から出てゐる、娘に關した火急の用件らしい、コレラでも起つたのか、それとも不都合な事でも仕出かしたのか、何れにしろ一刻の猶豫も成るまいと思ふと、急に胸が轟き出した、が併しそは唯一瞬間、ベンチに腰掛けた儘、暫し冥目祈つてゐると、心は安定した、最う大丈夫、何事が起つてもビクともせぬ、直ぐ立つて約半時間説教し、其儘神戸に向つた。夕十一時過ぎ女學院の門を叩き、ソール先生に逢ふて聞けばこは意外、娘を急に米國へ遊學させてはどうかと云ふ親切な相談であつた。

▲七 日(水) 今朝三時頃神戸より歸宅七時迄眠つた、疲れた儘祈りつゝ、急に元氣が出た、昨夕岡山から態々宅を訪問された東方姉のことも思ふた、自分に托せられた其弟君夫婦の爲めにも祈つた、朝早く中納姉が來訪された、慌て、夜具を收め、約半時間語つた、今日は在宅日で、終日外出しないことには成つてゐるが、木下氏の永眠とき、十時頃朝食を濟まして出て往つた。氣の毒な未亡人と、其子供達の爲めにも祈つた。夕方石田氏宮脇氏等來訪、石田氏は近來不思議に聖書が讀みたく、祈の念が抑へ難いやうに成つたと語つてゐられた。

▲八 日(木) 朝十時、釘宮牧師を訪ふた、恰度病氣療養の爲め武田尾温泉へ行くからと云ふ所であつた、娘の洋行に付て相談した、君が健康の爲めに祈らずにはゐられない、午後二時過迄、教會事務所書記と共に教務に當つた、多忙中にも時に首を垂れて祈つた、プレヤフルで、ウオチフルであるといふ事が唯自分の生命だ、此外に力の秘訣はないからだ、やはり娘の件で又神戸迄出掛けた、女學院の青々した庭で娘と語り、ソール院長にも逢ふて歸つた。

▲九 日(金) 「ア、神様よ懺悔します、此日は失敗の日でした、私が悪かつたので、準備が足りなかつたのでござります、終日萬事を抛つてあなたに近き、祈禱と、靈交とに此日を過すべく決心しながら愚かにも朝から色々の事や、訪問に妨げられ、集會の間際迄も雜務に忙殺された結果、力なく、振はず、眞に懺悔の外ありません」集會者廿四五名。

▲十日(土) 今朝眼醒めて、自分の責任の重大なことを感じた、身體疲れ終日只ウト／＼として幾度も横臥した、午後神戸から娘が歸つた、親子三人で種々渡米の相談した、隣りに往くやうだと嬉しそうに謂つてゐた、萬國地圖を引出して調べて見た、一番反對であらうと思つた母も案外平氣でニコ／＼してゐた、急にご馳走してみんなが喜んで食べた、遺憾はただ長男のゐない事であつた。

▲十一日(日) 今朝二時眼醒め五時まで約三時間、獨坐祈念を凝らした、四隣寂々、心も澄み渡り、過去、現在、未來の基督を想ひ、更に又自分の過去、現在、未來をも考へた、今日の説教の爲にも祈つた、數百の會員中、近頃欠席勝ちな男女の名をも一

々呼んで祈つた、やがて又深い／＼冥想に入つた、快云ふべからず、冥想の伴はない祈禱の力なきを感じた、S、S、朝拜、晚餐式、夕の靈化運動等此日の如く惠まれた事は稀れた、特に聖餐式の儼かで、靈味に充ちたことは自分が此教會に來て以來初めての經驗であつた、自分が祈つて直ぐ數名の兄弟等が熱涙に咽びつゝ祈つた、自分は斷へず押へ難い熱情に充たされつゝ、聖句を讀み上げた、一睡後、夕の集會の準備にも淀川畔へ往かうとする途中、「先生……」と後から呼び止められ、氣の毒な某夫人の懇請己み難く其宅迄往つた、若夫人の胸の苦しさを察して、いて、自分は同情の念禁じ難く、約一時間半懇々語り且祈つた、夫人も熱誠罩めて祈られた、さしもの大家も今はヒツソリして傭人も二三に過ぎぬ様子、氣の毒に堪へなかつた、「先生どうか此一家を救ふて下され」との切なる夫人の願ひに胸を劈かれた。

▲十二日(月) 疲勞甚しく讀書の元氣なし、娘渡米の爲め湯淺辯護士と名出牧師を訪ふ、歸宅後一睡して暫し祈る、夕食後二兒を伴ふて淀川堤上を散歩し、草生の上で遙かに六甲山巔の入目を眺めつつ小さい祈禱會を開いた、自分が祈り十三歳の献二が祈

り、十歳の弘坊が初めて口を開いて覺束なく祈つた。

▲十三日(火) 今朝三時眼醒めて祈る、天明に及んで又横に成つた、祈のルーテルの條を思んだ、ウエスレーのことも思ふた、孤獨の我はイエスの外慰むる者なきを感じた、如何に極端な不信説でも、親しい主との交りに云ひ知れぬ喜びと、自由と、元氣とを味ひつゝある自分の心を一步だも他へ動かし得るものはないと思つた、正午迄マーテルリングの著に眼を曝した、午後マルタ會を終へて暫し眠る、醒めて祈りつゝ、夕食の爲め何所へか出で行かんと念熾んなりしも、夕の集會のことが心に掛り、こんな時こそ斷食祈禱の必要ありと夕食を廢し、約二時間半事務室の二階で祈り且聖書を読んだ、靈感に充たされつゝ、公園に往き、二百餘の聽衆に向つて盛んに祈り又説教した、此夕の集會には確かに手答へのあつたことを感じた。

▲十四日(水) 昨夕公園の説教に感じたとして一人の煩悶者が態々尋ねて來た、女子大學を卒業した政子嬢が歸省の途次久しぶりに立寄つた、憲治君も來た、夕方から自分は又神戸へ行き、彼らは娘文代と三人で中の島公園へと出掛けた、昔懐かしい彼ら

の無邪氣な交遊は楽しく見へた。

▲十五日(木) 此日疲勞甚しく殆んど讀書執筆に堪へず、午後一時過ぎ迄或は眠り、或は新聞雜誌を読んだ、事務所で四時頃迄教務を取り、夕方堺日本基督教會で説教する迄、祈りと聖書を読みつゝ、約二時間を費した、第二イザヤを読んで少からず慰められた、堺教會の青年會は「歡喜に溢れて」を読んで、特に自分を招聘すべく、秋元牧師を通じて以前から懇々の依頼でつた、集會者約五十、多くは信者らしく、初から終迄随分緊張した集會で、自分は「眞劍の祈」と題して話した。

▲十九日(月) 娘留學準備の爲め、渡航免狀やら、船の世話やらで近來になく多忙を極め、去る十六日から今日迄殆んど執筆の暇がなかつた、再三神戸へ往き炎天烈日の下に眼の昏む程奔走した、其間にも勿論祈は怠らなかつた、神は頻りに自分を動かしかつた、去ればこそ土曜終日神戸で俗事に東奔西走したに係らず、翌十八日の日曜講壇は朝夕とも近頃例のない程恵まれた、全く奇蹟的であつた、極暑の砌としては集會も比較的多く、初めから終迄恩寵の充ち溢れた好集會であつた、今日も朝から又神戸に

往き、縣廳やら警察署やら駆け廻つて歸つて來た、夕方客が歸つて後、自分は椽端で心ゆく祈るのであつた。 28

▲廿日(火) 今朝二時頃フト眼醒め、何らの理由もなく一種の寂びしさど、悲愁を感じた、多分疲勞の結果であつたかも知れぬ、頭は朦朧としてゐたが間もなく歡喜が來た、浮雲一過、月は澄み渡つた、緒方老婦人令息準一君結婚式の相談に來られた。

▲廿一日(水) 朝渡邊姉來訪、都合ありて高師が濱邊に移るべく告げらる、姉は昨冬より今日迄殆んど病臥の身であつた、予別れを惜んで語る事多時、熱心共に祈つた、京都より安田君來訪、晝餐を共にし長柄迄同道した。

▲廿二日(木) 未明眼醒めて祈る九時頃家出、天下茶屋に三善氏を訪ひ、教會に歸つて暫し教務を執る、夕方石原君來訪、君は新進の工學士、目下市役所の都市計畫事業に従事してゐる人約二時間に渡つて宗教談を試みた、妻は刀根山に病兒を訪ふた、稍輕快との報を得て安堵した。

▲廿三日(金) 朝食を廢して祈禱と、默想と、讀書に務めた、長い／＼間求めて得なかつて自分終生の仕事が全く祈禱中心の宗教的實驗の獲得及び其宣傳にあることを感じた、今朝久しく讀まなかつたサバチエーの宗教哲學を繙き、何心なく其第三篇の教義に關する意見が偶然自分が「靈化」に論述した儘のものであることを發見して力強く感じた、午後岡町婦人會に臨み、夕方教會の祈禱會に臨んだ。

▲廿四日(土) 連日の疲勞に全身綿の如く成つて只無暗みに眠つた、夕も早く寢に就いた。

▲廿五日(日) 早天起き出で、祈り且説教の準備した、大阪一の天神祭で天滿附近は黒山の如き人出、朝夕の集會如何と案せられたけれども朝拜も約百名、夕は卅名餘り集つて來た、自分は或橋畔の石の上で暫し盛んな其祭禮の模様を見た、而してこんな程度の低い大阪市民を教化するには、基督教會もモット低く實際的でなくては効果がないと思つた、大勢の群衆で、押すな／＼の騒ぎの中を自分は只獨りでに押されて行きつゝ、急に熱烈な祈禱の念が起つて來て約七分間歩みながら不思議な神との交りをした、靈感暫し全身を充たして快云ふべからざるものがあつた。

▲廿六日(月) 朝來の疲勞醫へず、忽焉有馬行きと決した、過去三四年來殆んど妻子を携へて一日の清遊を試みたことはなかつたのであるが、此日は久しぶりでツヒ其氣になり、午後妻と子供の四人連れで寶塚驛迄往つた所が汽車の時刻に遅れ、日歸りには出來ぬとのことで、急に方針を代へ寶塚温泉に這入つた、小供等は少女歌劇に行き自分は風呂で悠々次ぎの日曜説教の準備した、温泉程自分の體を休め得る天然の恩恵はないのである。

▲廿七日(火) 朝の祈に力があつた、主の近きを覺へた、然し體は依然として疲れてゐる、朝食を了へるや否惰眠を催した、思ひ切つて約二時間眠つた、主婦會の婦人達が尋ねて來た、午後事務所で常盤木氏の來訪を受けた、一枚の端書を書く元氣だもなかつた、自分は祈る氣に成つた、机により懸つた儘約十分、靈を注ぎ出して祈るや、元氣勃然として起り、多日の疲勞は不思議にも、忽焉として癒された、爾來今日迄暑氣いよ／＼加はり、教務いよ／＼多忙にも係らず、疲れを覺ゆることがいよいよ減じて來た、あゝ感謝／＼。

▲廿八日(水) 朝來赤松姉と懐かしい臺北の兄弟姉妹らの噂もした、後任牧師の物色もした、間もなく妻と、赤松姉は刀根山に病兒を訪ふべく出て往つた、終日獨りで自分はカメル、モルガンの創世記及馬太傳を讀んだ、が併し得る所少く同氏の聖書に關する十數種の著述中、新舊全書の「リビング、メッセーヂ」に匹敵すべき好著はないと思つた、此二冊の書冊が餘りに有益で神興に充ちてゐたので自分は思ひ切つて他の「アナライズド、バイブル」の全部十冊を注文したが今では少々失望してゐる。

▲廿九日(木) 朝五時眼醒め、S・S・に付て考へ且祈つた、メーテルリングの「永久の生」を讀んだ、多少の益する所がなかつたではないが要するにあやふやなものだ、想像に過ぎぬ、天啓を信する外眞の安心の出來るものではない、午後は緒方家の結婚式を司式した、流石日本の名門程あつて一族親戚、多くは立派な紳士淑女であつた。

▲卅日(金) 五時起き出で、祈る、直ちに「靈化」の編輯に従事した、夕方教會に出で集會に臨んだ、が併し集會の比較的多かつたに係らず、聖靈來らず何となく寂寥を覺へた、後でS・S・校長問題で、面白からぬ風波が起つた、祈會の振はなかつた原

原が全く此にあつたことを悟つて少からず慨いた。

▲卅一日(土) 早朝椽端で祈り且説教の準備した、不思議にすん／＼思想が出て約一時間で完成された、菊地姉が來訪された、君さんが歸つて來た、文化は神戸に向つて出發した。



八 月

▲一日(日) 炎熱甚だし、朝拜約九十名、午後四時頃能勢控訴院長を其官舎に訪ひ更に某姉を回生病院の一室に見舞ひ祈禱して歸つた、S・S・の前途に付いて頭を悩ましつゝ、公園を散歩した、靈化の加はらない教育の無力なるを感ずると切に、愈よ年來の自信を明かにした、靈のバプテスマを受た人物でないといふS・S・事業にも眞の成功は出來ないと思つた、S・S・教師たるを志願して嘗なく斷られた無學なムーデーこそ實は十九世紀の米國に於ける最大最良の教師であつたと思はずにはゐられなかつた、方法は第二だ、天火に燃やされた靈でなくては到底救靈の事は出來ぬと思つた。

▲二 日(月) 近頃疲勞を覺ゆるとが少く、昨日終日の活動も今朝早起きの妨げには成らなかつた、次の日曜説教の梗概が祈りの裏に忽焉と出來上つた。

▲三 日(火) 五時祈る、自分畢生の自的は凡てを捧げて主を愛し兄弟に仕ふる外ないと思つた、途中の小成功、小失敗の如き云ふに足らぬと思つた、午後マイヤーを

耽讀した、夕方事務所へ行き公園の靈化運動に加つた、S・S・校長問題で教會に小波瀾が起つた、教師の中二三の辭職者も出た、面白からの現象である、が併し自分は餘り駭かなかつた、萬事を主に一任して感謝した、「惠の主よ、トモすれば高慢に流れ易い自分の頭をこんな出來事で打碎き、いよく謙遜にして下さることを感謝します」。

▲四 日(水) 五時頃起きて祈り且「靈化」を書いた、朝食後直神戸に行き娘や、澤氏に逢ふた、近來になき暴風雨の中を不思議に渡航免狀と、乗船券を得て夕方歸宅した、全く奇蹟だと云はれた、祈禱の答への適切な一例である、大急ぎで荷造りの準備した。

▲五 日(木) 好天氣、一家四人打揃ふて神戸沖迄見送つた、石原さんが親切にして呉れた、二瓶さん、君子さん、女學院や、兵庫教會の有志などに送られつゝ三年の別れを告げた、急に熱い涙がハラ／＼と娘の双頬を傳ふて來た、我らも又人知れず暗涙に咽んだ、十八歳八ヶ月のまだうら耻かしい娘の獨り旅、「また逢ふ日まで、神の守りなが身を離れざれ」と祈りつゝメリケン波止場へと急いだ。

▲六 日(金) 早朝から衫野老姉近所の夫人達、江指、清水兄夫婦等續々來訪、親切な辭や、餞別を受けた、夕べ祈禱會後に、S・S・問題に付いて懇談會が開かれた、次第に解決の光りが見へ出した、「何事も思ひ煩ふ勿れ」との主の教訓が今更の如く身に染みて難有く感せられた。

▲七 日(土) 午前中は祈りと讀書に費し、午後は芦屋方面の二三の婦人達を訪ふた。

▲八 日(日) 一年一度の大掃除が満悪く日曜に當つた、妻と人夫に一任して自分は早く教會に出たS・S教師の盟休(?)、一青年信徒の退會届け「靈化」の印刷に關する難題等面白からの事件が續出した、自分は幾回も事務所で祈つた、祈り／＼つて決心した、宜しい！何事が起つても大丈夫だ、行け勇ましく……瞬間でも煩悶してはならぬ、クヨ／＼思ふは不信仰だ歎へ／＼、歌へ／＼、盟休と思ふたのは間違ひであつた、間もなく辭職した教師達も出勤した、退會届を出した青年も同輩との感情の衝突で、祈禱會にはキット出席すると自分には云つてゐた、主に任して驚かざり

しとの賢かつたことを今更のやうに感じた。

午後二人の婦人達を病院に訪ふた、回生病院の藤本姉は「過ぐる日曜御尋ねを戴きましてから自分の心は急に化つて來ました、長い間消へなんとしてゐた自分の信仰も復活し、爾來毎日獨りで主に近づくことが何よりの喜びと成つて來ました、私は實に今更の如く祈りの力の偉大なことに感じました」と云つてゐられた、自分は約一時間語り且祈つて歸つた。夕の靈化運動總集會は雨の爲めに集會意の如く成らず残念であつた、が併し火は燃へてゐた、一同感謝に溢れて散會した。

▲九 日(月) 終日書簡を認め、聖書を読み、次の日曜説教の準備した、夏雨蕭條、訪ひ來る人もなかつた。

▲十日(火) 朝三時過ぎ眼醒め基督教會現時の衰頹を思ひ、今後如何にして此窮境より脱せらるべきかと考へて見た、二三の婦人達の來訪を受た、談話中、時々自分は冥目しながら主を仰いだ。

▲十一日(水) 天氣晴朗、椽側に坐して聖書を披いた、「我を遣はし、者我と共にあり父は我を獨り置きたまはず蓋われ恒に彼の心に適ふ事を行へば也」との聖句を今更の如く意味深く感じた、會員一人一人の名を呼んで祈つた、遠隔の地に淋しく暮しつゝある忠實な一姉妹の爲めに特に祈つた「シモンよ我を愛する乎」との聲も聽へた、我を「我を救」との御聲が痛切に身に染んだ、秋冷の候と共に個人及家庭の方面にも今一層活動しなければ成らぬと思ふた、心配すれば際限のない程色々困つた事が自分及び自分の家庭の上に重なつてゐる、牧會上の人知れぬ困難もあれば、「靈化」の行先も案じられる、病兒の前途、航海中の娘、ア、凡てを主に任せん哉、主は最善を爲し給はん、歎べ、日々神と偕に歩みつゝ歌つて御國の爲めに奮闘しよう、そんな幸ひな事が何處にあらうか。「ヲ、主よ汝と偕ならば生蕃の山々、千嶋の涯も、何ハ淋しいことがござりませう、あなたと共に在ることが人生最大の幸福愉快です、自分は心から野心傲慢、虚榮歡樂の交際を厭ひ、あなたと共に苦しみ、あなたと共に歌ひ、かの新天新地を俟ち望みつゝ努力し、奮闘したいのでござりまする、我を去り給ふ勿れ主よ、朝な夕なに汝に仕へ、同胞の爲、社會の爲めに死に到る迄十字架を負ふて戦はしめ給へアーメン」。

▲十二日(木) 昨夜十時頃就蓐、併しどうしたのか些しも眠られなかつた、今朝一時過ぎ戸を叩くものがあつた、駭きながら起き出づれば氣の毒な某夫人の家庭の惱みに堪へかね、深夜我らを尋ねて來たのであつた、暫し痛はり慰めつゝ亦床に這入つた、が併し自分の眼は愈々冴へて眠られなかつた、且起き且伏しては如何にして世を救はんと思ひを凝した、所詮靈化運動をヨリ強く、ヨリ盛んに推行する外何處にも途なきを感じ、更に眞劍に祈り、徹底的に信仰生活を行ふべく決して感謝した。同夕鹽屋で開かれた教師の家族會へ我等夫婦共出席した、風光明媚のゴザート嬢別荘で樂しき一夜を過ごした、集まる者十餘名、夜の更くる迄青草の上で清談時を移した、今後の傳道を如何せんとの眞摯な活問題に油が乗つて、何れも啓發さるゝ所少なからず、歡喜に充ちて歸つた。

▲十三日(金) 早天起き出て祈り且聖書を讀んだ、毎月一回禮拜説教を廢して大祈禱會と爲す事、一週に一部會づゝ訪問すると、與へられた金は例ひ些しでも先づ御前に獻げて感謝し、主の御旨に従ふて用ひ、如何なる窮境に處しても金錢の爲めに心配せず、又神にも人にも一切不平を洩らさぬ事等決心する所があつた。

▲十四日(土) マイヤー程自分此頃の信仰上の良友はない、新約丈りで、全十一冊の大部な注釋書だが、暇ある毎に愛讀してゐる、妻も小供も刀根山に往つて、自分は獨り椽側で祈つた、主の近きを感じた、會員一人づゝの爲めに祈つた、夕立一過して蟬聲涼しく、又も「靈化」に筆を取つた。

▲十五日(日) 今朝三時半より約二時間祈つた、が併しどうしたのか、思想纏まらず、種々切れぐの思ひが浮んで來た、主との聖い、親しい交際が出來なかつた、こんな時こそ幾時間かゝつても感激の來る迄祈らねば成らぬと思つたが、何時の間か疲れて寝て了つた、トロリとして直ぐ又眼醒め椽端で祈つてゐると靈氣満心、熱涙が迸つて來た。枕する所もなかりし主を懷ひ、幾夜牢獄の冷たい床に臥した古聖徒の倅など忍び、自分の今の境遇が餘りに結構過ぎて、勿體ないと思つた、一口でも不平がましいとを云へば主の前に大罪だと感じた、「神よ若し私があなたを忘れて地上に安逸の巢を造らんとしたり、虚榮を追ひ求めんとする時もあらば、オ、主よ恤みの故

に、この私の頭を打ち砕いて下さい、而して何なりと我が大切なものを奪ひ愛するものを取り給ふて、この愚かな私を無一物のドン底に迄衝き落して、かくてあなたの外世にありて何物も有たない、又何物にも愛着しない完全き自由と、愛と、歡びの人として残る生涯を送らして下さい」と祈つた。

朝夕の集會とも活氣に溢れた、睡眠は不足で、何か頭の重いやうな感じもしたが、祈つて語り出す中、力は出で、頭はハッキリして來た、何だか自分以外の何物かゞ語るやうに感ぜられた、「今日先生朝夕の御説教で、自分の靈に大變化が來ました」と一人の眞面目な青年が云つてゐた、誰か一人の紳士らしい人が二階の窓際で初めから終ひ迄自分の説教を筆記して歸つた。

▲十六日(月) 昨日の疲れもなく五時頃から起きて祈つた、全心に火の燃ゆるを覺へた、朝雲が天の一方を蔽ふてゐた、小雨もそぼ降つてゐた、が併し自分の心の中には希望の旭がキラ／＼と輝くのであつた、淀川堤上を散歩しながら靈化運動の前途を色々思ふた、神が此運動を祝すべく先づ自分の肉體上、精神上に一大打撃を與へ、打つて

／＼野心や、傲慢や、不信の一片だもない迄に粉な微塵に碎いて下さることを願ふた、所詮人を頼り、教會を頼り、富者、有力者を憚つてゐる間は神様は決して此運動を祝し給ふとは出來ぬ、自分一人成つて世間からは惡まれ教會からも排斥され、いよ／＼赤裸に成つて日毎の糧にも窮する程に到つてこそ眞物にも成り、有力な働きも出来るに相違ないと思ふた、「神様よ、聖旨の儘にして下さいませ、私はあなたの導き玉ふやうに何處にでも従つて参りませう」と心から祈ることが出來た、九時頃家出、終日教會の事務所で「靈化」の事務に執掌した。

▲十七日(火) 爽昧起き出で、祈りつゝ、主が現に近く我が前に立ち給ふを感じた、「オ、主よ」とマリヤのやうに其御足を抱いて拜したく思ふた、而して直ぐテーブルに向つて「教會振興の途如何」を一氣呵成に書き了つた、朝から教會へ出て行つた夕方迄「靈化」の事務を取つた、時に思ひ出したやうに會堂に往つて心ゆく計り祈り、直ぐ又歸つて事務に當るのであつた。

▲十八日(水) 此日程痛切に「我が羔を救へ」との主のみ聲を聞いたとはなかつた、

過去に於ける自分の牧會的努力が如何に足りなかつたか、不信仰な、我儘信者に對して如何に卑怯であつたか、密かに罪を犯して何喰はぬ顔してゐるものに向ひ「爾は其人なり」と的面に責めて、主の御前に懺悔告白せしむるとの如何に困難にして、兎角それを避けよう／＼とした自分には如何に主の愛と、其愛より出づる勇氣の欠乏しつゝあつたかと云ふことを痛切に示された、自分は直ぐ跪いて主に懺悔した、それが實に牧者たるものゝ最大の罪であり、又怠りであることを感じたからである。

テーブルに向つて、一冊のノートを取出して直ぐそれに全會員の姓名を書いた、今後は何時誰を訪問し、何を語つたかを書いて置いて一年終らばそれをみ前に持出して總勘定しようと思つたからである、こう考へて見ると兎ても詰らぬ雜談や、お機嫌取りの挨拶などとしてはゐられぬ、訪問するや否直ぐ信仰談を持出して共に祈つて歸る迄にせねば成らぬ、少々非常識だと思はれる位などは致し方がない、次第に了解されて來よう、只困つたとは大阪商人は忙はしいとて、愚圖／＼してゐては一回で人が懲りて了ふ、機敏で、賢くて而かも神靈に充たされてゐない以上大阪のやうな大都會

では一日だも有効な牧會的事業に従事することは出來ないのである、夕は二人の小供等を連れて「時の博覽會場」に往つた。

▲十九日(木) 今朝はどうしたものかピツタリと主に接觸することが出來なかつた、已むなく朝から「靈化」に筆を取つた、「歡喜に溢れて」に對する幾多の知人、朋友、さしては未知の友達の過分な賞讃の辭や、自分如き不信不徳の僕に對する共鳴の手紙、敬慕の文句など思ひ出し、其書簡や端書を見つゝ、自分は嬉しく感ずると共に空怖ろしいやうな一種心苦しい思ひがした、自分は果してそんな賞讃に値するものであらうか、彼らが自分の欠點や、悪評を見聞きし、又は親しく實物に接した時に感ずるであらうと思はるゝ失望、淋しさ、輕侮の色など考へ出して自分の心は時ならず動搖した、直ぐ椅子から降りて跪いて御前に祈つた、熱い涙が頬を濕し、果ては双頬を傳ふて來た、「オ、主よどうか此不信の私を猶も／＼清化し、純化し給ふて眞に兄弟らの善き模範と成り、活ける信仰と、愛の化体と成し給へ「アーメン」

午後は刀根山に病兒を訪ひ、更に池田の會員二家族をも尋ねた、予は雜談を避け直ち

に信仰の勧めを爲し祈つて歸つた、夕は脱會届を出した一青年が尋ねて來、懇々語ると多時、遂に自分も祈り彼も祈つた。「神様どうぞ私をして人の罪を赦させ給へ、心機一轉、今より一層教會の爲めにも、日曜學校の爲めにも盡させ給へ」と、ア、可憐の好青年、彼は一時的感情に打勝ち、今後益々信仰の人たらんとを盟ふて喜んで歸つた。

▲二十日(金) 午前中聖書と二三の神學書に没頭し、主の晚餐に付いて特に研究した、午後は久しく禮拜に欠席せる某婦人を訪ひ暫し信仰談を試みた、姉は膝を進めて喜んで聽き、今後一層信仰生活に進むべく約束された、自分は靈感に充たされつゝ熱禱を捧げて別れを告げた、外は狂風土砂を上げ、雨さへ交つて近頃稀れな悪天氣、自分には更に二三の人々を訪ふべく眼も昏む計りの紅塵萬丈の中をあちこちへと走つた、夕方教會の事務所へ往き暫時又事務を取つた。

▲廿一日(土) 遺失

▲廿二日(日) 今朝二時頃眼醒め、約一二時間祈り且考へた。人生の不幸と云ふ不幸を盡く假定して主の御前に並べ立て、而して「主よ聖旨の儘を成し給へ」と祈つた。

二人の幼い小供らが水に溺れて死骸に成つて歸つて來た、多年忠實に仕へた妻が病死した、娘の乗つた船が沈没した、病院から長男危篤の電報が來たと云つたやうな、ヨブ同様な、あらゆる不祥事を實際の事實の如く思ふて見た、暫時苦しみ悶へた、が併し榮光の主、基督を仰ぎ、父の御國の光り輝く光景や、死の決して世人の想像する如く恐るべく、悲しむべきものに非ざるを感じ、靈界及び自然界を支配し給ふ主の萬福の御手を信じ、生と死が一枚と化つて、地上にあるも、御國に入るも神を愛するものに於ては何らの隔てなきを思ふて歡喜平安潮の如く充ち來り、「オ、主よ、萬事を御手に任せ奉る」と覺へず叫んだ、又横に成つた、六時眼覺めた、二三日來の陰鬱の空珍らしく霽れて庭樹洗ふが如く涼しさを覺へた。此朝教會は近頃になく出席者が少かつた、極暑の節、旅行者もあり、病人あり、種々の事情から來たとであらうけれども何となく心淋しく感せられた、説教にも活氣乏しく、疲れは反對に強かつた、午後一二の婦人達を訪ふて祈り、夕はやゝ元氣を恢復し「ペテロの幻視」と題して語つた、が併し何となく暗雲に掩はれつゝ歸宅、床に入つても一種の重荷の依然として肩の上に懸

れる思ひであつた。

▲廿三日(月) 今朝六時頃眼醒め、昨日の心的暗雲なごりなく晴れ、希望輝き、嬉しく御顔を仰いだ、目前の一时的成敗や、人の好悪の感情など齒牙にも掛けず、倒れては起き、失敗しては更に一段の勇氣を振つて前進すべく決心し歡びは起つて來た、十時頃浪華教會の一老紳士が來訪された、氏は數十年來同教會の柱石たる人であつたが、近頃頻りに天主教に心を傾むけ、種々予に相談された、組合教會と天主教、極端と極端との意外の接近は珍らしく感ぜられる、が併し自分は多少の暗示を與へられた、故澤山牧師以來熱心忠實の組合教會員たりし同氏が今此老境に及んで、ゆくりなく天主教に耳を傾むけらるゝに到つた深い動機の裏には、如何に人間靈性の已み難き要求が、今日の淺薄な神學說や、社會問題などに依つて満足されず更に高い、確乎たる靈的基礎に安立すべく氏を促進しつゝあるかを感じて同情を禁じ得なかつた、併し自分は特に氏に注意して置いた「神の喜び給ふ事は天主教徒たることでも新教徒たることでもない、只毎日活ける主と偕に歩んで愛を實行する事だ」と、夕は岡納氏の一年祭

に臨んで一場の獎勵を述べた。

▲廿四日(火) 今朝祈りの中に哥林多後書四章を讀み「われら何處へ往くにも常にイエスの死を身に負へり、此はイエスの生けることを我儕の身に顯れしむる也」との一句を細讀沈思した、「イエス猶生けり」との無邪氣な信仰が新約信者の力の源泉で、水火の迫害にも喜んでツキ進まじめた秘訣である、此信仰が薄らいで來ると同時に信者の信仰生活が次第に生命を失ふて、果ては小さい罪にさへ打勝てなく成つて了つたのであると思つた。教會の七名の青年等が去る日曜、舟を西の宮沖に浮べ、逆浪の爲めに顛覆し、危く救助船で救はれたとの新聞の記事を讀んで驚いたが、幸ひ一人にも怪我はなかつた、否怪我どころか却て信仰上の益と成つて、何れも今後眞劍な信仰生活に入るべく決心してゐる、感謝の外ない、凡てが神の聖なる救ひの手段である。酷熱やくが如き中を朝から所々訪問して見たが旅行者が多く、不結果に終つた、暑中はやはり活動の時ではなく修養の時だ、西の宮から熱心な一婦人が態々自分を尋ねて來て種々家庭の相談があつた。公園での靈化運動は例に依つて多數の人々が靜聽したが、

夜分は冷氣や、加はり來り、以前程の人出がなく成つた、最う一二回で切上げねば成るまいと思つた。

▲廿五日(水) 五時起床、祈る、洗ふが如き朝日影、清新の氣が田にも、庭にも充ちてゐた、自分は久し振りにジョンを連れて涼しい暇道を散歩した、妻は阪神方面へ行き、自分は獨りで聖書を読んだ、午後二人の來客があつて暫し語つた、廿年も前に讀んだ古い博士デールの著書を取り出して又讀んで見た、思想穩健、信仰の活火燃ゆる共鳴する點が少くなかつた、夕風涼しく、何となく秋の氣が充ちて來た、活動の時の來るのが俟ち遠しい、久しぶりに燈下親しく讀書執筆することが出來た。

▲廿六日(木) 五時眼醒めて祈る、「靈化」及び「靈化運動」の將來に付いて思ひを凝した、「靈化」の經濟的困難を主に訴へた、秋以後の「靈化運動」の方法に付いても主の特別なる指導を請ふた、凡ては活ける主の力に依つて立つ外ない、徒らに心配するのは罪だと思つた、ア、心地好き朝よ、爽味よ「我しのゝめを呼び醒まささん」。天王寺齒科醫院の手術を受けて、科學の恩惠を感じた、痛い／＼と云つて頬をかへてゐる必要はないと思つた、午後大連の今井兄が態々二回も來訪された、「歡喜に溢れて」の愛讀者で、手紙での交際であるが十年知己の感がした、「靈化運動」にも共鳴し、即座に加名された、滿洲の野に歸つて此運動を推進めようとの熱心を歡び共に祈つて別れた、五時頃阪神の打出の濱に阿波野兄を訪ふた、夕風涼しく晩食を戴きながら種々信仰上の勧めをした、夫婦とも喜びに充ち遂に決心して來九月受洗の事と成つた、九時頃祈りと共に暇を告げて歸つた。

▲廿七日(金) 今朝四時眼醒めて祈る、秋冷と共に愈々祈禱は眞劍に、戦ひは血の出る迄に衝き進まねば成らぬとを感じた、組合教會の現状を慨き、信者も教役者も元の單純な福音に歸つて謙遜し、悔改しない以上、到底行詰りの外ないと思つた、われ火を地に投入れん爲に來れり」との御言を沈思すると多時、縦令小さい炬火の一つでも自分如きものを用ひて現今の諸教會に投じさせ給ふならば此上の光榮はないと思つた、それが爲に排斥されて全く孤立と成らうが、組合教會は勿論、天下の諸教會から棄てられて一家餓死しようが厭ふ所ではないと思つた。轟然爆然たる大雷雨の下、御

城附近の某氏の二階で、二人の姉妹に悠々信仰談を試みた、空が霽れるや否直ぐ五六名の信者求道者の宅を訪れた、久しく教會で顔見なかつた小野姉が別人かと想はるる計りに憔悴して二ヶ月餘り大病で打臥してゐたことを聞き、今更の如く訪問の足りなかつたことを悔た。夕は依然たる雷鳴、霹靂、降雨小止みなく、僅か十名計りの熱心な會員達と心ゆく計り祈つた、自分は此夕の如くイエス猶生けりとの強い感に打たれたとはなかつたのである。

▲廿八日(土)早天祈り且聖書を繙きつゝ活ける主の前に參拜九拜して、其衣の裾にだも觸れんものと心を碎いた、「我汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ」とのお言葉を聽いては心に浮ぶ某々の爲めに執成しの祈をした、「なんぢら己がために財寶を地に積むな」との御命令に全然服従した、「まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし」との儼かな御約束を心から嬉しく。有難く感じた、明日の説教の組立が冥目の裏に、殆んど一瞬間にとろ／＼と出来上つた、尤も過ぐる日曜夕から今朝迄讀み且考へた結果が祈りの中に俄然自分の頭の中

中に活き且動いて、忽焉と形成されたのに外ならぬ、ア、嬉しい、重荷が降された、今日は土曜日ながら洗禮志願者の二三の婦人達を訪ふとしよう、昨雨餘波なく晴れて庭樹欣々、何處からか勇ましいラツパの音が響いてゐた。

▲廿九日(日) 月末の日曜集會は何時も淋しい、流石大阪は商賣本位だ、月末や、節期に當つた日曜に出て來るものは能く／＼の熱心家か、暇人である、今朝の禮拜出席者約七十、夕は四十餘名に過ぎなかつた、併し自分は朝夕とも元氣好く説教した、近頃頻りに自分の頭を熱せしめ、緊張せしむる一問題がある、が併し天機漏すべからず、此には書くことを控へよう、之れは決して自分一身の小利害や、一天滿教會の小問題ではない、我組合教會全體の興廢に關する根本問題である、ア、公義行はれず、主の御旨蹂躪せらる、嘆すべき哉。

▲卅日(月) 五時眼醒めて祈り頻りに組合教會の現状と、其前途を想ふ、自分は黙すべく努めた、が併し主は許し給はぬ、どうしても絶叫する外ないと思つた、狂と呼ばれ、愚と誹らるゝは覺悟の前、そんな事は一切神に任じて猛進すべく決した、午後

一二會員を訪ふべく三嶋郡の或山村迄歩んで行つた、炎熱百度に達し眼は昏む計りであつたが懇々活ける基督を説いて歸つた、夕方小川に沿ふた、涼しい草路を辿りつゝ、自分はつくづくと組合教會の現状や、自分の前途に就いて祈り且考へた、「妥協は死也、十字架は生也」とは此年元旦、主から親しく承つた自分一生の警句である、然り飽く迄十字架の生命の路を辿らう、信仰上にも、實際道德の上にも斷じて妥協的曖昧な態度は探るまいと覺悟して云ひ知れぬ感謝と嬉しさを感じた。

▲卅一日(火) 午前一時頃眼醒めて祈り、三時過ぎ迄靜かな、併し愉快な主との交りをした、再び甘睡して間もなく起き、直ぐペンを取つた、「時代遅れ」の主論約二時間出来上つた、長男の病狀面白からず、歸宅療養の已むなきを感じた、凡てが御旨と明めて感謝した、心に懸かる數々の問題がある、暗雲時に全身を取捲くかの如く感ぜらるゝともある、自己の弱さを思ふ毎に、萬事を主の御手に一任して不思議の力と、平安を興へられ、今更の如く信仰の如何に大切なるかを痛切に感せずにはゐられない。午後妻は病兒を訪ふべく刀根山へ行き、自分は獨り淋しく種々の物思ひに沈んだ、長ら

く顔を見せなかつた一會員が突然訪づれて來た、彼は嬉しさうに「先生、自分は先日「歡喜に溢れて」を読んで今更の如く祈禱の必要を感じました、「靈化」に依つて恵まれた」云々と云つた、而して彼は椽側に腰打掛けた儘熱心に祈り、自分も又祈つて別れた。夕は公園の靈化運動に臨んだ、例の如く恵まれた集會で約二百名は靜聽した、「靈化」第二號の支拂に付いて心配し、頻りに神に祈つてゐたが、此日不思議に北海道の柏塚君から「靈化」印刷費用の萬分の一に資する爲め金十圓を献じ度封入仕候」と謂つて來た、近頃こんな嬉しく感じたことはない、全く祈禱の應驗であると思つて感謝した。



▲一 日(水) 薄ッすらとガラス窓が白く成つた頃、起きて祈り井戸側で水浴し、久しぶりに西の方六甲の雄姿を眺めつゝ小川の畦を散歩した、朝食後間もなく求道者の熱心な若い一婦人が尋ねて来た、高等師範出身で、目下病氣療養中の人、優しい謙遜な態度と、神を求めて禁せんとして禁じ難い敬虔な心とは自分をして覺へず二時間の長きに亘つて福音を説かしむるに到つた、晝後又一人の求道者の婦人が訪れて来た、自分は初めから世間話など一切止めて直ちにイエスが我々の現在の救ひ主であること、彼に依つてのみ人間靈肉の病ひ、痛みも、煩悶も救はれ、贖はるゝの事を強く説いた、二人とも喜んで歸つた、夕方から雷鳴甚だしく雲行急であつたが、二百十日も先づく無事に過ぎした、妻は大阪へ、自分は獨りケントに依つてアモス書を研究し、野の豫言者の勇ましい風姿を偲んだ。

▲二 日(木) 昨夜九時就寢、今朝三時半に眼醒めた、直ちに起きてアモス書讀

了、感無量であつた、三千年前のアモスの時代も今日も不都合なる社會の狀態に於て何らの進歩がない、人類は進歩するのか退歩するのか疑はしく成る、若し富者の横暴や、權力の濫用に反抗し、對戦するのが社會主義者なら、手段こそ違へ、アモスも又立派な社會主義者の一人であつたとも云へる、齒科醫院通ひ、二三の會員訪問、事務所夕方迄忙殺さる、歸れば急報あり、進藤姉入院、危篤に近しと、余は跪いて彼と其家族の爲めに祈つた。十二時頃廣田君戸を叩く、曰く進藤姉永眠と噫。

▲三 日(金) 早朝祈りの中にボゼヤを讀む、九時頃進藤家を訪ふ、一家愁然、昨夜危篤に迫るや、娘に祈るべく求めたさうで、武本牧師を呼んで祈つて戴いてはどうかと尋ねると、『然り』と首肯いたと、早速人を自分の宅へ送つたのであつたが、折悪く昨日は早朝から夕べ遅く迄東奔西走して漸く歸宅後に耳にしたやうな譯、遺憾ながら臨終に逢ふことが出来なかつたのである、種々葬儀の準備や相談に預り、再び天王寺の齒科病院へ行く、事務所へ歸つて四時頃迄執務、直ちに飛び出して二人の婦人訪問、何れも歡喜に溢れた、靈の働きの著しきを感じた、夕食後獨り二階で祈ると約二十分、

祈禱會に臨んだ、集會者約十八九名、何となく淋しきを感じた、尤も此夕のやうに暑かつた事は夏以來初てのことであつた。

▲四 日(土) 朝や、疲れを覺へて六時過ぎ迄横臥した、今日の葬式、明日の禮拜説教等考へつゝ時を移した、午後二時半家庭で告別式を擧げた、同四時會堂で葬儀執行、自分は約十五分間頗る緊張たる態度で説教した、遺骸を前に置きつゝ泣く勿れと謂ひ、徒らに泣くは不孝だ、寧ろ勇ましく「母上さん左様なら之れでお別れ致します、長らく御世話に成りました、どうか御安心下さい、私共之から一生懸命に勉強し、努力して神様とあなたの御心を貫徹すべく務めます」と云つて毅然として立つのがクリスチャーンの態度でなくてはならぬと懇々勧めた、三臺の自働車で阿邊野の葬儀所へと送つた、自働車に自分ら夫婦と三人の上品な娘達と同乗した、其中の一人が過日兄を送つて横濱にサイペリヤ丸を尋ねた時、娘文代に逢つたことを語り、丈夫で、嬉しさうにして被入つたことを聞いて安堵した。

▲五 日(日) 此の日を特にS・S献身日と稱し、朝夕ともS・Sに關する説教及び獎勵をした、集會も朝は百名、夕は約四十名で頗る緊張してゐた、午後一睡後事務所で獨り祈つてゐると誰か御免と云つて這入つて來た、が併し自分は微動だもせず、勿論又返事もしないで其儘約半時間も祈つた、膝に置いた手は汗に滲んでゐた、心氣昂然雲に入るの概があつた、何時の間か狐鼠く其人は逃げて行つて自分一人親しく神に交ることが出來た、夕説教後洗禮志願者へ對して種々獎勵した、今度は比較的熟したものが多く、何れも熱心な祈禱を以て洗禮の日を俟ち焦れてゐる。

▲六 日(月) 午前八時頃家出、齒科醫及び活版所へ行き、直ぐ事務所へ引返し、炎熱と煤煙の中を獨りでコツ／＼洗禮志願者の宅を戸別訪問した。夕方涼を趁ふて附近の畦道を散歩し、燈下種々の物思ひに沈んだ、或重大な問題は晝となく夜となく自分の心を動搖せしむるのであつた、一種無形の迫害が自身の身の上に切迫し來るを感じた、併し感謝しなければ成らぬ、こう云ふことが自身の信仰と人格とを鍛鍊して神に到らしむるからである、出雲の片田舎から初めて東京に出た時の事も想ひ出した、昔懐かしい感じもした、二十餘年を経過した今日、モ一度若返つて當時のやうな怖れと、希

望ど、嬉しみに満ちた青春の日を送つて見たいとも想つた、秋の虫が哀れに庭前の草にすだいてゐた。

▲七 日(火) 早朝から會員の訪問に出掛け夕方に及んだ、過日來少々眼を痛めて讀書し得ないからである、酷熱百度近くの炎天熱砂を踏んでの宅訪問は随分こたへた、悪いとは思ひながら覺へず二三度も水を飲んだ、夕公園での「靈化運動」は中々盛んな集會であつたけれども、泥酔した一労働者に妨げられて思ふやうには行かなかつた。

▲八 日(水) 昨夕初めて公園の「靈化運動」に臨み、それより天滿教會を訪れて「靈化」を讀み感ずる所があつたと謂つて今朝一人の帝大法科學生某君が態々自分の宅を來訪された、互ひに語ると約一時間、其眞摯熱誠の態度は自分をして覺へず敬意を拂はしめた「勸喜に溢れて」一冊を購ひ、今後「靈化」の購讀者たるを約して歸つた、久しぶりに附近の女子神學校の森蔭を散歩した、涼しい雨がポツ／＼降つて來た、午後來訪者なく獨り祈禱と沈思に耽つた、僧峨山曰「釋迦や、達磨が頼ん下來ても許さぬ時は許さぬ、王公貴人でも法の爲めには人情はない」と、佛者が好く云ふ「釋迦何人ぞ

我何人ぞ」の意を漏らしたものであらう、そこに佛教の特色がある基督教徒の基督に對する意識とは全然其根底を異にしてゐる事が判る、我らに取つては基督は道であり、眞理であり、法それ自身である、基督の外に法もなく、眞理もないのだ、従つて基督と合體するのは直ちに眞理と合一するのだから「ヤン何人ぞ我何人ぞ」と云つたやうな別々の感じの起らう筈はない、我等は基督の奴隸である、彼の前には屈從あるのみ、峨山の言は如何にも豪壯だが「最早我生くるに非ず、基督我にありて生る也」と云つたパウロの信仰の方がどれだけ宗教的、意味深長であるか分らぬ、要は二教立脚の地の根本から違つた所を示してゐる。

▲九 日(木) 過日來頻りに自分の心を亂しつゝあつた一問題で途行く時も、食事中も種々思案して祈つた、半宵夢冷やかに、往を想ひ、來を考へて眠り難きとも屢々であつた、今日も朝來それが爲めに少からず悶へた、お耻かしい事ながら日に幾回か思ひは猫の眼玉のやうに回轉した、が併し今日午後四時頃天王寺邊の或家族を訪問しつゝ、途中忽焉として開悟した、曰く沈黙、曰く超越と、之れ全く祈りの答へであつた、此間

題に付いて自分一生の方針も決つた、人間の眞價は人に依つて上下損益され得るものではない、富者が如何に持上げても一厘も増しはせぬ、權者が極力排斥しても、一毫も減損せぬ所に眞の人格的價値が存するのである。

▲十日(金) 此朝久しぶりに淀川畔で祈つた、白砂の上に跪いて、遙かに登る旭を仰ぎつゝ祈つた、嬉し涙が潜々と袂を濡した、金曜は終日自分の祈りと、靜思と、絶食の日に決めてはゐるが度々妨げられる、遺憾だ、力の無く成る所以がそこにある。午後も又心ゆく計り祈つた、次第に神の御旨が明らかに成るかの如く思はれて感謝に堪へぬ。

▲十一日(土) 東の空の朝雲漸く霽れて雨も止んだ、自分の心もすが／＼しく何のわだかまりもない實に愉快だ、が併し縁側で暫し祈り、現時諸教會の形勢と自分の過去の働きの如何に鈍く、不成功であつたかに思ひ到る時、急に心の海は荒れ出した、今後の傳道方針に迷ひ出した、一層の事狂と成り痴と成つて社會に突撃しようかと思ふた、所詮ありふれた、妥協的態度では百年経つても餘な仕事は出来まいと思ふた、「我火

を地に投入れん爲に來れり」主のみ足跡を踏んで往かうとするものが徒らに平和／＼と唱へて、事勿れ主義で、自分一身の安全のみ期する世の所謂利巧者の眞似を爲すべきであらうかと思つた、自分の生涯も之れからどう激變するかも知れぬ、只どこ／＼迄も一心に主のみ足跡を踏んで行きたいと思ふた、午後久しぶりに獨りで六甲登りした、温泉に這入り、松原つゞきの小高い岩の上で頻りに祈つた、大阪灣や西の宮沖を眼下に視た、壯大雄美の光景は繪も及ばぬ、夕方歸つて間もなく石原君が尋ねて來た、約二時間に亘つて宗教談を試みた。

▲十二日(日) 冷氣急に加はり、朝夕は如何にも秋めいて來た、今朝歡喜に溢れて祈り、八時過ぎ教會へ出た、例に依つてS・S・教師の祈禱會、師範科生徒へ舊約の講義、直ぐ又兒童説教、引續き一般の禮拜説教と云ふやうな譯で眼が廻る程忙がしかつた、自分は近來全く説教の草稿を書かぬ、それで却て一倍の苦心と注意が要る、今朝は基督と我らの人格的結合に付いて語つた、約四十分間自分近來の信仰の立場を明かにした、「お恥しい事ながら自分の過去三十餘年間の信仰生活が如何にも不徹底極まつ

たものであつた事を痛切に感じ、今後は飽く迄活ける。基督を以て現在の救ひ主とし、絶対の信頼を彼に置き、怖れず、驚かず只一文字に彼の爲めに大膽に残る半生を送りたいものだ」と結んだ時、司會者の今井君が堅く「自分の手を握つて感謝の意を表してゐた、十數名の洗禮志願者の告白會が直ぐ開かれた、多くは一年以上に亘つて訓練された人々で、彼らが如何に靈化運動の爲めに奮闘したか、其祈りが如何に熱烈火の如くであるか、恐らく近頃にならない理想的の志願者であらう、「靈化」三號が出来上つた、紙も、印刷も満足な出来で少からず喜んだ、一睡後三四名の會員達を訪ひ、夕は靈化運動の總集會に臨んだ。

▲十三日(月) 今朝九時頃家出、久しぶりに濱寺の松尾君を訪ふた、結核症の末期だと云ふに全然醫藥を廢し、熱だも計らず、元氣旺盛、語ると約三時間にして疲勞の様子も見受けなかつた、君が心機一轉の動機は全く從來ユニテリアンの傾向から純乎たる福音主義の信仰に立ち復つたとださうで信仰の威力の如何に強く、其前には微菌も何もあつたものでないことを感せしめられた、祈つて別れた、高師が濱に病餘の渡邊

姉を訪ふた。約半ヶ年以上も寝た切りであつた人が、不思議に元氣付いて久しい憔悴の影も消へて見へなかつた、磯慣れ松の下、白い砂塚の上迄往つて、遙かに仰ぐ六甲の雄姿、廣々とした、穩かな海の潮風に吹かれながら暫し共に祈つた。

▲十四日(火) 今朝少し疲れ五時頃醒めたけれども寝た儘、説教の準備した、六時過ぎ起床、庭の落葉を拂ふた、微菌も神の創造物だ、何かの必要がなくては成らぬ、漫りに怖るゝは不信仰だと思つた、「生命の鍵は只あなた御一人の占有物です、何人も如何ともし得る所ではありませんね、壯者必ずしも長命ならず、病者も意外に永く生命の日を樂んでゐます、ア、主よ一切をみ手に委ねます、生死々度外視して戦ひます」と祈つた、午後マルタ會、記念會等に臨み、夕方公園に往つた、雨後の冷氣身に染て、人出稀に、愈々靈化運動屋外集會も來年の夏迄中止の外なきを感じた、二名の兄弟らと熱心感謝を捧げて歸つた。

▲十五日(水) 朝五時頃から約二時間、活ける基督の現在と、力と、救ひと、自分今後の信仰の歩みに就いて千々に思ふた、天暗く小雨、終日來訪者なく、一二回附

近を散歩した外、久しぶりに全然讀書に没頭した。

▲十六日(木) 朝四時頃目醒め、心地好く主に接した、空も霽れ雨も止んだ、直ぐ「靈化」に筆を取つた、九時より午後三時過ぎ迄會堂で事務を取り、それから玉造鶴橋邊の暫らく教會に遠つてゐた兄弟らを探ねた、喜びの中に祈つて別れた、到る所、家をも、人をも靈化するのが我らの任務である、不信、無頓着、冷笑、疑惑の空氣の中に這入つて、それに化せられるでなく、猛然として其中に火を投じ、自ら祈り、他をも祈らしめ、懺悔せしむるのでないと戸別訪問は有害でないにしても多くは無益だ。

▲十七日(金) 終日祈禱と斷食と家庭訪問、或は病床で祈り、或は聖書の講義を爲し、確かに六七人の靈は捉へた、終日絶食、パンの一片だも口にせず、胃に絶對の安息を與へた、胃の安息日は靈の活動日だ、靈が非常に活動する時は案外飢も疲れも感じないものである、夕は教會の祈禱會に臨んだ。

▲十八日(土) 午前中稻田の二三の會員達を訪ふた、汽車中も頻りに語學の練習した、午後は書齋に、森蔭に説教の準備した、ウエスレーがどんな多忙な時でも歴史を

書いたり、佛蘭西語を練習したりした事を思ひ出した、自分は毎日説教やら訪問やらで多忙であるが併し一日でも善き書冊を読まずには置かぬ覺悟だ、夕はビルグリム、フアザースに付いて讀んだ。

▲十九日(日) 五時起床、受洗者一人／＼の爲めに祈つた、緊張せる好集會、百三十餘名のものが靈化に浴した、午後は西野田邊の二三の家族を訪問し、厚く歓迎された、夕の説教後新淀川停留所の上で、偶然求道者の一人に逢つた、「何處へ」と尋ねると「淀川畔迄祈りの爲めに」と答へた、彼は或商家の番頭で、靈化運動が結んだ實、此の七月頃、結婚問題で煩悶し、中の島公園をぶらついてゐる中、フト説教に耳を傾むけたのが元で、天滿教會へ出席する身と成り、其後目立て信仰に進み、信者も及ばぬ熱心の祈をしつゝある人、「近頃自分は不思議に心機一轉し、以前の不平も煩悶もスツカリ解けて了ひ實に感謝に堪へませぬ」と云つてゐた。

▲廿一日(月) 日曜終日の疲れも出ず、朝五時頃から祈りと讀書に時の移るを忘れた、祈つて／＼靈化の四方に燃へ上る迄祈らう、働いて／＼五體の碎けて動けなく成

る迄活動して見ようなど思ふた、午後又訪問に出掛けた。

▲廿一日(火) 午前中イザヤ書研究、午後は主婦會、訪問、夕は「靈化運動」の感謝慰勞會に臨んだ、十七八名の加盟者事務所の二階で歡びに充たされつゝ、祈り、感謝し今後の方針に付いて凝議した、毎月二回日曜夕の説教會を代へて靈化運動の特別集會とする事、祈禱會の司會を全廢し、牧師も、役員も皆見へざる司會者の前に俯伏して祈るとに一決した。

▲廿二日(水) 預言者ミカを特に研究した、が併しどうしたものか種々なる事件が心懸りに成つて、一抹の輕雲の容易に拂ひ難きを感じた、屢々祈つた、主の我が前にゐますを思ふた、併し依然として一種の心の重荷は去らなかつた、多分睡眠不足の結果であらうとも思ふた、暫らく横に成つて午睡もした、附近の森蔭も散歩した、在宅日であつたけれども一二の婦人達が來ただけで直ぐ歸つて行つた。マイヤーを讀んだ、午後四時頃忽焉として一種の感動が來た、幼兒の如く信せよと叫ぶやうに聽こへた、信仰上、品性上、幾多の危險と弱點とを持つてゐる三四の兄弟等の爲めに祈つた、彼

らの中に基督の像成る迄は自分はどんな犠牲でも、忍耐でも喜んでしようと思ふた、かくて朝からの重荷が降り、雲が晴れて得も云への快活歡喜の心に化つた。夕は浪華教會で開かれた總會準備會に臨席した。

▲廿三日(木) 祭日、好天氣、刀根山に病兒を訪ひ、歸途豊中に一二氏を尋ね、歸來終日豫言書を讀んだ。

▲廿四日(金) 終日絶食、朝から會堂へ出で、事務を取つた、「靈化」に對する共鳴の手紙が數々來てゐる、其返事を認めて直ぐ訪問に出掛けた、店頭にも庭先にも神の福音を説いた、秋雨蕭條たる中に七八軒の信者の家庭を訪ふた、或老紳士と二階で暫らく語つた、古武士で、精神治療に従事する人、活ける基督に付いて語つた時「今日は端なくあなたの來訪に依つて我家庭は潔められました、實に感謝します」と謂つて共に祈り、金一封を「靈化」に寄附された、事務所に歸つて久しく怠つてゐた英文日記を認めた、祈禱會には約五十名の男女が雨をも厭はず集まつて來た、司會者は誰もゐない、空テールブルに向つて祈つた、かしこに主が司會してゐらるゝとを一同が痛切に感じた、終

つて新入會員の歓迎會あり、十時頃迄無邪氣に、愉快に語つた、娘から桑港上陸後の第一信が着いた、「船中では大元氣で一度も食堂を欠がしたとがなかつた、餘興や、運動會で一等賞を得た、五六時間自動車で桑港を見物した、何もかも廣いのと美はしいので驚いた、明後日桑港發の列車でニューヨーク正金銀行支店長工藤さんの一家族其他とシカゴに向けて出立します、何も心配などはありませんでした、眞に面白く二十餘日を過しました、父さんや、母さんが一生懸命に祈つて下さる祈禱の御蔭だと感謝してゐます」と書いて來た。

▲廿五日(土) 終日在宅、説教講演の準備に忙はしかつた、夕方雷雨、妻は公會堂の大音樂會へ、自分は子供らと愉快に語りつゝ九時頃床に入つた。

▲廿六日(日) 五時起床、約一時間祈る、朝夕とも主は講壇に不思議の力を與へ給ふた、朝は主の活けることを説いて靈氣滿堂、自分は覺へず感激の涙を注いだ、言語が杜絶した、「自分は今朝の禮拜中泣けてゝ仕方がありませんでした、今日自分は初めて信仰生活に這入つたやうな心地がしました」と某姉が言つてゐられた、王女會も十

四五名のものが非常に恵まれてゐた、二時過ぎやゝ睡眠を催したけれども強ひて市電に乗代へ深江停留所下車、病餘の杉本姉を訪ふた、此の二三日來心は暗雲に塞がれてゐたのに、今日の御訪問でスツカリ雲も霽れ、疑惑も解けましたとの喜び、熱い感謝の涙と共に祈つて別れた、夕方事務所テーブルに凭つ掛つた儘約二三分間眠り、直ぐ夕拜の講壇に上つた、種々の大集會が催されてゐるから今夜は多分出席が少からうとの豫測にも係わらず、五十餘名の熱心な信者、求道者が來聽し、數名の祈りを以て散會した。

▲廿七日(月) S・S 大會出席者の中、約百四五十名の男女が今朝大阪に來ると云ふので、英語を語り得る信者教役者の多數が市からの依頼で接待役を務めた、自分も其一人として朝から梅田驛に出張し、數臺の自動車に分乘して大阪城、築港の社會事業、午後は造幣局、彼の名高い鐘紡會社等まで巡視した、夕は公會堂の大食堂で催された市のレセプションに臨み、直ぐ又大講演會にも出た、來會者實に三千名、空前の盛會であつた、小供くく、我に小供を與へよ、然らば世界を根底より改造し得べ

しと叫んだ某學者の言の如く、小供を造り、小供を教育し、小供の時に神を愛し、人を愛せよとて基督の大訓を植付け置くに程根本的な、大事業はないと云ふ感が深く來會者一同の頭をインプレスした、確かに成功であつた。

▲廿八日(火) 昨一日自働車に乗り廻つた勢か、今日は全身撲たれたやうに感じた夕方山田氏宅で八九名の少集會を開いた、始めから終り迄靈氣に充たされた集會で、感謝の涙と、嬉し泣きの聲さへ聽へた、今朝五時頃神の近きを感じ、宇宙の果迄支配し給ふ無限絶大の主は、我らの病床にも、臺所にも近くく入り來つて我らを守り、導き、教へ給ふを想ふた時、一種云ひしれぬ靈感に打たれた、最う死も、病も、災もないと思ふた、生死不幸が一如と成つて只々感謝の外はないと想つた。

▲廿九日(水) 奈良の菊水樓で開かれた我組合派の教師會に臨んだ、久しぶりに全国各地から集まつて來た教友らと欣然握手し會談する嬉しさ、とは云へ自分は教師會が最つとデモクラチックであらねば成らぬとに付て希望を述べて置いた、我らの關係は飽く迄親しい兄弟でなくては成らぬ、上下の別のあらう筈はないのである、雨が霽

れた、月は三笠の山を出で奈良ホテルの屋根を照して居た、自分は九時頃急に獨り歸阪した。

▲卅日(木) 過ぐる一年間九州へ、刀根山へ佗しく病を養ふてゐた長男が歸つて來た、病勢尙悔り難いものあるに係わらず、不思議に信仰を得てより元氣急に快復し最早醫藥を斷念して高熱も恐れず、信仰と自然との二つの手に依つて立たんとしてゐる、幾夜熱涙の祈りを捧げた母も歡びに充たされてゐた、最う二度と歸る日はあるまいなど想ふた日の苦しさは當分忘れられた。



▲一 日(金) 朝八時過ぎ梅田驛發、我組合教會總會に臨むべく京都へ向つた、終日うるさい議事やら、報告やらで頭を痛めた、奈良の教師會で自分も評議員の一人に當選したから引受て呉れとのことであつたけれども強ひて辭退した、折角會員達の同情と意志を無にしたやうで相濟まぬとはあるが、自分には別の使命があつて、それが爲めに全力を盡さねば成らぬからである、夕は京都教會での大祈禱會に臨んだ、満場の盛會であつたけれども靈感はなかつた、情氣満々、之れでは傳道の不振も尤もだと思つた、自分はとうとう祈る氣にも成れず失望して歸つて了つた、福永姉宅に心地好く一泊した。

▲二 日(土) 午前中議事、午後は松岡兄姉を尋ねた、暫らく談話、令嬢の永眠を痛んだ、栗原基君の留守宅を訪ふた、夕の大懇談會では何事も徹底せよと叫んだ、不徹底なものに人を動かす力はない、思想に於ても、實際に於ても同様である「今日の

組合教會は何事も不徹底だ、それが行詰りの原因だ、信仰にも祈禱にも徹底してゐない、否徹底どころか恐らく今日の組合教會程信仰とか祈禱とか謂ふものを馬鹿にし、無視した教會はあるまい」と謂つた時、誰か小さい聲で「ノー」と叫んだ、自分は直ぐ「誰か「ノー」と被仰、ア、「ノー」であれ、自分は夙夜それが「ノー」であらんとを祈つてゐる、が併し事實がそれを裏切つて「エス」と云ふのを如何せん」と強く云つた時満場は肅然として了つた、十一時頃感謝して大阪に歸つた。

▲三 日(日) 十二時過ぎ就眠、今朝五時頃眼醒めた、朝夕の説教は只聖靈の指導に委ねた、が併し二回とも不思議に恵まれた、何處にか力と思想の泉があつてそれが獨りで湧いて来るやうにも感じた、自分をつくづくこは我に非ず神我に在りて語り給ふ也と云ふ感が起つた、何せならば自分が尤もブーアな、不準備な時程今日こそと思つた時に優つた力と、新しい思想とが忽焉、突然何處からか湧き出して来るからである。

▲四 日(月) 午後三時京都發 S・S 大會出席の爲め東上。

▲五日(火) 東海道は夢の中に過ぎ、熱海邊で薄ッすら夜が明けた。聖書を讀み祈禱しながら久しぶりに昔懐かしい風景に接した。三等客は案外無邪氣で、親切だ、客車も緩つくりしてゐた、東京驛に着くや否、直ぐS・S大會の新築會場へ行つた、バラックながら堂々たる大會堂、係りの人々は徹夜の準備に疲れてゐた、神田の一旅館に投じて間もなく東京驛の方面から濛々たる狼煙が擧つた、警鐘は亂打された、スワ火事だと云ふ間もなくS・S・大會場だと云ふ、否間違ひだらうと云ふ、巷説區々であつたが電話でいよ／＼さうだと云ふことが確められた、事務員が知らせに來た、市中は號外／＼の聲で騒がしかつた、漏電にせよ何にせよ世界的大賓客を迎へながら今夜に迫つた大會を開くに所なきやうな事をしては眞に東京市民の耻だ、否國民的大耻辱だなど思ひつゝ急に變更された美土代町の青年會館へと急いだ、此意外の失火が何事か又意外の好き結果を起すことであらう、神の攝理に相違ないと心竊かに思ふてゐたが、果然開會式場にそが直ちに事實と成つて現はれた。意外の失火は内外に意外の同情を引起した、滿場三千の心が溶けて了つた。卅三ヶ國の代表者は只もう一つ思ひ、一つ心と化つて

深い／＼感激の情に充たされた、神の爲し給ふ所に何一つあだはないと思ふた。

▲六日(水) 午前講演、除幕式、午後新宿御苑の拜觀、一望涯なき緑の野原、池塘噴水、野花、青草、低樹高樹、配合の宜しきを得て、人をして天上界を歩むの感あらしめた。

▲七日(木) 朝夕の講演得る所なく、こんな事なら態々出席する必要はないと思つた、世界大會に臨んで説教者としての自分の世界的地位が確められたやうな感じもした、さう吃驚するやうな人間もゐないものだ。

▲八日(金) 午前講演夕の聖劇、奇麗ではあつたが感動がない、偉大な靈的司動者を持たぬ此大會が、一種緊張した、所謂世界氣分は漲つてゐても、身に染む靈氣の欠乏せるものがあつて、人波の樓上樓下を打つてゐるにも係らず、自分如きものには何だか一種物足らぬ、淋しさがないうでもなかつた。

▲九日(土) 朝から晩迄只ざわ／＼して落付きがない、一層もう歸らうかとも思つた。

▲十日(日) 午前は靈南坂教會へ出席、午後は日比谷公園に於ける兒童大會、

76

▲十一日(月) 午前講演、鐵道協會樓上にて午餐會、夕の講演會はミス、マガレツト、スラツタリ嬢の熱辯に約二千の聴衆が魅せられて了つた、流石米國には偉い婦人がゐると感嘆せしめたが雄辯は銀の如く一時の感動は與へても黙々たる信仰と愛の金にはしかなぬ。

▲十二日(火) 此夕急に歸阪と決し、午後十一時東京發の列車に乗込んだ、連日騒々しく、親しく主に交る時のなかりしを想ひ、三等室のがや／＼云ふ乗客の中で、自分ばかり頭を垂れつゝ心ゆく斗り懺悔し祈禱した。

▲十三日(水) 途中東京で購ひ得た内外の新刊書に眼を曝らした、午後四時頃歸宅、書簡や雑誌が堆く積まれてあつた。娘からバツトル、クリーキに安着した事、同市には日本人たつた二人しかゐない事、言葉が解りかねて何でも「エス」「ノー」斗り云つてゐる事、金が案外澤山入つた事、この人々はみんな快活で、親切だから安心して下さいなど云つて來た。

▲十四日(木) 終日事務所で忙殺さる。

▲十五日(金) 朝エレミヤ書研究終日絶食、所詮活動するものは少食に甘んせねば成らぬ、筋肉労働とは違ひ靈界の労働者には大食は禁物だ、小食で、粗食で、睡眠も少く、車輪の如く働くのだ、断食日には一室に引籠つて冥目静坐するのが常だが、自分の断食は大々の活動の爲めだ、今日も朝から晩迄七八軒の信者の家庭を訪問した

▲十六日(土) 朝五時から九時、十二時、午後三時、六時と五回大なる感動に充たされて祈つた、何所ともなく聖書を繙いて力を得た。

▲十七日(日) 朝夕の説教は全く世界大會で受けた印象や、感想で持ち切つてゐた會員の多數も共鳴したらしい、自分は直接大會の講演や説教から得る所、甚だ少かつたけれども、間接に從來如何に自分が神聖な此事業に對して不熱心であつたかを思ふて主の御前に懺悔した。

▲十八日(月) 軽い風邪で終日横臥、心置きなく讀書した、スバルゴートの「社會主義の宗教」谷津博士の「母の愛の進化」等面白く讀んだ。

77

▲十九日(火) 今朝二時眼醒む、神澄み心静かに主と語つた、快無限にして種々新らしい默示を受けた、翌日誰か、無名で現金五十圓送つて來た、清い金だ、自分は感謝して役員會へそれを提出した。

▲廿日(水) 朝七時家庭集會、病院訪問、

▲廿二日(金) 終日絶食幾度か祈りながら「靈化」に筆を取つた、夕は祈禱會に臨んだ、尾道教會の岡本さんから「靈化」への熱き同情の辭と、拾圓の爲替と送つて來た、感謝く、

▲廿三日(土) 終日説教の準備に忙殺された、夕方公會堂の大廣間で催された府知事の招待會に臨んだ、内外の賓客約二百名、善美を盡した會場、音楽、山海の珍味に飽きつゝ歸途回生病院の廻り角を獨りトボトボ歩みながらどうしたものか、ア、満らないと云ふ感じが起つた、云ひ知れの寂しさを感じた、主と其福音の爲めに戦ひ、野宿飢餓、凍へ裸かの中にも溢る斗り與へらるゝ天の歡びと幸福とに比して如何に基督なき大宴會や音楽や御馳走の不味く且不愉快であるかを思ふたからである。

▲廿四日(日) 秋晴れの好天氣集會も多く、氣分も良く、講壇にも油が乗り、凡ての相談もすらく運んで此一日程緊張した、愉快の日はなかつた、午後三時頃から夕の集會迄、飛鳥の如く駆け廻つて八九家族を訪問した、夕の「靈化運動」も非常に恵まれた

▲廿五日(月) 阪神地方巡回、七八名の會員を親しく訪ふた、夕方歸宅、食後筆を取つて「信仰に酔ひつゝ」てふ一文を草した、夜の更くるのも忘れて、どうく午前一時迄執筆、約三十ページの長文が出来上つた。

▲廿六日(火) 午前江指兄來訪、午後主婦會へ出席、終つて教會附近の小學校長を歴訪した。

▲廿七日(水) 在宅日、英文書簡數通を認む、夕は渡瀬君の朝鮮傳道協議會へ臨んだ

▲廿八日(木) 朝より夕迄全然書齋に引籠つて種々の書物に眼を凝した、ケンレトのエゼケル書、ルーソーの「エミール」、新渡戸氏の「自警」レールトン著「ブース傳」等見當り次第に讀んだ。夕は或紀念會に臨んだ。

▲廿九日(金) 福嶋から築港邊迄終日訪問、十數家族を親しく見舞ふた、多くは玄

關に腰掛けた儘、一語二語直ちに彼らの靈に接した。

▲卅 日(土) 終日次ぎの説教の爲めに少なからず藻掻いた、思想が幾度か回轉した、何を語るべき乎、題目を如何に撰ぶべきかと悶へた、淀川畔も逍遙した、幾冊の書冊も引出して見た、が併しどうしても決定せぬ、日は暮れた、夕食も終へたが未だ依然として頭は混亂してゐた、机に憑つた儘、暫し靜思默禱してゐると、忽焉新らしい着想が閃光の如く浮んで來た、感謝に堪へぬ、説教は御産同様だ、牧師は少くとも毎週一度産みの苦勞せねば成らぬ。

▲卅一日(日) 天長節好天氣、秋空珍らしく霽れ渡つて祝日氣分が大都の空に充ちてゐた、淀川畔の廣野原で野外禮拜を行ひ、夕方迄二百足らずの老幼男女が無邪氣に遊んだ、青年達はさも愉快さうに立働いてゐた。

十一月

▲一日(月) 朝來微雨、又も風邪の氣味で終日横臥した、朝六時より七時過ぎ迄親しく主と語つた、力の漲るを感じた、丹波諸教會に於ける靈化運動の爲めに熱誠重ねて祈つた、人々に歓迎され、讃められ、御馳走に逢ひ先生と謂はれて成功だとか勝利だとか云はれたくない、自分は弱いからさう成るとキツト墮落する、自分は寧ろ彼らに直言して「爾は其人也」と云ひ、會堂や宿から追ひ出され、已むなく路傍に獨り立つて説教して歸る方が幸ひだと思つた、午後二三の信者達が尋ねて來た、祈つて別れた。

▲二 日(火) 過般京都で開かれた組合教會總會席上にて丹波教會桂石の一人たる明田氏からは是非近日中に來援を乞ふ旨懇請され、同教會牧師とも相談の上快諾した、爾來日夕熱き祈を以て準備し十二月二日午前九時梅田發の列車で先づ龜岡に着いた。

同日午後會員桂氏の裏座敷で十餘名の親しい靈的小集會が催された、自分は靈化運

動の由來や綱領や、祈禱の力ある事等に付いて語つた、やがて痛切な涙の祈禱が續々起つた、病臥中の谷口君を訪ひ。明田氏と共に宿に這入つた。疲れた時の満腹と入浴程説教力を削ぐものはないので晩食を廢し、自分は暫し横臥した儘思想を纏め、間もなく起きて心行く計り祈りつゝ會堂へ行つた、二十餘名足らずの淋びしい集會で、初めは如何にも冷たく、之れでは兎ても説教など出來ぬと想つた、所詮祈る外途がないと感じ、自分も祈り、一同にも祈つて貰つた、次第に火が起つた、自分は祈りつゝ感極つて覺へず聲が途絶へた、應て語ると約四十分、全會に靈力が行亘つて見へた、聖靈頻りに彼らの靈を動かして給ふのであつた。

▲三 日(水) 朝三時頃より眼醒めて祈る、聖靈の感動甚し、六時頃又うとうと眠に入つた、秋空晴れ渡りて遠山の翠容掬すべく、煤煙の都とは違ひ、神氣何となく澄み亘るを覺へた、朝食後一二の兄弟らと語り十一時二十分の汽車で園部へ向つた。

數名の兄弟らに迎へられつゝ午後二時の信徒會に臨んだ、八木、須知等の町々から甚しきは五里六里の山路を越へて集つたもの約五十、自分は先づ跪いて祈り、兄弟姉妹

の熱き祈もあつて、やがて一時間計り説教した。靈感は斷へず全會に溢れてゐた、夕七時半の集會は小さい會堂ながら殆んど満堂で約八十の男女が集つて來た、が淋しい、靈化運動開始以來、自分は此夕程感激の少かつた事はなかつた、失敗したと思ふた、何故だらうと反省した。翌朝五時眼醒めて忽焉其理由が分つた、昨夕は實は靈化運動ではなく、普通の説教會に成つて了つたので、靈の働きが妨げられたのだと、なせ自分は牧師と能く打合せて置かなかつたか、講壇に上る迄になせモット互に祈らなかつたか、双方の心の戸が開けて、靈と靈とが接近した上でなければ眞個力ある説教の出來るものではないのである。此夕の失敗は自分に少からぬ暗示を與へた、今後何れの集會にも遠慮せず飽く迄靈化運動本來のやり方を以て衝き進むの外なきを思はしめた。

▲四 日(木) 流石丹波は山國だ、五時頃起きて戸障子を開け放つて見ると、あたりは一面濛々たる霧の海であつた、間もなく伊藤牧師、明田、船越氏等の同教會の元老達が來訪された、十時の列車で八木着、伊藤牧師、同道山路を辿り、直ちに松本、阪部兩君の淋びしい墓畔に祈つた、感涙に咽んだ、午後阪部醫院で八木部の小集會を開いた

基督の愛に付いて語ることに約二時間、靈動著しく、婦人達は聲を擧げて祈つてゐられた、之が丹波諸教會に於ける恵まれた靈化運動最後の集會で、午後四時兄弟姉妹に見送られつゝ歸途に就いた。

▲五日(金) 午後寺嶋氏の紀念會に臨んだ、「靈化」の活版所が廢業すると聞いて一寸困つた、何しろ廣い大阪中にポイント式の活字を持つてゐる所が僅か三四ヶ所しかないそうだから、併し主は何とかして下さるとであらう、夕の祈禱會は活氣に充ちてゐた、「靈化」の購讀者が次第に殖へる、臺灣や南洋の島々から、千島や樺太の淋びしい原野から文書傳道に對する感謝狀が續々來る、「私共のやうな教會のない土地に住む者は信仰を養ふにも、傳道するにも文書より外ないのであります」云々の書面も來た、廣島の高橋君から金五圓送つて有益なる文書傳道の爲めに御使用下さい」と謂つて來た實に有難い、神様は意外の人々の手を通して此「靈化」を助けて下さる、かつくゝながら毎月不思議に支へられて一厘の負債もない、臺北の荒井君から「隅から隅迄一人で執筆さるゝ事と、有料の廣告は一切拒絶と謂ふ勇ましい御決心に先づインスピーションに打れた」云々と書いて來た。

▲六日(土) 説教の準備が濟むと直ぐ七八軒の家庭を訪問して來た、印刷費や雜費が次第に嵩んで來て「靈化」一枚の實費三錢五厘と郵税五厘で合計四錢、一ヶ年前金五十錢では到底やり切れないと聞いて又困つた、天滿教會の機關紙にして教會から多少の援助を受けてはどうかとの忠告もあつたが、それは斷然峻拒した、飽く迄祈禱の應驗として此雜誌が不思議の手に支へられたい、而して現代のやうなクリスチャンですら信仰と祈禱を無視して、教會に金が足らぬと謂へば神に祈るよりか藝人や音楽者などに取籠つて金をこしらへて貰ふ方が、早道だと云つたやうな時代の惡傾向に對して自分は獨力挑戦したいと思ふた。

▲七日(日) 忙しい一日、併し恵まれた一日であつた、朝夕の説教に於て靈感著しく、集會も多く、廣い會堂に靈の力の波立てるを見た、午後數家族を見舞ふた、夕の集會には初めから熱火の如き祈禱が續々起つた、一青年が曾て主人の金を無斷で使用了ことを悔ひ、解雇さるゝ覺悟で、一切を主人の前に涙ながら告白懺悔した所が意

外にも主人の讃辭を受け。其金は君にやる、今後一層君を信用して使ひたいとの優しい言葉を聞いたから喜んで呉れと謂つた、集會後彼は主人が今夜初めて教會に來ましたから逢ふて下さいと云つた、四十前後の立派な紳士、一青年の眞面目な、眞剣な祈りと態度が主人の心を動かしたものらしい、感謝に堪へぬ、此夕天滿教會聖書學校の開校式約五十名の男女が居残つた。

▲八 日(月) 岡町、池田方面の數名の信者や病人など尋ねて祈り且慰めた、夕方歸つて向ふ三回分の禮拜説教の準備した、中々苦しい、思想の混戦だ、漸く出來上つたと歡ぶ間もなく直ぐ滿らぬと謂ふ感じが起つて根本から又やり直す、疲れに疲れて何時しか机の側に轉寢してゐた、眼が醒めて時計を見ると正に午前二時、あたりは靜かで、頭はハッキリしてゐる、靈感頻りに起つて、意外の思想も浮んで來た、且祈り且書いて五時の汽笛の音が勇しく、遠い淀川の向ふの方から響いて來た、三回禮拜説教の概項だけは先づト、出來上つた。

▲九 日(火) 秋雨蕭條、マルタ會、天王寺方面の家庭訪問、本間俊平君から「靈化」への同情の記として金五圓を送つて來た感謝に堪へぬ。

▲十日(水) 朝六時半家出、店員會、大阪ホテルに臺北の近藤氏を訪ひ、臺北教會後任牧師に付いて協議した、午後二時岡町婦人會、十餘名の婦人達に無限の神の能と愛を説く靈感堂に溢れた。

▲十一日(木) 終日「靈化」に筆を取つた、丹波から歸つて以來、連日連夜の活動にや、疲勞を覺へ、夕方迄全く書齋裡の人となつた、夕は役員會に出席した。

▲十二日(金) 此朝主は特に自分の心を啓き玉ふた、フオックス傳を讀んだ、默示に依らざれば到底神は分らぬと悟つた、事務所種々手紙の返事を書いた、「靈化」の經濟愈々困難所詮立ち往かぬとも思つた、が併し過日來た、何となく一種の囁きがあつて、思はぬ助けの忽焉として來たるが如く感じ、家内にも冗談のやうにそれを話してゐた、所が今日一人の來訪者あり、文書傳道の必要を感じ、向ふ一ヶ年間に五百圓を越へぬ程度に於て寄附すべく申込まれた、實に感謝の外ない、熱い祈は不思議に答へられた。夕の祈禱會も何時になく緊張してゐた。

▲十三日(土) 終日在宅臺北教會の近藤氏來訪、同教會牧師後任の件について語つた、夕は同君の招きに應じ大阪ホテルで晚餐を共にした。

▲十四日(日) 靈化運動開始以來、我集會の諸教會は不思議に恵まれて來た、今朝の禮拜出席者百二三十、夕の靈化運動も力に充ち、來會者何れも上よりの火に燃されてゐた、今年は春も秋も全然他よりの來援を仰がず、特別說教會も開かず、何時もながら自分と數名の會員達が語るものであつたけれども効果は著しい、全く神の恵みだ。

▲十五日(月) 今朝や、疲れを覺へ終日在宅讀書に耽つた、丹波の一老婦人から過ぐる日の運動に對する感謝狀が來た「……あなたほど御ねつしんな、ちからある御すゝめいまだ承りました事御座なく、セイシヨにあるむかしのパウロの如き御方様と思ひましたので愛兄様の御祈り被下しました時は私おもはずなみだにむせび、今般はなんたる幸ひでありましたと歸る道に主様にかんじや致し歸宅致しました

さふしけな一人暮らしの身なれども

心の内は毎もあたらゝか

▲十六日(火) 今曉二時か三時頃、夢幻の裏に主は我が心を啓き給ふた、活ける現存の主を信する事の如何に幸ひなるかを感じた、午後の主婦會は何時になく恵まれた、祈と祈、涙と涙がから合ふた、只もう何となく皆が嬉し泣きに泣いたのである、夕は宅に歸つて靈化に筆を執つた。

▲十七日(水) 今日には來訪者多く、終日内外の客に接した、夕は親愛會に臨んだ。

▲十八日(木) 終日「靈化」に執筆、中々の骨だ、インスピレーションのない時は一行も書けぬ、一字一涙、主の現前を感じて初めて筆が走るのである、幾枚書き換へるか知れぬ、すら／＼と何でもなく書けるものゝやうに思ふ人があればそれは大變な間違ひだ、説教が容易でない如く文章も中々又六ヶ敷い、上よりの感動に充たされない以上、到底力ある文章は書けぬ、主よ拙き此ベンを祝し給へアーメン、來訪者三名。

▲十九日(金) 終日訪問、途中頻りに飢と疲勞を感じた、然しフォックスが自分は幾日斷食しても殆んど食物の事さへ思ふた事はないと云つた事をふと想ひ起し、彼の靈に恥ぢた、田圃路を活ける主と偕に歩みつゝ感謝に堪へず、徹底的信仰生活の如何

に幸福なるかを思はずにはゐられなかつた、夕の祈禱會に出席者少く、物足らぬ感じがした。

▲廿一日(土) 寂びしい秋雨の中に京都へ行く、二三の家庭訪問。夕は京南教會で説教した、會衆約五十、多くは活氣充溢の青年者で、氣持好き集會であつた。

▲廿一日(日) 昨夕の疲れ容易に去らず、一種の不安を感じつゝ講壇に立つた、禮拜後直ちに教會の總會あり、説教短縮の必要に迫られ充分の靈感は起らなかつた、王女會約十名、事務所で求道者の熱心な質問に感じ、間もなく神戸から態々來訪した一青年にも逢ふた、何れも余に祈禱を求められた、直ぐ慈惠病院に今井氏を訪ひ、過日忽焉咯血病臥中の篤信の一青年を其病床に訪ふた、立ちながら主の愛を説く事約十分感動充ち三人とも祈つて分れた、夕の説教には殆んど開會の祈さへする元氣なく其旨全會に告げた、續々熱烈の祈禱は起り「神よ我等の牧師を助け給へ、彼の疲勞を醫し給へ」と祈つた、やがて余は「生命の鍵」と題して説教した、滔々約一時間、疲勞は何所かに飛んで往つて了つた。

▲廿二日(月) やゝ疲勞と風邪の氣味で、讀書の元氣はなかつた、夕は秋山兄結婚式司式、大阪ホテルの晚餐會に臨み、午後十二時大阪驛發の列車で四國巡回の途に就いた。

▲廿三日(火) 昨夜十二時大阪發、急に寒さを加へて終夜うとく熟眠し得ず、宇野驛のツヒ手前で夜が明けた、海上平穩、高松着、坂出に着いたのは午前九時過ぎであつた、直ちに同地の豪家岩瀬氏の歡待を受け一泊することゝなつた、午後二時同驛講演、夕六時半同地日本基督教會にて三派聯合の靈化運動が開始された、來會者約五十、靈動著しく全會に火の燃ゆるを覺へた、始めより終迄二時間、祈と、共鳴と、感嘆と、無邪氣なる微笑とに充ちて寸分隙間なき緊張した好集會であつた、目下三教會とも定住牧師なく、靈的飢渴を覺へつゝありとの事、丸龜から河野君、多度津からメソヂストの今田氏が態々來會された。

▲廿四日(水) 高松驛講演、集會者約五十名、午後一時丸龜驛集會者十五名、何れも頗ぶる緊張した、青野兄弟其他の歡迎を受け、夕組合教會で靈化運動を舉行した、

來會者約百名、日基の宣教師牧師を初じめ會員の多數も加はり、終始靈感に充ちたる好集會であつた、自分も不思議に力の身に加はるを感じた、坂出から態々來會された有志家もあつた。

▲廿五日(木) 午前七時青野兄同道多度津驛着、直ちに「生死を超越して」と題して講演、集會者六十名、午後は同工場にて約八十の職工に對し「見へざる監督者」と題して講演した、全員の注意予の一身に集り、始めより終迄一人の身動きするものもなかつた夕は同地メソヂスト教會で靈化運動舉行、今田牧師司會された、來會者僅か廿餘名多くは婦人で、初め何となく寂寥を感じた、自分は例の如く講壇の下に立つて暫し靈化運動の由來と、其目的とを述べた、一向反響がない、空を撲つが如く感せられた、同夜は兎ても力ある説教は出來ぬと思つたが祈りながら講壇に上つた、只もう見へざる主の活ける力を信じて次第に火は起つた、一語は一語より強く彼らの靈に切迫した、果ては冷たく見へし婦人達の眼から熱い涙の迸るを見受けた、失敗と思つた集會も不思議の恵みで他の諸集會に優れる好結果を與へられた。

▲廿六日(金) 今田氏に送られ、午前七時過ぎ多度津驛發、八時過ぎ琴平驛講演廿五六名謹聽した、名高い琴平神社を拜見すべく數千の石段を攀ち上つた、驛長の紹介で社務所に迎へられた、國寶を拜し、奥御殿の大廣間で茶菓の饗應を受けた、障子を開けば滿山の紅葉血に染んで、風光畫くが如く、遠村近落一眸の間に見るべく、こんな所でないと言ふ神様は流行らぬと思ふた。

午後一時善通寺驛講演、午後四時頃高松着、八九名の兄姉達に出迎へられて四番丁の教會に這入つた、姉妹達が甲斐／＼しく食事の世話などして、久しぶりに田舎の親しい教會生活に入つた、夕の靈化運動は各派各教會の人々が集つて來た、約八九十名?、説教の中途や、充血の氣味で、手足が冷へ、頭のみ熱して、主は何時もの如く自分を用ひ玉ふことが出來なかつた、失敗したと思つた、が併し後で卅餘名の靈化の申込者があり、翌朝未明二人の組合教會執事が棧橋迄見送つて來て、昨夜の説教に頗ぶる共鳴した旨を語り、心から感謝してゐられた。

歸途汽車の中で、レールトンのブラス傳を繕きつゝ、救世軍創立當時の大將の苦心と

困難とを忍んだ、而して我らの「靈化運動」の前途に對しても種々に思ふた、忽焉聖書を開ひては活ける現在の主を懐ひ、再臨論者とや、其立場を異にせることを示された、自分は勿論再來の主を信するものではあるが「活ける現在の主」がモット自分には必要で、彼と交り、其默示を受け、力と、愛と、歡びとを得て現在に生き、現在にヨリ強く活躍したいものと思ふた。

▲廿七日(土) 遺失

▲廿八日(日) 今朝五時、久しぶりに慣れた自分の布団の上で祈つた、活ける現在の主を信じ、彼と交り彼と歩むものに何の行詰りがあらうかと想ふた、山も平地と化り辛苦も愉快だと思つた、留^ま中^ま遙々自分を尋ねて來た人々の爲めに、又は優しい同情の手紙を寄せた幾多の知人や、未知の友達の爲めにも祈つた。

朝は「基督の富と貧」と題して説教した、出席者多く、全會に一種の靈感が充ちてゐた、夕の靈化運動は近來にない惠まれた光景で、自分は終日の疲労をも打忘れて感謝して歸つた。

▲廿九日(月) 終日在宅、二三の來訪者に接す、九州三池の集治監から改宗した一

囚徒の手紙を受けた何所で自分の名を聞いたものか一切知らぬ、

「私は京都に生まれまして前科三犯を有する者、明治三十二年強盜傷人罪に依り有期徒刑十五年の申渡を受け、三池集治監に於て其刑執行中、明治三十九年に同囚田中初五郎を殺害致し、重ねて十二年の刑を受け、都合二十七年と云ふ刑の執行を今日迄受けて居りますが——大正十年三月三日が満期出獄——何卒先生の御情けを以て出獄後私が身上を先生の御手許に於て(ルカ傳十五章)に依り、主の聖名に依り御世話成し下され度——鐵窓二十二年の此の惡徒が以上申上げし凡ての願と、私が今日の困難なる身の上を憐み下されて——」

分は直ぐ返事を書いた、而して彼の爲めに祈つた、放蕩兒が還つて來たら父は彼に近づき、抱上げて接吻したではないか、よし彼が又自分を傷け、殺すやうな事があつても自分は恐れず、心から彼を愛しよう、何とか立ち行くやうに世話もしてやらねばならぬと覺悟した。

▲卅 日(火) 早天獨座、主の御足許に近きつゝ、教會の事、「靈化」の事、病者との爲目下紛擾中の某々家庭の爲めに主の赦しと、隣みを乞ふた。

終日事務所で忙殺された、寸暇もなかつた、が然し忽焉空を仰いで主を呼んだ、其榮光の御姿を偲びつゝ、活ける、個人的の現在の主を信するものゝ幸福を思はずにはゐられなかつた、そこに力がある、あゝ只そこにのみ勝利の秘訣がある。



十二月

▲一 日(水) 朝五時起きて祈る、六時家出、久しぶりに淀川畔の朝ぼらけに接した、霜は一面に長い／＼十三橋の上を掩ふてゐた、何たる氣持ちの好い朝景色であらう、自分は覺へず恍惚とした、江指商店の店員會に臨み、直ぐ二三の會員を尋ねた、主人が會社を罷めて一家途方に暮れてゐる可憐の妻君と暫し語り、祈つて分れた、勇氣を喚起すべく勵まして置いた。

午前中ウヰルミナ女學校の講堂で三百餘名の職員及び生徒に對し、生命は神のものだ、人力に及ばぬ、信仰に依つて猛進する外ない、科學は人を卑怯にし、信仰は人を大膽にするゝ種々實例を引いて語つた。夕は疲れた足を引摺りながら危篤の一病人を京阪電車の野江迄尋ねた、八十二歳の老夫人が只もう小供のやうに成つて神様の言を受け入れ、三十年來の疑問が晴れたと言つて喜び、直ぐ洗禮を受けた、一家喜びに充たされ本人も家族も死の使の來るを俟つてゐる、何一つ苦痛もなければ悲哀もない、光明

輝き、感謝に溢れてゐた、何たる幸福な事であらう、人間一度此に到れば死はもう既に生に吞まれて了つたのである。

▲二 日(木) 朝は神戸埠頭へ杉野君を送つた、君が歐洲漫遊の長旅行に幸多かれと祈つた、歸途一書店に立寄り、偶然ヤコブ、ペーメの「コンフェッション」を見出し電車内で返讀しつゝ、歸つた。靈味津々たる金玉の大文字である。夕は水口君の結婚を司式した、歸れば阪本姉永眼の凶報あり、悲喜交々到るを覺へた。

▲三 日(金) 今朝三時眼覺め、四時の時計の音を聽く迄親しい主との交りに入つた、遠き人、近き人、信者、求道者、色々の面が自分の眼窩に映じた、彼等一人一人の爲めに熱い祈を捧げた、午前中は阪本家で種々葬式の相談に費やされた、獨娘の春日夫人がどうしたものか自分には信仰が起らぬとの話に對し、自分は懇々と祈の大切な事を説いて置いた、午後は堺から、天王寺邊を訪問しようと思ふてゐたが四國巡回以來の疲勞が一時に出で、どうしても足が進まず、その儘宅に歸つて休んだ、水口新土婦が尋ねて來た、夕は祈禱會に臨んでイエスの活ける事と、其力に付いて勧め

た。

▲四 日(土) 全身の疲れ未だ去らず、朝遅く迄蓐裏に横はつた、イエス猶生けりとの信仰が、單に信仰に止つてゐては駄目だ、どうしても彼の力が日々我等の家庭に、集會に實現されて、心靈的には勿論の事、肉体上にも、事業の上にも直接不思議な、一種の奇蹟が行はれる迄我等の信仰が徹底しなければならぬと言ふ事を切に感じた。

▲五 日(日) 朝夕の説教意の如く成らず、体の疲勞の爲めかとも思ふた、少年少女會、エリヤ會等を終へて、直ぐ電車で西須磨迄行つた、四日市の富山君同道野田姉を訪ひ匆匆引返して教會迄歸れば已に五六十名の男女が集つて俟つてゐた。説教及び聖書學校を終へ、直ぐ又小野姉を訪ふた、令弟の突然の死が一家を悲哀の雲に掩はしめて涙に霑はされてゐた、十二時過ぎ歸つて寢に就いた。

▲六 日(月) 朝暉美はしく庭面を照らしてゐた、鳥啼き、小供歌ひ、犬聲も聞へた、自分は連日連夜の過勞の爲めか何時になく永寢して知らず八時過ぎ迄横臥した、生前一面識のなかつた小野君が「靈化」を愛讀して、葬式は是非武本牧師に頼んで

呉れど死に臨んで懇々遺言したとき、九州から尋ねて来た某君の「……先日御教會に伺ひまして先生の御顔を見付けた時程深い感激に打たれた事はありません……」この手紙を読み、毎日々々幾通かの「靈化」や「歡喜に溢れて」に對する共鳴の手紙や、感謝状を手にして、自分は感謝に堪へず、榮へを凡て主に歸した。

▲七日(火) 朝來風雨已まず、急に雪景色と變つて來た、午前十時小野君の葬儀を篠突く風雨の中に長柄で行ひ、直ちに阪本家迄自動車で馳せ、告別式を了へてすぐいよ／＼加はる暴風雨の中を天滿教會迄往つた、會葬者約二百、盛んな葬式で、自分の説教も覺へず緊張した、夕方阿倍野の墓地から自動車で又阪本家迄引返し、晚餐を共にし、六時過ぎ電車で堂島の吉川家で開かれた親愛會に臨んだ、歸つたのは十時過ぎそれから「靈化」の校正やら、一束もある手紙や、端書の返事を書いてどう／＼午前一時半迄車輪の如く働いた。

▲八日(水) 昨日の疲れ容易に去らず、今朝は江指家への店員會にも失禮して八時頃迄横臥した、在宅日ではあつたが、一人の姉妹の外來訪者なく、久しぶりに書齋

裏の人と變つて、ヤコブ、ペーメの「ゼ、コンフェツションス」や、ヘルマンの新著を繙いた、夕は水曜會の晚餐會に臨んだ。

▲九日(木) 京阪電車附近から西九條邊迄訪問し、歸途九條教會の二宮君を久しぶりに訪ふた、病後の君と快談する事多時、薄暮喜んで歸つた。

▲十日(金) 製藥會社に迫害中の小川君を訪ひ、共に祈つて別れた、すぐ鶴橋の宙洋機械製作所に寺部君を尋ね、病床の夫人を慰めた、君は「靈化」の同情者、臺灣在住の折「歡喜に溢れて」を読んで歡び、當地に移轉以來懇々自分を尋ねて來られた熱心なクリスチャンの一人である。

▲十一日(土) 終日在宅、讀書に耽つた。

▲十二日(日) 今朝四時、眼醒めて端しなくブースや、リンコルンを思ひ出した、あゝ人類の熱愛者よマン、ラバーよと叫んだ、石井十次君の事も思ひ出した、信仰も、祈禱も畢竟此人間愛への道程に過ぎぬと思つた、渾身の愛、燃ゆる愛、たい聖い、永遠の愛のゆへに努力しようと思ふた、癩病者、傳染患者も尋ねよう、監獄貧民窟をも

音づれよう、痛めるもの、虐げらるゝもの、友と成り、同情者と成らうと思つた。人道の偉人、愛の化身たる人々を思ふと共に、彼等を産み出した主イエスの愛の如何に深く偉大なるかを感じずにはゐられなかつた、愛のみたゞ愛を生む、孔子もプラトールも断じてかゝる熱愛の魂を造り得ないのである。

朝夕の説教は愛と力の波に漲つてゐた、外は大雨で、陰々たる悪天氣、詩篇の交讀さへ出来なかつた程暗かつたけれども約四十分間の説教に全會靈火に燃やされた、夕の靈化運動も雨天の爲めか集會僅か五十餘名、靈氣旺盛、本年掉尾の運動たるに恥ぢなかつた。

▲十三日(月) 終日在宅、來年度運動の方針に就いて頻りに祈り且考へた。自分は年中今日と云つて一日の休日がない、春秋は勿論の事、炎熱の夏も寸暇なく働いた、たゞ一年中十二月中旬以後丈けが眞の休みだ、否讀書と靜思に専ら費さるべき愉快な時だ、懸取りが来るではなし、懸取りに往く必要もない、世間が忙はしく成る丈け、それ丈け自分は暇に成る、いよゝゝの急患者か、死者でもない限り、訪問は成るべく

せぬ、諸集會も休む、之れから暫時が間丈け杖を淀川畔に引ひて、思ひ存分祈る事が出来るのが嬉しい。

▲十四日(火) 大將ブースは燃ゆる愛の火の玉となつて世界をかけ廻つた、彼にふれたものは誰もかれも愛に燃やされずにはゐなかつた、日に幾回か數千の聽衆相手に戦つた其元氣の秘訣を全く見へない神の助けに歸してゐる、八十歳の老人にして猶且そんな元氣が出るものなら、四五十の我々が、神の力さへ受くるならどんな偉い活動が出来るか知れぬ、利己的な人や、冷たい愛のない人間は早く老いる、火がないからだ、我々も基督の熱いゝ愛の火に燃やされて七十八迄到る所に奮闘したいものだ。

▲十五日(水) 四時起き出で、約一時間霜を踏みつゝ教會迄行つた、既に十餘名の人々が集つて俟つてゐた、直ぐ電燈を消して祈つた、何れも眞劍だ、間もなく會堂の東窓から白んで來て云ひしれぬ感があつた、直ちに江指商店で、例の如く店員會を開き、大阪病院に未知の一婦人を訪ひ、寢臺の傍で懇々福音を説いた、胸に手を置いて

祈つて歸つた、看護婦さんが自分を見送つて来て「先生妻はこの前の日曜の朝天滿教會
であなたの御説教を承りました」と云つた、自分は意外の感に打たれ、嬉れしく「ど
うか病人を親切にして上げて頂戴」と言つて歸つた。

午後電話で危篤の病人ありとき、直ぐ又上町迄往き、病床で祈つた、歸途慈惠病院
に入院中の廣田書記を訪づれた。

▲十六日(木) 終日氣分悪しく、讀書も出來ず、訪問する元氣もなかつた、多分未
だ風邪が全治してゐなかつたのであらう、已むなく一日障子張りをした。正月らしく
成つて來た。

▲十七日(金) 今朝漸くブース傳讀了、少からず教へられた、終日事務所で筆を執
つた、福井縣の愛讀者 嶋田夫人が尋ねて來て「靈化」に寄附された。

此晩の祈禱會の燃へたことよ、狭い二階の二た間は全く占領されて、使徒時代其儘
の熱心と愛とが全會に漲つてゐた。

▲十八日(土) 午前中陰雨濛々午後風呂屋の椽側で、立ちながら覺へず感謝の言が
出た。

「オ、主よあなたを主と唱へ王と呼び、身も、魂も、凡ての所有を献じ奉つて、何ら
の怖れも、不安もなき無一物の至幸至福の生涯に導き給ひしを謝す」と、

戸外に出づれば雨なごりなく晴れて、青空高く、六甲の嶺に軽く白雲が浮んでゐた、
夕暉まばゆく、村樹雨後の玉を連らねて春の近きを感じしめた。

鳥取の淺井君から手紙が來た、「……小生御教會へ入會以來、御懇切なる御指導に預
り難有奉謝候、昨今幸に正信に立歸り、主の靈化に浴せんとするの時、先生と山河
相隔つる事は赤子の母手を離れし感なき不能候へ共、先生の心血の送りたる熱涙の
滾々たる「靈化」に依り大に啓發せらるべく期待致居候……」

▲十九日(日) 午前三時眼醒む、靈感涌くを覺へた、朝夕の説教に力があつた、年
末にも係らず、出席者多く、教會は何時になく動いてゐた、午後は南海電車沿道の會
員を歴訪した。

夕惠まれた集會を了へて九時過ぎ疲れて家に歸つて來ると、長男の病重く、妻は醫

者を迎へてゐた、十時頃から又一層激しく朝の六時頃迄七顛八倒の苦しみで、二人ともとうとう看護に夜を明かした、主の現前を感じつゝ、冥助を祈つた。

▲廿一日(月) 醫師を未明に迎へて幾回が注射、終宵眠らず、病床に侍した。

▲廿一日(火) 看護の傍、暇を偷んでは「靈化」を書く、不眠不休の体にも不思議の神感が涌いて来て、今朝未明一二時間にしてすら「神的光耀」を書いた。

▲廿二日(水) 今朝四時、病兒の氣分や、快、自分を顧みつゝ、「人間の体は弱いやうで強いものですな、あれ程の苦みに能くも死なずに、保たれたものです」と謂つてゐた。

外は曇混りの雨が風に伴ふて凄しく降つてゐた、自分は靜かに枕頭に祈つた、やがて夜が明けた。

臺北教會牧師として近頃赴任した福井君から愉快な手紙が来た兄弟らの歡びの狀が見へて嬉しい、自分は心から彼らの爲に祈つた。

熊本師範で「余は如何にして確信を得しや」を読み、最近「歡喜に溢れて」を読んだ

と云ふ廿一二の女學生が、ツイ附近の女子神學校に入學し、著者の宅が此だと聞いて歡び、夕方突然尋ねて来た、九州婦人の質樸な氣質を其儘に、言に熱誠が溢れてゐた

▲廿三日(木) 長男の病や、小康を得て、昨夜はゆつくり眠ることが出来た、今朝久しぶりにカーライルを読んだ。

▲廿四日(金) 過去十年、手紙でのみの親しい友、英國ボルミングハム市のミス、メーソンから初めて寫眞が来た、一見快活らしい、年齢卅餘の一婦人、彼が如何に未知の自分に對して親切で、同情深くあつたかは主知り給ふ。

年暮れて「靈化」の印刷費其他の不足約卅圓、愈々仕方がなければ教會から貰つたクリスマス、プレゼントからでも支出する外なからうと思ふてゐると、今朝突然會員の松本君が尋ねて来て「靈化」への同情の記として金拾圓寄贈された、實に嬉れしかつた

來年一年は差當り困らないかも知れぬが、併し寄附さへあればドシ／＼發展して、盛んに各方面に宣傳したいものと思ふてゐる。

▲廿五日(土) 今日楽しいクリスマス朝、四時頃から小供が眼を醒まして、昨夕

枕許に置かれた数々の贈物を歡んでゐた。十一、二歳に成つてもやつぱりサンタクロ
スが煙突から持ち込んだやうに思ふてゐるから可愛い。

夕會堂での祝會は近年にない盛んなとで、裝飾と謂ひ、歌と云ひ凡ての餘興にスピ
リットが這入つてゐたS・S世界大會の反響かも知れぬ。

▲廿六日(日) 朝はクリスマス禮拜に晚餐式、年末最後の日曜としては可なりの好
集會であつた、此日初めて二人の眞面目な求道者が或人の紹介狀を携へて禮拜に出席
した、何れも眞劍である、五十の坂に近きつゝ初めて基督教を聽き、而かも相當社會
的地位ある紳士で、かく迄熱心に求道し、研究せらるゝが如きは近頃稀有なことである。

▲廿七日(月) 終日讀書 來訪者なし。

▲廿八日(火) 長男の病を氣遣ひ、郷里から遙々老父が尋ねて來た、が併し不思議
に氣分は快復した、父も案外の感に打たれつゝ歡び、孫等を引連れ、大阪見物にと出
掛けて往つた。

▲廿九日(水) 朝四時家出・早天祈禱會に臨んだ、終日事務午後、一嬰兒の遺骸を送

つて阿倍野の墓地に行つた。

大津の山田氏から一月下旬、三派聯合の靈化運動開始の件交渉があつた、自分は快
諾した、廣島の安永姉、山口縣の本間氏、更に鳥取の伊墻氏等から「靈化」への熱き同
情の手紙と寄附金とを寄せられた、伊墻辯護士から自分ももう五十に達した、餘生を
神に捧げねば成らぬ、云々、

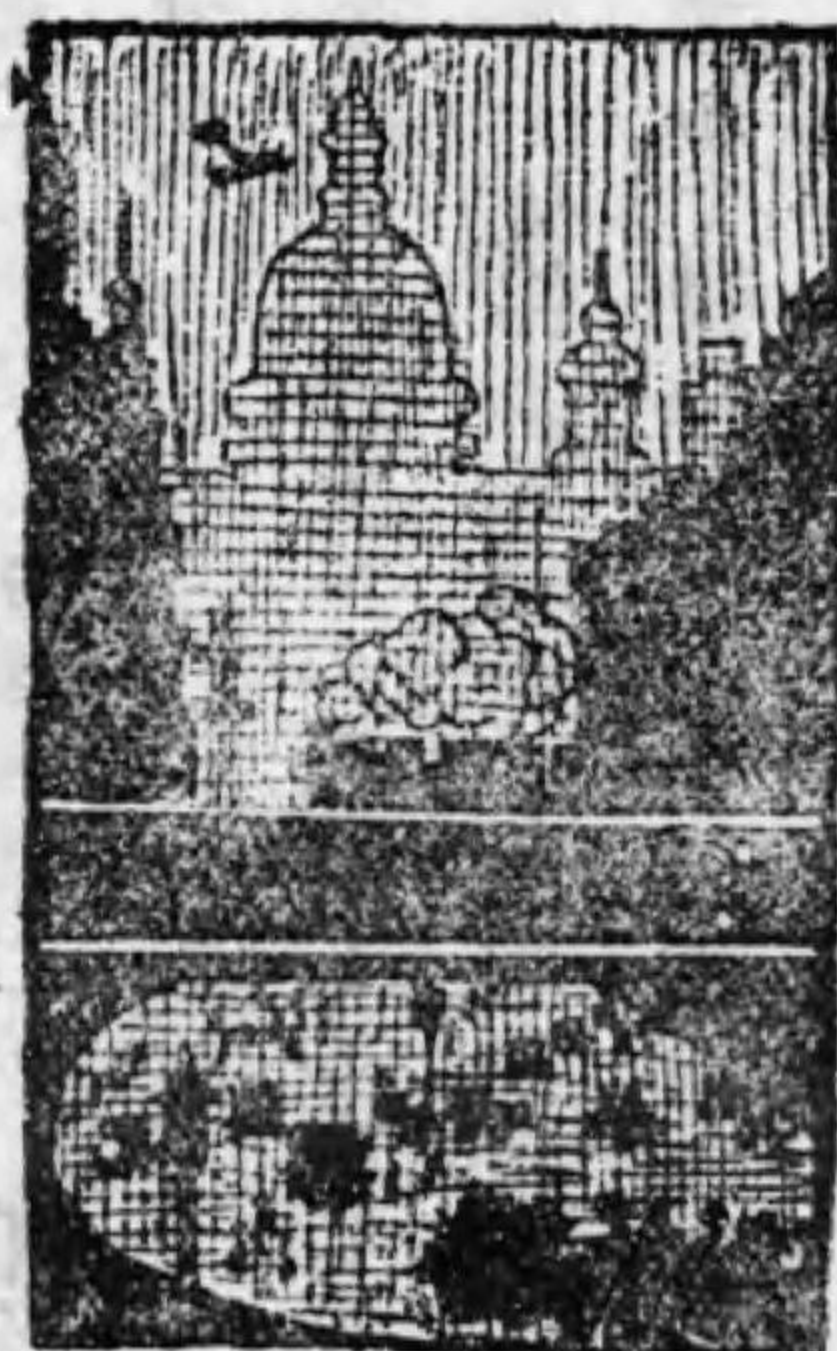
鳥取でも何時か靈化運動を舉行すべく希望して來られた、何れも感謝である。

▲卅日(木) 父と末子を伴ふて朝から生駒の山登りした、曇つてはゐたが降りも
やらず、夕方迄愉快に遊んで歸つた、七十の老翁、元氣なやうでも憔悴の色がないで
もない、ゆくての長からぬを想ひつゝ熱心活ける基督を説くのであつた。

▲卅一日(金) 今年初めての雪景色、滿庭の樹木輕き花を付けて、寒さ身に染み、
泥濘路を塞いで、如何にも年末らしい光景を呈してゐた、會堂に出で、事務を取り、
飢を感じる毎に幾度か祈つた、罪人の首なる予を主がかく迄顧み給ふその難有さ辱け
なさを感じて又しても感涙に咽ぶのであつた。京都の松岡氏が「靈化」へ寄附された、

厚意を謝しつゝ遙かに老夫婦の爲に祈つた。

除夜祈禱會を終へて歸つたのは正に午前一時。



大正十年

一月

▲一日(土) 暉々たる元日の朝日影、堂々と東の空を破つて出た、自分は久しぶりに淀川畔を逍遙しつゝ祈つた、遠く六甲山嶺は白を頂いてゐた、下關行きの特急の淋びしいとよ、元日の早朝は流石旅行者も稀れど見へる。

終日在宅、種々の幻想に耽つた、自分もとうとう五十の春を迎へた、一事成すなく徒らに老ゆ、残念と云へば残念だが悲觀はせぬ、ゆくては長く、神に依つて希望に充ちてゐる、躍進するのみだ。

▲二日(日) 今曉鮮かに神よりの靈感が如何に猛烈なる肉の慾火を冷却せしめ得るかを示されて感謝に堪へなかつた。

信仰の在る所に靈は來り、靈の在る所に生命が湧く、肉に負けるのは生命がないから、生命の無いのは靈がないから、靈のないのは生ける主の信仰の欠乏から來るの

である。

春雨縷々糸の如く、川端の柳の枝にも白玉を聯ねてゐた、自分は種々の感慨に充たされつゝ教會へ出た、「年頭に立ちて」と題して説教すること約四十分、全會何となく希望の光に輝いてゐた。

S・Sも今井氏のやうな良校長を得て、急に緊張して來た、不思議に教師も續々現はれて來る。

佐世保の牧辯護士から「靈化」への同情金を送られた、感謝く同市へは昨春たゞ一度行つて説教した丈だが何となく懐かしい。

▲三日(月) 午前十時、市内各派聯合の新年初週祈禱會へ出た、何らの靈動なく集會僅か六七十、淋しい感じがした、所詮祈禱會は大迫害の際か、リバイブルの後でなくては有力に出來ぬものかとも思つた、寧ろ一週一度の形式的祈禱會を廢して、時々早天に聖別會を開くか、何か特別の事件の起る毎に連夜の大祈禱を開いた方が賢いやり方かも知れぬと思つた。

▲四日(火) 雪後の好天氣 久ぶりに山々は晴れた、早朝父を送つて生瀬迄同車父は郷里へ、自分は有馬へ向けて獨りテタク歩んで行つた、終日神と交り、教へらるゝ所が少くなかつた、有馬温泉一泊。

▲五日(水) 昨夜遅く迄隣室でのカルタ會やら、醉漢の大喧嘩やらで安眠し得なかつた、今朝六時頃心ゆく斗り祈つて、靈感湧き、更に献身を新たにしたら、朝湯の氣地よさ、悠々九時過ぎ宿を出た。

野に山に幾度か祈つた自分も、近頃は餘りの忙はしさに登山の暇がない、が併し人間はやつぱり自然の子だ、時に紅塵の巷を辭して、自然の懷に悠遊するがよい。

▲六日(木) 「一粒の麥」の著者佐藤文學士から「……靈化御一人の執筆、基督教界に於て最も出色あるものと存じ候……」との手紙が來た。

薩南の一牧師から「……今又金森、木村兩氏に加へて教兄が一異彩を放ちつゝ出現し來りしとを衷心喜び居候……」との溢美の書面も受けた。

此日伊豫の某君から「靈化」の發送見合せとの端書も受けた、之れが公然拒絕され

た第一人者である、げに世はさま／＼、嫌ふ者、喜ぶ者、教へらるゝ點が少くない。

▲七日(金) 教務多端、數名の青年者と夕遅く迄事務所で働いた、布哇の一牧師から「……米國かぶれて、俗化しつゝある現代の基督教界に對し、獅子吼は慥かに近來の一大快事にて候」云々と書いて來た。

▲八日(土) 文書傳道の事務次第に殖へて、日々輻輳し來る書簡の返事も容易でない、數名の青年等が熱心自分を助けて呉れるのは嬉れしい、今日も夕十時頃迄事務所で忙殺された、沖繩縣人某牧師から「……一昨年より色々の迫害を受け……弱つて疲れて居り申候時に主の御力と、先生の御實驗とに依りて力を注がれ勝を得て力強く御用に立つて働き居り申候……「歡喜に溢れて」の書は眞に我が力となつて患難にも喜をなせり……」云々と書いて來た。

▲九日(日) 朝四時眼醒めて祈る、此日の諸集會何れも緊張した、夕の靈化運動は集會僅か七十、靈動も少かつた、併し高知教會の實業家某氏、「歡喜に溢れて」の共鳴者此夕態々來會して頻りに歡んでゐられた、自分は穴へでも這入りたく思ふた。

我らの間に學者もなく、智者もない、人數も少い、他から態々來訪する人々の失望が思ひやられる、が併し凡ての宗教運動が初めは皆こんなものであつたと思ひ出して漸く慰められた。

▲十日(月) 今朝眼醒めて祈ると切に、熱涙潜々として下つた、力の足らんとを痛感したからである、百萬の大都會の眞中に立つて自分の爲す所の如何にブアーで無力な事よ、こんな事で靈化運動など云へたとか、オ、主よ、我を祝せよ、我に爾の靈を注ぎ給へと夜の明くる迄祈つた。

▲十一日(火) 午後マルタ會、夕方雨を犯して天王寺邊の一富家を訪ひ、晩食を共にし、病める令息に懇々福音を説いた、彼は來三月受洗すべく決心した。

▲十二日(水) 終日書冊堆裏に没頭して、講演の準備した。

夕長男の病牀で語つた、生も可、死も又可、主召し給はゞ未知の世界の探見に出掛くるもよいではないかと、長男は微笑した、母も快活に語つてゐた。

▲十四日(金) 白雪皚々、野も山も一面の白妙、大阪附近には珍らしい雪景色であ

つた、満庭の樹木、花又花、犬と小供らは朝早くから飛び騒いでゐた。

自分も勇ましく、雪を踏んで訪問に出掛け、十二三家族を尋ねた、夕の祈禱會は二階座敷で一抔、羅馬書を自由に研究し、靈味津々、盡くる所を知らなかつた。

▲十五日(土) 終日在宅、

▲十六日(日) 今朝は聖餐式だと云ふ事を思ひ出すや否、直ぐ床の上に跪いて祈つた、神靈我を壓する如く我は何物かに支へられ、保たれつゝあるを感じて泰山崩るゝと、動かじと云つたやうな、強いゝゝ、大丈夫な感が起つて來た。

井戸側で水を冠り、齒を磨き、食事をし、着物を着代へながらも何だか全身に神の靈が充ちゝゝたやうな感じがして、物々禁じ難いものがあつた、朝夕の集會力に溢れ聖餐式には覺へず感激の涙が出た、靜肅に主の現前を感じ、遠くから來訪された某老牧師が自分の前で涙を拭ふてゐらるゝのも見受けた。

▲十七日(月) 終日事務。

▲十八日(火) 「靈化」の編輯、主婦會で聖書を講じた。

▲十九日(水) 「靈化」の編輯、春雨小止みなく、來訪者一人もなかつた。

▲廿二日(土) 今朝三時半頃忽焉眼醒めた、約一時間祈り、力の不足を痛切に感じた、祈の人。ヂョルヂ、ミユラーが睡眠の不足は神との交りを妨ぐると云ふことを言つてゐるが全くさうだ、今朝の祈は支離滅裂、神の近きを自覺し得ないので少からず悶へた、全く睡眠不足の結果であつたらしい、五時の時計の音を聞きつゝ又眠つて了つた。

▲廿三日(日) 今朝も祈禱中暫らく神と近き得なかつた、頭が茫乎してゐた、昨夜は心持よく睡つたのにどうしたものかと思ひ惑ふた、山雨將さに來らんとして風樓に滿つ、神は何事か我に成し給ふ準備ではなからうかと思ふた。

此朝から教會多年の習慣を破つて禮拜式の順序と氣分を根本から一新した、有馬山上、祈禱と冥想の結果である、献金の精神も、方法も變つた、全會何となく新らしい氣分の漂ふを覺へた、夕の靈化運動も活氣充溢、集會約八十、加盟者九名に達し、祈禱も獎勵も全く火であつた、今朝祈に力のなかつたにも係らず、終日神は自分に近

き不思議の力の身より出るを感じた、禮拜後續々洗禮及び入會志願の申込みがあつた。

神戸から毎日曜態々禮拜に出席する法學士谷口君が、熱き同情を「靈化」に寄せて、金若干を贈らる、君の信仰と、人格は今後我が教會の花であり、又力であらう。

(以下大津靈化運動)

▲廿四日(月) 大津市に於ける同胞、聖公會及び組合の三派が過日來熱心なる祈禱と聯合的精神を以て準備された靈化運動に参加すべく十二時梅田發午後二時大津驛に着いた、山田、遠藤兩氏の出迎へを受け、山田氏宅に入つた、躰がて同胞の矢部氏も來り、集會の打合せを爲し、唯もう一つと成つて、碎けた心で祈つた。

同夕は膳所の同胞教會で第一の集會を開き、約六十の男女が靈雨に浴した、矢部牧師の司會と獎勵があつてそれより數名の祈禱、直ぐ自分は立つて「眞劍の祈禱」と題し、約一時間語つた、講壇の勝手が違つた勢か頗る語り苦しく、中途甚だ悶へたけれども次第に靈感が湧いて來て、全會に何物か通ふを覺へた、「靈化」の申込が續々起つた。

▲廿五日(火) 今朝眼醒めて頻りに黙示録を讀んだ、「靈化」の前途も懷ふた、ふとした事から自分の献身の未だく足らぬを痛切に感じた、小食の實行、睡眠時間も餘り多い、未だく活動が鈍い、晝夜不斷に働く靈界大車輪の振動に觸れて、小さき車輪の我が靈も動き出し、大輪小輪相接觸して眼も昏まん斗りの大活動、大震動が起つて來ねばならぬと云ふやうなことを思ふた。

朝は訪問、夕は聖公會のマリヤ教會で「徹底的信仰」に就いて語つた、遠藤牧師の司會で、集會約五十、自分は終始緊張した態度と、自由とを以て語つた、が併し演題が演題だから幾分智的に傾き、聖靈の著しい感動はなかつた、約一時間流暢に語りながら、自分は何やら物足らぬ感を抱きつゝ、寢に就いた、成功だなど云はれて心苦しく耻かしく感じた。

▲廿六日(水) 午前中訪問、午後は婦人會、少數ながら頗る惠まれた集會で涙を

拭ふ婦人達もあつた。

夕は最後の聯合集會を、白玉町の組合教會で開いた、集會約百名燃ゆる實驗の愛」と題して語つた、山田牧師の司會の許に、始めから終迄靈火は一堂に燃へ上つてゐた此夕一切草稿を用ひず、聖靈の働きに全然委ねた、頭の工合が中途ボンヤリ語ることが盡きるやうに感じた、一寸困つた、が併し人の弱き所に神は強く最後の廿分間は全く火であつた、自分は近頃この夕程全身火と化り、靈と化り、涙と化したとは少ない、之れ全く活ける主の働きで榮を主に歸すべきである、熱い祈は續々起つた、全會が波立つてゐた、歡喜が溢れた、初めて會堂に這入つたと云ふ一小學校長は二階迄自分を尋づねて來て感謝の意を表し、求道の切なる希望を述べてゐた。

市内三派が一つに成つて、かく迄協力同化したとは、殆んど前例がないと迄云はれた、感謝に充ちて眠に就いた。

▲廿七日(木) 午前九時大津發、梅田着迄傍目振らず讀書した、歸宅後も夜遅迄近代思潮に關する讀書に眼を曝らした。

▲廿八日(金) 今朝自分は痛切に榮へを主に歸すべく教へられた、自分の今日あるは全く主が我が爲めに血を流せし直接の結果だからである、深く心靈的にさうである斗りではない、自分如き不徳の徒が、性來の弱點と、今日迄重ねて來た幾多の失敗にも拘らず、意外に人々より愛せられ、歡ばれ、不當の尊敬さへ受くるに到つたのは全く主が此地に來つて、我が如きものゝために死に給ふた御蔭であつて、自分本來の價値又は功績ではない、それを何ぞや我物顔に誇り、自分の力で成功するかのやうに露思ふともあらば、ア、我は何たる罪人であらう、盗人である、強盜である、全く主に歸すべきものを我物顔に自分に横取りし、横領するからである。

今日二通の嬉しい手紙を受けた、一は熊本市外から、他は淡路の海岸から、數年間も全く信仰を失ふてゐたといはるゝ平井夫人が「歡喜に溢れて」を讀んで、再び信仰を恢復し、「……先夜は新に懺悔して夜明迄初めて熱い〱祈を致しましたそれから毎日何度でも祈つてゐます……」との優しい手紙を讀んで嬉し泣きに泣いた、それから今一つは病氣療養中の安原姉からの感謝の手紙で、「……聖日の朝「歡喜に溢れ

て」が興へられ……とうとう三百九頁迄一息に讀んで了みました、私は幾度か涙が出ました。果然先生も涙の人でいらつしやいました、「……所が十字架上のイエスがハツキリ見わたりました、もう……感激に泣く外ありません、嬉しいのか何か分りません、胸を打たれてエスよ此身をゆかせ給へと口の中で祈りました……」云々、自分はこの尊い、難有手紙を讀みつゝ遙かに彼らの爲めに祈るのであつた。

▲廿九日(土) 好天氣、來客多く、終日應接に暇がなかつた。

▲卅日(日) 朝夕の講壇に力の湧くを覺へた、禮拜に少しの緩みもなく、約一時間、百餘名の會衆は全く一つと成つた、午後渡邊姉を高師ヶ濱に訪ふたが併し已に名古屋へ出立の後で無量の懷を残しつゝ歸つた。

▲卅一日(月) 終日在宅ランゲとマイヤー、に依つて黙示録を研究し、更にヘルマンの新著「新時代に於ける基督教」を讀んで少からず共鳴した、現今獨乙に於ける新進學者の叫びと、自分如き後進者との意見が不思議に合致し、講壇に「靈化」に頻りに説きつゝある思想及信仰上の感想に裏書きされたやうな感じがして嬉しかつた。

二 月

▲一日(火) 昨夕九時過迄讀書して何時しかうたゝ寝してゐた、眼が覺た時は正に午前一時、頭がハツキリ冴へて直ぐ寝るは惜しく、とうとう四時過ぎ迄讀書と冥想に耽つた、十字架の中に現はされた神の長しへの熱愛が如何に利己的な、罪惡深重の我をも化へて、歡んで献身の生涯を送らしめ給ふかと云ふやうな深い、尊い靈界の事實に感泣しつゝやがて又寢に入つた、外ではジョンが何やら頻りに吠へてゐた。午後刀根山療養所に日野神庭兩兄を見舞ふた、日野君の熱心で小さい集りの出來てゐるとの事をきゝ、請はるゝ儘に一場の獎勵する事と成つた、約卅名の患者が寄つて來た、自分は基督に依つて現はされた神の熱愛を説くこと約一時間、全會はヒツソリして誰一人動きもせず、説き去り説き來つて感激と成り、涙と化り、自分の側の一青年の如き嗚咽涕泣禁じ難き狀であつた、冷たい、淋びしい、絶望的な空氣の充ちた此病院にも或は遠からずして靈火の燃わする時がないとも云へぬ、自分は感謝しつゝ歸つた。

▲二 日(水) 寒い此頃の朝五時に起きて、暗い路を辿りつゝ停留場迄行くのは一寸辛い、併し老体のジョン、ウエスレーが毎朝四時に起き、五時に説教したとなど懐ひ出しては勵まされ、今朝も早くから早天祈禱會に臨んだ、廣く暗い會堂裏に黙々疎らに坐つてゐる男女の集會者が清い感動に充たされつゝ祈つてゐた。

終日小雨、來訪者なく、心ゆく斗り讀書が出来た。

▲三 日(木) 朝來天暗く、やがて飛雪粉々、凄じい悪天氣と化した、自分は未明に祈の中に決心した如く、二三の人々を訪問すべく出立した、山芦屋で吹雪の中を西へ東と家を尋ねた時は中々に寒かつた、が併し又愉快であつた、直ぐ其足で神戸迄行き、初めて青木君に逢ふた、外は冷たく、内は温かに、約二時間火鉢を圍んで君と語り且祈つて別れた。

▲四 日(金) 終日事務所得手紙を書き、疲れては附近の會員や、求道者を訪ひ、又も引返して事務を執り、讀書するのであつた。

▲六 日(日) ア、幸福なる一日よ、朝の五時に眼醒めてより夕十一時床に入る迄終日自分は神の手に導かれてゐた、朝拜百廿餘名の會衆が何時になく緊張し、訪問隊は各部署を定めて、それ〳〵活動を初め、何れも面が輝いて見へた、自分も午後より夕拜迄各方面に轉戦した。

▲七 日(月) 早朝出發、河内方面の會員及病者など訪問、橋本老兄に伴はれて濱の富家氏を訪ふた、氏は同村の醫師、昨年秋死に瀕して病牀に受洗し、爾來不思議に健康を恢復して愈信仰に進みつゝあり、午後引返へして市内の百萬長者某氏を訪ふた主人余を迎ふると頗ふる懇懃、多大の興味を持つて余が言に耳を傾け、今後日曜禮拜に出席すべく語つてゐた。

▲八 日(火) 今朝三時頃眼醒め、暫し神様に近んごしたけれども、頭が茫乎してどうしても親しい交りに入ることが出来なかつた、暫時眠つて直ぐ又起き、筆を執つて「聖書傳道」への寄稿を認め、午後は婦人會に臨んだ、集會者約廿四五名、涙と感謝と喜びに充たされた好集會であつた、自分は何の話の用意もなく臨んだけれども不思議に力が出で、我ながら意外の思想も湧いて來た、神の個人的愛を實驗的に説きつゝ、

、知らず／＼熱涙が双頬を傳ふた、出席者の誰一人涙を拭はぬものはなかつた不思議である、眞個に不思議である、只もう涯しなき大海の底から涌き上つて來た波が我ら一人／＼の心の堤防を押流して涙堰止め難くならしめたのである。

神戸の青木兄から「……御手紙全部多大の共鳴を以て拜見いたし、主が大兄の如き人を起し給ひしを感謝致し候、小生も残る生涯を懸命に純福音宣傳の爲献げたく存居候……」と云つて來た、過ぐる日名古屋へ移られた渡邊姉から「……一人淋しく思ひふける時は何時も主と共に先生の暖かき御風貌を思ひうかべて、言ひしれぬ力を得ては日々を暮して居ます、例へ數十里は隔てましても靈と靈との相接しない筈は御座いませぬ、私の先生を思ふて居る時、きつと先生は主を思ふて居らつじやる事と思つて居ます、私の主にゆき、神にゆきます道程は先生でなければなりません……」との溢美な手紙も受けた。

▲九日(水) 早天祈禱會、店員會、來訪者なし。

▲十日(木) 藤本兄訪問、親しく語つて今後の活動を約し祈つて分れた、午後は

芹野君、京部の山下君等來訪さる、山下君は十五年前廣島で神の僕と成つた熱心忠實の人、今に昔を忘れず、時々來訪さる、神の個人的愛に就いて語つた。

▲十一日(金) 今朝四時、主は痛切に余に示し給ふた、「聯合運動も好し、申合も可、併し火は何所から出る乎、火の消へた運動や、協議に力はない」と、如何にして教會を盛んならしむべきか、如何にして多くの人々を信者にすべきかと徒らに焦慮して、先づ牧師自ら聖壇の前に懺悔の涙を注ぐとを爲さず、教會の重きに任ずる役員有力家輩が徒らに受洗者數や、財政の消長のみに留意して、教會を衰へしむる眞原因の却て己等の中に潜伏しつゝあることに氣付かぬ程憐むべきことはない。午後西の宮の海濱で開かれた九月會に臨み、魚崎に病人を訪ひ、夕は祈會に出た、狭い二階は一杯で三四人も洗禮志願者が出た。

▲十二日(土) 阿倍野で阪本家の建墓式に臨んだ、嚴な祈禱の後愛孫に依つて除幕され、各自墓前に花を供へた、直ぐ同家迄引返して、紀念會を催し、自分は約卅分に亘つて神の愛を説いた、一坐緊張、夕食を共にして散じた。

▲十三日(日) 朝夕の説教に力を頂いた、特に夕の靈化運動は約七八十名の男女熱心に傾聴し、或人は余に向つて頻りに謝辭を述べ、初めて分りましたと云ふてゐた。

▲十四日(月) 教會上多少心に懸る事があつて鬱々樂まず、附近の一會員を訪づれ直ぐ又引返へした、夕も疲れて何も爲す元氣はなかつた。

▲十五日(火) 午後事務所へ行き、二三の洗禮志願者を尋ねながら、卒然主は余が心を開き、只愛せよと云ひ給ふのであつた、自分は御聲に服從した、歡喜は起つた。

▲十六日(水) 終日「靈化」を書く。

▲十七日(木) 六甲嵐に雪さへ混つて近頃でない寒さ、終日「靈化」に執筆した、夕十二時過ぎ迄寸暇はなかつた。

▲十八日(金) 朝より夕迄事務所で種々の來訪者に接した、夕の祈禱會も相變らず靈感に赤たされてゐた。

▲十九日(土) 終日在宅、讀書に倦んでは久しぶりに郊外の田圃路を逍遙した、只何となく嬉れしく、主がこの私如き煩悶の子を化へて歡喜の人と成し給ひし不思議の

恵みを感じせずにはゐられなかつた。

今日二人の在監者へ手紙を書いた、一人は前科八犯の竊盜、他は鐵窓廿二年の囚徒で、此三月に出獄する者、人間の眼から見れば何れも見込みのない惡徒であるが「神に於ては爲し能はざるなし」だ、自分は遙かに彼らを思ひつゝ、「基督の愛我に迫り」之れが若し我が子であつたならと云ふ強い同情の感に打たれた。

▲二十日(日) 四時眼醒め、祈ると約一時間、勝利を信じて立つたS・Sの形勢も急激に變化して、近來にない盛會、禮拜も百二三十名、次第に増加の模様である、正午事務所の二階で、老人組の親愛會と、廿歳前後の新光會、同じく廿歳前後の王女會の三つが一つに成つて珍らしい、頗ぶる打解けた祈禱親睦會を開いた、集るもの約卅、何れも喜色滿面であつた。

夕は靈化運動總集會で來會者約二百名、殆んど空席なき盛會、神戸の青木澄十郎君が一時間餘に亘つて頗ぶる碎けた、實際的で而かも靈味津々たる説教された、滿堂共鳴、且笑ひ且襟を正した。

例に依つて加盟式舉行、自分は約廿分間最後のアツピールした、續々立つて聖壇下に進み出で、記名するもの約三十、全會震動聖靈の働き著しく、落涙するものも見受けられた。

散會後信者及び新加名者の茶話會を開く、會する者七八十、青木君を圍んで或は祈り、或は語る、當夜態々觀戰に來られた城南教會牧師藤本君の獎勵もあり、一同歡喜と希望に充されつゝ歸つた。

▲廿一日(月) 午後は三國あたりの信者訪問、夕は島の内教會で開かれた市内組合教會の聯合祈禱會に臨んだ、例に依つて定められた二名の獎勵があり、二三有志の感話もあつたが、全會冷へ渡つて何らの靈動なく、神の言はそつち除けて奈良の申合せとか、協力とか云ふやうな人間の事ばかり語つてゐた。

▲廿二日(火) 今朝御前に跪きつゝ、昨春以來の宿題が忽焉と解決された、それは外ではない、戶外説教の跡仕末を如何にすべきかとのとである、折角露天に叫んで多大の感動と興へたにしても、それッ切り東西へ雲と散じて了つては丁度大海に鹽を撒

布くやうなもので効果がない、仇骨である、どうしたら好からうかと思案中、フト思ひ付いたのは私製葉書に「申込書」云々と印刷し、其場で希望者に與へて、歸宅後自ら切手を貼つて教會迄郵送せしむると云ふ趣向である、何でもないとこのやうだが、約一ヶ年熟考の末案出された傳道方法で、効果は着々實現されてゐる。

▲廿三日(水) 此日フトした動機から生涯の短く、時間もドシ／＼飛んで行くことを感じ、昨春以來、神が自分に與へ給ふた數々の靈的教訓や、實驗を一書に認めたいと云ふ感じが起つた、訪問や、事務も大事ではあるが際限がない、寧ろ著述にモット多くの時間を費して何か死後に迄残したいものだと思ふた。

▲廿四日(木) 今日こそ文字通りに終日執筆、朝七時より夕の十一時頃迄、傍目振る暇さへなく、書くは／＼約三十餘ページ、全身不思議のインスピレーションに充たされつゝ書いた、先づ／＼之れで新著述の基礎は据つた感謝の外ない。

▲廿五日(金) 朝早くから事務所へ出張、信者求道者が續々尋ねて來た、某法學博士の家庭から娘が病氣だから一度見舞ふて呉れまいかとの懇々の手紙、自分は事務の

半ばに僅かの時間を割いて駆け足で訪問した、夫人は自分の顔を見るや否眼に涙で、種々悲しい話しをされた、今年十歳の獨り娘が、病後の衰弱甚だしく、醫者も首を振り日に細り行くのみで心痛に堪へぬ、此上は神に頼むの外ないから祈つて呉れとの事、自分は云つた、生命は全く神のもの、活ける主イエスのみが心身両面の醫者である、自分如きに何の能力があらう、只主若し許し給はゞ人間の眼に絶望と思はるゝ病人も忽ち全治するところがある兎も、角も信じて祈りませうと云つて令嬢に逢ふた。

花顔麗質、得も云へぬ愛らしい上品な娘ではあるが、衰弱の極に達してゐる、小さい手を握れば冷たき事氷の如くであつた、自分は暫し冥自信を置いて祈つた、夫人は屹度神様が治して下さると云つて幾度も感謝し、今後禮拜へ出席すべく約してゐられた。シカゴのミス、デフォレストから過日バツトル、クリッキーの娘を訪問したと云ふ委しい、親切な手紙が來た、學校で非常に成績が好く、教師や、學生間に愛せられてゐる。此夏休暇にはミシシガ湖畔の某クリスチャンの立派な家庭で世話する事に成つたから安心せよとて地圖迄送つて來た、感謝に堪へぬ。

▲廿六日(土) 市外遠く田圃中の長屋の一貧家を訪ふた、母は二年越し病牀に、七ツ八ツの男の子は全くの白痴、見るからに憐れな住居であるが、其中に救はれた年若い二人の兄弟が小額の給料を取りつゝ、父母を助け、信念厚く、健氣にも神と教會に仕へてゐる。

自分は約一時間に亘つて懇々病人に救を説いた、窶れに窶れた病婦の面にも一種壯嚴な誠意と神への懺れがほの見ゆるのであつた、彼は幾度か感謝し、嬉れし涙に咽んでゐた。

歸途一退職法官を訪ふた、「夏分は公園での熱烈な御説教、幾度かベンチに腰打掛けながら拜聴しました」との挨拶を受けた。

上海の柴崎君から遙々同情の手紙を受けた

「……靈化を読む毎にこうしてはゐられぬ様な氣が致し、一點の靈火の點せられる感じがします、之を読んでかく感ずる者がどの位あるでせうと思ひます……」

奈良高師出身の優しい一婦人から縷々九ページに亘る手紙を受けた、辛らい家庭の

事情を訴へ聖い、若い靈の悶へを述べて

「……先生之れからキツト教會に参ります」と云つて來た。

▲廿七日(日) 黙示録最後の講演として「新天地」を説き、天國は靈化された一種の場所、神を中心とした永久の住家だと述べて置いた。

午後數名の兄弟を伴ひ、外島の癩病院を訪ふた、松原つゞき海近き、自然の美景の中に憐れな人々が養はれてゐる、やがて鐘が鳴つて患者は續々集つて來た、自分は約一時間に亘つて愛の福音を説いた、可憐の靈よ、天よりの嬉しい福音の外、何が御身を慰め且勵ますものぞ。日暮れて會堂に歸り、全身疲勞の身を以て直ぐ講壇に上つた、集會者約九十、「異能の顯れ」と題して語つた、弱々しい言語態度の中に主の力は働き、妙想奇句、何處からか出て來て、終始何物か全會を引付けてゐた。

説教が濟むや否、直ぐ自分は講壇を降りて救靈會に移つた、續々ベンチの前に進み出で、火は全會を燃やし、「神よ此虚弱な体を強めて下さい」、「神様、私に忍耐を與へ玉へ」、「神様二年來病んでゐる私の母を療して下さい」、「神様、私は家庭の事情で今

夜限り田舎へ歸ります、どうかあなたを離れないやうにして下さい、愛する武本先生を恵んで下さい」など云ふ熱い祈が續出した、全會靈動、感泣する婦人の聲、電氣の如く堂に響いた。

▲廿八日(月) 陽氣急に加はり、暖かに長閑かな日、疲れた体を引擦りながら天王寺邊の洗禮志願者や、會員の家族を歴訪した、途中電車の中で種々の物思ひに耽りつゝ、斷へ入る斗り主が慕はしく、傍らの押合ひへし合ひの群衆をも忘れて、さながら大會堂の奥深く祈るやうに親しく主と交ることが出來た。

我らの主を初じめ、彼に忠實であつた幾多古今の聖徒らが世に棄てられ、人に厭はれつゝ光榮ある孤立の生涯を送つたと、其孤立が懺ては天下萬世の熱き同情、幾多の共鳴者、渴仰者を引起した所以であつたと、徒らに世と妥協し、人に媚びて一時的の安きを偷み、主義を曲げ、信仰を濁して、傳道を或卑しい動機からするやうな人々が朋黨を造り、教派の牆に立籠つて相争ひつゝ、果ては心ある人々から棄てられ、忘れらるゝに到るとなど思ひつゝ、獨り自ら慰め且勵まされた。福井地方裁判所長の吉原氏が

ら「靈化」に對する熱き同情の手紙と寄附が來た、「……當地にては未だ教を乞ふべき、又語るべき人を不得、昨今は「靈化」の到來を非常に相待居候……」云々、別了一篇の「信仰告白文」を予に送り、批評を請はれた、俗氣紛々たる官界、而かも責任重き裁判長の地位にゐながら、超然神を論じ、基督の永遠の神性を説いて憚らざる君の如きは蓋し泥中の白蓮か、夫人亦た貞淑信仰の人である。

三 月

▲一 日(火) 降りしぶく雨の中、自分は老松町の大道を獨り歩みつゝ辛烈な主よりの警戒に接した、「一切を我に任せながら何故ゆくてを氣遣ふか、一分間の疑ひも我への不信任ではないか」と、「然り主よ、爾生き給へば恐れや、悲觀は一切なく、世間の反對憎惡も何等意とすべき理由には成りませぬ、オ、主よ我をして全く、絶対に爾に任せ給へ、明日の事則人力の及ばぬ事を、何所へ行けばとて爾の愛の手から離れるやうな事はないのですから、私は絶対に安全です、幸福です、「凡ては感謝です」、事務所で一青年に親しく教へを説き、數家族を訪づれ、直ぐ其足で芦屋迄急行した、が併し折角尋ねた宅は全家不在、自分はすごとく歸つて來た。

▲二 日(水) 今朝四時眼さめ眠られぬ儘、種々の物思ひに耽つた、孤獨の感が強く迫つて來た、世界が盡く敵と成つて自分一人を責てる様な感じがした、サタンの惡戯かも知れぬ、兎に角さびしい、恐しい感じがした、併し自分は感謝した、古今のあらゆる宗

教家が信仰と主義の上に立つて天下の反對を一身に背負ふた事など思ひ出した、パウロや、ルーテルの官權、及び因習の反抗、日蓮や、ウエスレーの辻説法、偕てはバンヤン、フオックス等の當時の俗宗教輩から受た冷遇排斥など思ひ合せて少からず慰められた布哇ホノル、の吉岡兄から親切な手紙が來た、「我らの間に靈化運動の必要を認め早速協議一決……、「靈化」を毎月廿部宛送つて頂き、内は會員の信仰を燃やし……」海の彼方にも天火の燃上らんとを祈らすにはゐられなかつた。

▲三 日(木) 午前中、處女降誕に就て約三時間研究、シユミツド其他を踏獵して得る所なく、マイヤーに往つて忽焉解決の鍵を得た。十三停留所へと歩みつつ人間の肉性の如何に弱く罪の力の如何に猛烈なるかを感じた、押へんとして押へ難く、活ける現在の主に接近して、其不思議の力を受くる外、全く勝利の見込なきことを痛切に感じた。夕は老松町の四ツ辻で説教した、群がる男女何れも耳を傾け、殆んど立ち去る者はなかつた。

▲四 日(金) 北米カルフォルニア州の大石君から「……基督教世界に飽き足らな

いで、其購讀を止める通知をやりましたがそれが先方に到着する頃「靈化」の御送附を受け……私は先生の御著作の殆んど全部を拜見致してゐます……」との手紙が來た。午後某博士の家庭を訪ふた、夫人は云はれた、「先日祈つて頂いてから娘の病勢が急に變つて來ました、實に感謝です、併し今日は妾が先づ祈つて戴かねばなりません、心中に少からぬ暗みと悶へがありますから」云々。

▲五 日(土) 鐵窓廿二年の出獄人清水君が遙々九州からやつて來た、年齢四十八背低く一見音なしさうな面相、此人が強盜殺人の大悪人とは思はれない程であつた。晝飯済ましてから之迄の懺悔談やら、改心の來歴など聞いた、自分は神の愛と、赦罪の福音を説きつゝ熱涙を禁じ得なかつた、情に脆い彼は只もう小供の如く泣いて、せき敢へぬ涙に手拭を濕はしてゐた、惡魔の子が神の子供の一人と成つたのである、直ぐ救世軍の希望館へと同道した、「先生もう再び罪は犯しませぬ、決して先生の御顔を汚すやうなことはございません」と幾度も繰返してゐた。

▲六 日(日) 今朝四時前、眼醒めて祈りつゝ此の大宇宙も畢竟無限の神靈の外へ

の發現に外ならぬを悟り、凡ては靈の力ある働きと感じた、若し主イエスが非常に明かに、確かに我らに近づき給ふ時、又我らが一點疑なき心もて彼を絶対に信賴する時、靈肉多年の痼疾も惡癖も忽焉として煙散夢消するを思ふた、若い一人の看護婦さんから手紙が來た、「……先生はほんとうに私は幸福でございます、何が幸福と云つても十字架の血潮に依つて罪も許され、天の父上様と呼お話が出来得る様に成つた程幸福は他にありません……私はほんとうに嬉しく……堪りませんから聖書をよんだり、讚美歌を教へたりしてゐます、」去年の此頃「歡喜に溢れて」を手にしながら就蓐し、其儘心臓痙攣で俄かに倒れた執事小堀君の一週記念會が自宅に開かれた、未亡人や、二人の小供達、さては御老母の顔を見るのも涙の種であつた。

▲七日(月) 疲勞、蓐裏靜かに讀書した。

▲八日(火) 何となく氣分悪しく仕事に手が付かなかつた。

▲九日(水) 風邪の氣味で遂に臥床、數名の來訪者があつたので夕遅くまで床上で語つた、十一時頃俄然發熱、終夜苦悶の裏に呻吟した。

▲十日(木) 今朝熱は卅九度以上に達し、頭痛岑々禁じ難く、唯もううとくと半醒半睡の間を往來した、松浦君が親切に訪ふて呉れた。

▲十一日(金) 終日熱去らず八九度の間を昇降した、が併し元氣旺盛、時々讚美歌を謳ふた、夢幻の裏に主は不思議に自分の心を開き、過日來幾度か筆を取り又は考へて遂に又筆を投じ、思想のどうしても纏らなかつた新著に付て示さるゝ所が少くながつた、感謝に堪へぬ、已に書き終つた約五十ペーヂを全然拋棄して、更に新なる方針に向つて進んだ、病氣の賜物である、餘りに働き過ぎた結果病を與へられたけれども、病に依つて亦こんな賜物を頂戴した、此夕祈禱會で兄弟姉妹らが熱火と成つて自分一人の爲めに祈つて呉れたことを後で聞いた。

▲十二日(土) 元氣頓に恢復起きて食事した、見舞客數名、何れも皆洗禮志願者で明日の洗禮式を氣遣ふてゐた。

▲十三日(日) 今朝不思議に熱冷へ頭は急に軽く成つた、布團の上で、受洗者、入會者の一人／＼の爲に祈つた、來集者百六七十名、受洗者廿一名入會者十一名、全會

靈氣充ち、何れも歡喜に溢れてゐた。此日北米オークランドの組合教會牧師額賀君から同情厚き手紙が來た、「靈化」毎號御送下され、非常なる興味を以て隅から隅迄通讀してゐます、傳道行詰りの聲は今日宗教界の到る所に聞かるゝのでありますが靈動のある所にはさう云ふ悲觀の聲は起りません、愛兄が主の靈に感じて必死に傳道に盡されてあるとは海の此方にある我々にも心強く思はれます、或日の祈禱會に大兄の話を話して皆が恵を分ちました、而して教會の一役員は傳道用として「靈化」を十部づつ送つて頂く様に申出されました……僕も渡米滿六ヶ年に垂んとして特別の境遇にある我同胞の爲に微力を盡して居ります、どうか僕の爲にも御祈り下さい、僕も基督の爲に死の覺悟で働きたい、働きの出来るものと成りたいと神様にねだつて居ります、愛兄の御健康を祈りつゝ」

今朝フト自分と信仰を異にする或教會からの自分へ對する排斥憎惡、一種の壓迫を感じつゝ、暫し不快の念が起つた、が併し直ぐ何物かゞ囁く如く「ア、何を御前は愚圖く、思ふてゐるのか、御前はモウとくに基督と共に死んだではないか、發狂したでは

ないか、狂人を狂人扱ひしたり、死骸を死骸扱ひするのに何の不思議があらう」と思ふや否、黒雲忽ちにして快晴、自分は誰にでも接吻したく成つて來た、事務所のストーブの邊で、それらの教會や、牧師役員達の爲に祈つた。夕の靈化運動は來會者約九十法學士谷口君其他の熱心な獎勵があつて一同靈雨に浴した。

▲十四日(月) 北風寒く、雹雪さへ混つて來た、午後は事務所へ、夕は自由メソヂスト教會の信徒會へ臨み、過去一年間の祈の實驗に付て語つた、來會者約五十名、始めより終迄熱火の如き祈禱が續出した。

▲十五日(火) 風雪依然、滿庭の落葉雨の如く、午後は主婦會に臨んだ。

▲十六日(水) 少くとも一週一度位、未明に起き出で、次第に薄らぎ行く東の空を眺めつゝ會堂に行き、清い、靜かな氣分で祈るとは決して無益などではない、其二時間を長く眠つた所で、どれ丈け健康の爲めに成らう、自分は何れの教會でも毎週一度の早天祈禱の催されんと願ふてゐる。

▲十七日(木) 終日「靈化」を書く、頭がぼんやりして適當の題目が捕へ難い、已む

なく附近の畠や、畦路などぶらぶらした、どう考へても出て来ない、之れも陳腐、あれもつまらぬで、頭はいよゝゝ混乱した、歸途偶然「聖きオルガン」と云ふとを感じ自分は主の機關でなければ成らぬ、自分の意見や、想像を書くのではない、活ける主が我を用ひて御旨を語らせ給ふのである。こう思ひつゝ歸つて「聖き器」の一篇を草した。

▲十八日(金) 終日事務所で種々の來訪者に接した、「靈化」を讀んで求道の志を起したと云ふ一商人も尋ねて來た、薩摩の涯から久しぶりに平岡君が上阪した、一別以來、君は益々信仰に進み、喜んでゐた、祈つて別れた、此夕の祈禱會は二階一抔で全く空席なく、ロマ書八章の後半を研究して、全員に一種の聖い火が燃へ上つた、誰も彼も基督の爲には責めも飢も裸も刀も怖れもないと云つたやうな勝利の感に打たれゐた。

▲十九日(土) 朝から馬太傳研究、夕は靈化運動、來會者約百名、藤本君の神戸諏訪山頭での轉心の實歴談は有益であつた。

▲廿日(日) 朝來風雨、野外禮拜のS、S、生徒らは可愛さうに濡れ鼠に成つて歸つて來た、夕の靈化運動も雨で廣告さへ出来なかつたけれども殆んど満堂の聽衆、土山君の火の如き信仰來歴談と一同涙に咽んだ。

▲廿一日(月) 今朝突然武田尾温泉へと志した、曾つては大煩悶、大悲感の身を寄せた同じ宿、同じ部室に、今や眞の信仰の歡びに充されつゝ一夜を過した、過去を思ひ出でゝは只もう小供のやうに嬉し泣きに泣くのであつた、午後の一時から翌日の午後三時頃迄、約十五時間が間傍目も振らず筆硯に従事した。

▲廿二日(火) 夕方歸宅、尼ヶ崎吉川君宅で集會した。廣嶋以來の會心の友、在ニユーヨルクの栗原基君から「……靈化で御消息を承り居ります、何處の教會も秋のやうに淋びしいのに貴教會の活動を多とします……」と書いて來た。

▲廿三日(水) 朝五時から夕の十時過ぎ迄東西に奔走した、濱寺の富豪大塚氏から「靈化」への禮狀が來た、氏は元南海鐵道の専務理事、大阪財界の一勢力たりし人であるが先年令息令嬢を一時に失ひ、夫人又病弱同情に堪へぬ……斯教に對し徹底的恩寵に浴せむとの希望を起し、看護の傍ら専心斯教に關する各書を耽讀致居候……機會も候

は、御立寄御示教を蒙り度小生も病床の妻も渴望いたし居候……」と書いてあつた。

▼廿四日(木) 午後天王寺邊の會員を訪問しつゝ、途中急に氣分が悪しく成つて來た。面も眞蒼何だか變だ、此儘仆れて逝くのではないかと云ふやうな感じがした、氣が遠く成つて終つた、氣附薬をと思ふても仕方がない、矢庭に洋食店に這入り、ポットワインを少し飲んで、次第に氣分が快復した、何事もなかつた、直ぐ又數家族を訪れたが然し牧師が洋食店で酒を呑んだと云ふのが何かしら氣掛りで人に見られる様な厭な感じがした。

▲廿五日(金) 受苦日にふさはしい陰氣な雨の日、終日斷食十字架上の主を忍んだ夕の記念祈禱に集るもの約七十、靈感湧き、頻りに涙を拭ふ婦人もあつた、山陽女學校的那須姉が尋ねて來て、二十年來信仰に遠かつてゐたが、「歡喜に溢れて」や植村氏の「祈禱の生活」を讀んで又信仰を恢復し、今では毎月「靈化」の來るのが待ち遠いと云つてゐられた。

▲廿六日(土) 主の復活に就いて語るべく朝から大小十數卷の書籍を獵涉した、年々同じ題目に就いて、新らしく語らうとするのだから苦しい、夕は堀兄宅で水曜會、打浴けた小集會で感涙に咽びつゝ祈つた。

▲廿七日(日) イースター、好天氣早朝榮光の主の御前に伏して、復活など痴人の夢の如く思ひ居る或兄弟等の爲に執成した、「復活の力」と題して語つた、散會後水口兄の宅で食事を共にした、君は今朝の説教で、多年の疑問が釋けたと云つて喜んでゐられた。

▲廿八日(月) 月末の二三日を著述と靜養に費すべく再び武田尾へ向つた、食事と一二度の入浴の外、夜も晝も只もう一心に筆を驅つた。

▲廿九日(火) 今朝早くより眼醒め、頻りに生ける個人的基督を思ふて嬉れしく、眞に自分と共にゐますを感じ、覺へずはね起きて感謝した、水聲淙々山氣爽やかに遙に鶏犬の聲を聞くのであつた、自分は自分の信仰のいよゝゝ明かに、確かなる方向に進みつゝあるを想ひ、従つて自分一生の使命も次第に明かにされつゝあるを感じて快云ふべからず、之れ迄の不徹底極つた生活をしみゝ厭ひ、今後は成るべく俗的關係や、

交際を避けて、主と交ること、聖書を學ぶこと、祈ること、道を傳ふる事に専心努力したいと思ふた。

▲卅一日(水) 早朝霜柱をザグ／＼踏んでウネリ／＼つた山巔の一本松の許で七年振りに祈つた、會つては煩悶と、疲勞と、淋びしい心で聖書を開きつ祈つた此松が根で、變りも變つた嬉れしい心で、自分は獨り感謝の涙をそゝいだ、何たる變化であらう、願みて隔世の感がある、主の手は確かに自分の上にあつた、見へざる主は絶へず自分を導いてゐられた。一浴後、朝の九時頃から夜の十一時頃迄書き續けて頭はぼんやりして仕舞つた、かくて突然大なる試みが來た已に三分の二迄書き終つた原稿を全部放棄せねばならぬと感じ出した、題目もダメ、内容もダメ、數日間の辛苦も水の泡と化つて終つた、自分はもうウンザリした、馬鹿／＼しいと思つた、覺わすペンを投げ出した、ア、困つた、残念だ。が然し二三時間も悶へ悶へた末、辛ふじて一點微かな光りを認めた、やがて俄然として深夜に太陽がさし昇つたかの如く感じた、とろ／＼と新題目新内容を發見し、スツカリ前とは違つた一書を案出した、ア、此時の嬉れしさ喩ふる

に物が無い、夜は沈々、露は湿々、月末客なく自分は獨りで喜び且歌ふのであつた。

▲卅一日(木) 今朝七時頃から執筆、午後三時頃迄に新らしい大体の組建が出来た疲れた体はもうヒョロ／＼で頭は丸で他人のものゝやうに感せられ出した、やがて入浴し登山し、氣を養ひつゝ夕七時の列車で歸宅した。



▲一 日(金) 終日事務所に、夕は祈會で予が此二三日間の現在の主に就ての經驗を述べ、一同恵まれて祈つた、余は余が卅幾年間の信仰經驗に依り活ける、個人的基督を受入れ、彼を信じ、愛し、日々彼と偕に歩むのでないと、信仰とか、祈禱とか云つても案外空漠なもので、力がないと謂ふことを頻りに感じた。

▲二 日(土) 濱寺に大塚氏を尋ね、住吉其他の會員を歴訪した、大塚氏と語ること約二時間、氏が如何に痛切に靈的宗教を熱求し、永遠なるものを懼れつゝあるかを思ひ、予は近頃になく愉快を感じた、夫人の病床で暫らく語り、辭して歸つた。

▲三 日(日) 今朝二時岡町の越山老夫人永眠、直ちに尋ねた、ア、美はしき、諄良の靈よ、如何に彼が主を懼れしか、如何に又此小さき我が如きものをも心より愛せしか、感謝に堪へぬ。

午前十時禮拜、予は「山上垂訓と活基督」に就て語り、基督若し我を生かし、不斷

に力と靈を注ぎ給はずば、かゝる人類最高の道德は到底實行し得られぬ、無理な注文である、只活基督を信じ、彼に近づき、交り、不思議の力を興へらるゝことに依つてのみ初めて此らの箇條が實行し得らるべきを述べた、猛雨會堂の窓を撲つて凄じく、集會少くシンミリとし、予は儼かに聖書を読み、祈禱しつゝ活基督の近きを感じた、夕も引續いて狂風豪雨、集會三十に足らず、聖書及び讚美歌中に現はれし活基督に付て語つた。

▲四 日(月) 朝の食事中、葛岡老姉永眠の報あり、直ぐ同家を訪ふた、午後二時納棺式、更に岡町へ行き五時又納棺式を擧げた、夕は天滿教會で開かれた市内組合教會聯合祈禱會に臨んだ、集會約三十何ら得る所なく寂寞の感に撲たれつゝ散じた、何物か聖靈の働きを妨げつゝあるかの如く感じた。

▲五 日(火) 今朝床の中に山上説教の箇條を一々數へ上げてそを實行すべく、主の御前に俯伏した、怒り、奸淫、明日の心配、人を審判く事等、凡ては基督の不斷の助けに依つて初めて實行し得らるることを感じた、今日二つの葬儀を司り、御榮を現

すべく祈つた 越山姉の葬儀は頗る緊張し、會衆滿堂、予が十五分間の追悼説教も自らが手答へあるやうに感じた。

▲六 日(水) 今朝床の裏で、いかに古今の宗教者等が世より責められ、迫害されたかを思ひ出した、而して彼らは苦めらるゝと共に愈々聖化され、榮光化されたかを感じた、パウロのユダヤ人に於ける、ルーテルのローマ教徒に於ける、ウエズレーは國教徒から、フォックスは當時の墮落教會、又は俗宗教家等から責められ、打たれ、入牢幾十回に及んだ、我國では法念も日蓮も同じ運命に遭遇した、此らに比して大海の一滴にも足らぬ予が如きものも、單に信仰と主義の故に、世間から迫害され、教會から追出され、先輩に捨てられ、後輩に輕蔑されて、いよゝゝ聖化され、純化さるゝこともあらば願ふてもなき幸福であるなど思ひつゝ、主の前に感謝した、來客稀れに終日執筆。

▲七 日(木) 朝より夕迄、天王寺邊から北野邊迄、大阪の南から北迄種々の家庭を歴訪した、しどろく降る春雨の中を、久しぶりに親しく訪ふて、或は爐邊に語り、或は病床に祈つた、訪問は好天氣よりか雨天の方が好いと感じた、今後も成るべく雨

降りの日に訪問しようと思ふた、在宅者が多いのと、氣が静まつて信仰談に適するからだ。

▲八 日(金) 終日事務所へ出張、此日偶斷食の目的も單に修養的でなく、モット宗教的であらねば成らぬと感じた、修養的では到底強い力が得られぬ、意志を練るとか何とか謂つて見てもダメだ、自分の過去の罪を悔み、如何に主の心を痛めしかを思ふて活ける現在の主の前に懺悔しつゝやるのでないこと永續させぬ、如何にも舊教徒臭くはあるが、今日我等の教會の弊が罪に對する深酷な、痛悔の念の足らないことに氣付いて自分は殊更に之を實行してゐる、我らの宗教生活が兎角淺薄に流れ易いのも畢竟罪惡觀の薄らいで來た結果である、自己の罪惡は勿論、教會又は社會一般の罪の爲に泣き苦み、主と共に血を濺ぐ迄に到らなければ兎ても深酷な宗教味は嘗ひ得られぬ。多年神戸女學院大學の教頭たりし木村君、今回東京女子大學へ榮轉の途次、汽車中から「斯かる所謂基督教會に貴下並に青木兄のやうな方は確に神の求め給ふ所です」と書いて來た、君の「科學と人生問題」は近來の快著、君の前途を祝して已まぬ、夫人亦

善良の人、臺北で生んだ子が信仰の子の一人である。

▲九 日(土) 快晴、朝床の中で、今日は茨木地方の訪問へと思ひ立つたが主の靈之れを許し給はず、明日の諸集會の如何に責任重きかを思ひ、終日身體を休め、祈りと靜思に時を送つた、午後獨りで郊外散歩しながら、活ける主を信するやうに成つた自分の幸福を思はずにはゐられなかつた、如何に從來の信仰生活の不徹底なりしよ、神とか、靈とか云つても全く空漠で、生命がなかつた、唯イエスの名に依つて見へざる神へ往き、心から主の前に罪を懺悔する時初めて力がある、自分は堤上の草の上に伏して心ゆく許り感謝した。

▲十日(日) 今朝は例の持病の頭熱足寒で、スツカリ説教が出来なかつた、が然し主旨だけは明白、則活ける基督に依つて今も依然として奇蹟が行はれ得る事、難船地震、不治の病床にあるものも、奇蹟的信仰に依つて絶望の底より希望と喜びの光りを仰ぎ得ると云ふことを説いた、夕の靈化運動には鐵窓廿二年の清水君が、率直に雄辯に自分の罪を告白した、自分は朝に似ず頗る有力に説教した、妻の眼病再發、両眼

とも見へず、座敷の物さへ搜らねば成らぬやうに成つた、積日看護の疾勞の結果であらう。

▲十一日(月) 終日病人の看護で疲れた、外は雨、内は病院のやう、然し人生には快晴の天のみが好いのではない、時に曇天や、雨天のあるのは深く考へさせられるから結構だ、世に若し病人も死も、不幸災難も一切なかつたら人間は果してどう成るだらう、其果ては極度の墮落に陥つて滅亡の外あるまい、歡樂極つて哀情多しとは人生の眞を穿つてゐる、花よ、月よで騒いでゐる所に悲哀がある、失望がある、峻山奇巖の間に愛らしい、花が匂ふてゐるやうに、不斷の不幸や、病苦の中にも人知れの慰安や、喜びや、感謝のあるものだ、雨と晴れとが都合好く交替して往くから人生は愉快だ。

▲十二日(火) 朝三時頃、長男の爲め起きて看護の已むなきに到つた、従つて朝遅く迄横臥例の如く祈る元氣がなかつた、朝來疲勞を覺へ、讀書も出來ず妻は病院へ、自分は獨り長男の病床で只ツクネンとしてゐた、火鉢に凭れて考へてゐると、フト自分

の心に變白山上のイエスの姿があり／＼と描き出された、自分もペテロと共に親しく其榮光の御貌を拜したかの如く感じた、所詮人生に安き所はない、只榮光輝く新天新地にのみ眞の安きと喜びのあるを想ひ、覺へずオ、主よと叫んだ。會津若松の兼子牧師から來翰、近々上阪、面會の上、親しく信仰上の話しがしたいとのこと、一泊を求められた、平生なら幾日でも喜んでお宿したいのだが、病人だらけの家庭ではどうする事も出来なかつた君は「靈化」、の同情者信仰の人である、午後マルタ會、主婦會、途すがら頻りに復活の主に付て考へた、復活は教會の基礎だ、信者の力だ、之れが若し迷ひなら基督教會は畢竟迷ひの子だと思ふた。

▲十三日(水) 雨、女中が出來た、昨夜から今朝にかけて十餘種の基督傳や論文など取出し、極端な獨逸流の不信説、保守的な正統説など比較研究して、愈主の復活の眞實を確め、自分目下の信仰が決して空しい想像でないことを思ふて嬉しかつた、が然し教理を承認してもそれが實際生きたものに成つて來ないと信じたと云つても、信じないと云つても實際生活上に大した變化がない、そんな信仰ならどうでも好い、とは

云へ若し眞にイエスが甦つて現に我が前に、我と共にゐますなら、而してそれを確信するなら、我らの人世觀は即時に根本から變つて來る筈だ、神と偕に歩むとか、神と語るとか、神の聲を聴くとか、神の召しを蒙つたとか云ふやうな形容でなく、全く生々とした、如字的事實と成つて來るからである。

▲十日(木) 午後蘆屋の今井姉宅で、阪神婦人會を開いた、山は櫻、野は一面の菜種の花盛り何となく浮き／＼するやうな春の一日を、間近かに海を眺めた二階の大廣間で、聖書を繙き、活ける基督に付いて語つた、説き去り、説き來つて感謝に溢れ、得も云へぬ靈感が一同の上に漂ふのを見受けた、夕は二三の來訪者があつた夜十一時頃迄執筆。

▲十五日(金) 此日一日の斷食も嘗に自分一人の罪の懺悔許りではない、自分の双肩に托せられた會員凡ての罪と不信仰を主の御前に代つて懺悔するのである、彼らの弱さと、怖れと、主を忘れ易さと、主の愛より遠ざかる事等を想へば頓に食慾の停止さるゝやうな感じもする、ア、彼ら一人／＼の爲めに祈らう、終日彼らの爲めに代禱

しよう。……種々の會員に逢ふた、病床にも祈つた、夕の祈禱會は櫻の満開に妨げられたのか集會や、減じたけれども依然として靈感に充たされてゐた。

▲十六日(土) 今朝早くから庭先きの川端で、差し登る旭日の光を仰ぎつゝ、佇立して祈つた、三十年來漠然としてゐた活基督を體驗して以來、自分の祈も、懺悔も、感謝も、喜びも一層生々して來た、何たる幸な事であらう、只もう嬉れしく、有難く言語に盡せぬ幸福が身に泌々と感せられて、傳道心の勃々起つて來るを覺れた。

▲十七日(日) 好天氣、朝來誰も彼も花見遊山に浮かれ出し、梅田邊の大混雜。朝夕の集會も多少其打撃を受けたらしく集會何時もの如くでなかつた、午後二三の病者を訪ふた、香川縣の未知の人から手紙が來た、自分は未信者で、寧ろ佛教的傾向を持つてゐるが、過日偶然「靈化」を読み、此手紙を認めたとの事「……私は京大河上博士から徹底せる一人の思想を徹底的に了解せよ、聽て其人を通じて複雑なる世態を正解し得る智能を得るに到り、終には自分も徹底的な思想の持主となり得るであらうと教へられた、この一言は私平素の確信を固め、以來教養上の態度となつた所のものであり

ます、私は本日偶然の機會に貴下の一人雜誌「此點已に徹底的也」である所の「靈化」三
月號を借覽した、私は懶き思いで讀み始め、漸次熱心が加はり、遂に感激を以て讀了したことであります、然も私の感激は基督に對してはありませぬ、貴下の徹底した態度に共鳴を覺へての事でありませぬ、私の如き未熟な後進者が經濟學に付き徹底的な河上博士に師仕する事が出來、更に絶大の問題である信仰に付、今まさに徹底的な貴下に師仕するを得んとしてゐるやに思はるゝ事は實に嬉れしき極みであります。

▲十八日(月) 今朝は近來になく全身に疲れを覺へ、どうしても早起が出來ず、八時頃迄横臥した、が然し活ける現在の主がいと近く枕頭に立ち給ふを感じて嬉しかつた、病兒が夜來惡夢に襲はれて苦かつたと云ふから、そんな事ではダメだ、モット／＼基督や天國の事を懷ふて夢に、幻に主の榮光を拜する迄行かねば成らぬと謂つた、橋本利邦氏から端書が來た「……今朝二時目さめて枕邊を見ると初更に届きしものと見へ郵便物ありそれが「靈化」十號と渡邊たき子の封書なり、先づ「靈化」を披き残らず讀了、一種の感に撲たれ、思はず感謝を捧げたり、先生が靈感を以て書かれたることゆへ固よ

當り然に候へ共、時刻が時刻なれば一層有難拜讀仕候此に一言先生に敬意を表す……」

▲十九日(火) 終日執筆、此頃事毎に主の現在を感ずるやうに成り、何を見、何を想ふに付けても、生ける主が我を愛し、我を導きつゝ、お給ふ事を感じて獨りで雀躍することも少くない、只遺憾な事は訪問の時足らず、兄弟姉妹と爐邊親しく語り得ないことだ、土佐へ歸郷中の葛岡兄から「……不相變郷里は戀しく、土佐教會及び高知教會の信者諸兄の訪問を受け「歡喜に溢れて」の話持切りに候」と書いて來た。

▲廿日(水) 雨、早天祈禱會、店員會等を終へて歸宅、直ぐ又執筆、一二の姉妹の來訪の外何らの妨げなく書齋裏の人と成つた、夕方百々原兄宅の水曜會に臨んだ惠まれた小集會であつた。信州戸倉温泉の志川嬢から「靈化」への熱い感謝狀が來た、「……先生難有ふ御座いました、今宵ほど神様を深く感じた事は御座いませんでした、二三日忙しさについ拜見出來ませんでした「靈化」を少し拜見して休みます積りでひろげましたらなんとも云ひあらはせぬ嬉れしさに夜のふけるも忘れて拜見しました、今はもう草も木も寝むるとか、北風の音がきみ悪く、千曲川の流れの音のみ聞えます、先生難有ふ御座いました、私はこう云ふより他に存じません、改心致しました、この自分の心が神様に對して申譯なく恥かしく感じました」

▲廿一日(木) 霖雨打續き陰々たる悪天氣であつた、稻田での親愛會に臨んだ、何れも六十七の老人達で、宮脇氏は年來の酒造を廢し、高粱教會大迫害の中より生れたことを語り、橋本氏續いて村民迫害の的と成りつゝ、信仰に入りしことを述べ一同の感を引いた、夕は數名の青年達が尋ねて來た。「靈化」十號に出した「聖き器」てふ一文は愈々窮した揚句、獨り田圃路を散歩しつゝふと思ひ付、直ちに歸宅、筆を執つたのであつたが、普通の讀者にはどうかと思ひ、後で面白からず感じ、幾度か反省したのであつたが、意外にも二三の人々から「聖き器」を読んで感激した旨態々報じて來た、全く心配無用であつた。館山漁業工場主任清水老兄が、令閨發狂の爲め少からず煩悶し、悲痛の情を抱きつゝ態々尋ねて來て、天滿教會の講壇の前で只二人、熱涙を揮つて祈つたのは昨年六月の事であつたが、其後令閨は永眠され、君今房州の海岸で働いてゐられる、最近自分への手紙は全く感激と喜びに充たされてゐる「……小生も今少

し経過致し候へば〇〇は償ひ可申、御教會へも多少寄贈仕度心掛け居候……」

▲廿二日(金) 陰雨未だ霽れず、長男の疾良からず、妻の眼も依然としてゐる、自分は一人で内外多事、寸暇もない、時に心中雲の起ることもあるが、活ける主の御顔を仰ぐや否忽焉として快晴の天と成る、感謝の外ない、怒りも、悲哀も、心配も、不平も主の名に依つて祈つてゐる中、何處にか飛んで往つて跡もない、日に幾回か祈ることとは何も拵へた事ではない、已むを得ないからだ、修養の及ばぬ所を信仰がする、自分の不足を補ふものは絶大無限の力である、活ける現在の主の前に全身全靈を投げ出して祈り且懺悔する時、多年勝ち難い悪習慣にも、弱點にも不思議に勝てることを實驗して堪らなく嬉らしい。

▲廿三日(土) 午後S、S、大會に出た、各派の舊友知己に嬉れしく逢ふた、銀座メソヂストの鶴飼牧師「君の顔は恵まれて來ました」伊勢の青年牧師、「自分は先生に逢ふべく態々上阪しました」靈南坂の小崎老牧師「近來大に御活動の様子だ、どうかシツカリやつて下さい、君等のやうな人が今後大にやつて呉れねば成らぬ」倉敷の

東方姉「先生に是非逢ふて信仰上の話が承りたいと、思ふて來ました」日向の枝本氏「私は「靈化」を一字一句讀んでゐます」近江の武田牧師「大津は君に依つて恵まれたさうな、八幡にも是非一度來て呉れ玉へ」等身に餘る讚辭を受けた。

▲廿四日(日) 早朝起きて聖書と、アケンピスを読み、禮拜後S・S・大會代員の人々に逢ふた、倉敷教會の東方姉と親しく語り、夕は長らく手紙のみで交際してゐた安原姉の來訪に逢ひ、感謝に溢れた、嬉れし涙の祈で別れた。

▲廿五日(月) 終日「靈化」執筆。

▲廿六日(火) 同上、ア、多忙の一日早朝より夕遅く迄寸暇なく、書き了つて頭はボンヤリした、原稿も幾度か書いては破り、破つては又書いた、中々骨の折れた仕事である。

▲廿七日(水) 「靈化」脱稿、疲勞を覺へた、臺北の吉田ドクトル來訪、「靈化」へ客附された、何時もながら氣高く、懐しい人格者、臺北の様子を聞いて悲喜交々到つた

▲廿八日(木) 小雨、坂神訪問、病床に緒方夫人を尋ねた、清談盡さず、聖書に依

つて活基督を説いた、魚崎の堀内氏其他を訪ふて歸つた。

▲廿九日(金) 好天氣、今朝斷食日に、痛切に十字架上の主を仰いだ、我が罪ゆへ血を流した主を、今も依然として此不信の僕の爲に幾度か苦み泣き給ふ活ける主を思ひ出しては己に克ち、十字架を負ふことが嬉れしく感せられた、が然し自分は今之れと謂ふ十字架を負ふてゐない、貧乏や、病人位は世の常の事だ、責めては斷食でもして主の御苦みの幾分にも與りたいのである。島田姉から長い相談の手紙が來た、同情に堪へぬ、自分は此優しい信仰厚き姉妹の爲めに祈り且熟慮した。

▲三十日(土) 東洋機械製作所の松岡君が「靈化」へ寄附された、君の熱心と温容は逢ふ毎に一種の好感を與へられずにはゐない、自分は今活けるものゝ前に立つてゐると云ふことを深酷に、痛切に感ずる時、即活ける基督を實感し、體驗する時、人格は一變し生活は一新する、宗教生活とは畢竟活けるものゝ現前を不斷に感じて、悦び且生きて働く事に外ならぬ。

五 月

▲一日(日) 今朝四時祈る、暗い部屋も明るく感じた、メツシヤの王國、天の報酬等に就て想ふた、從來の自分の信仰が希臘式哲學的に偏して、更に具体的な主の天國觀とは餘程の隔りのあることに氣付いた。

朝拜は降雨に拘らず百二三十の會衆で、夕も八十位、頗ぶる緊張した好集會であつた、森さんが毎日銀行へ通勤の身で、宅に病人あるに拘らず、「靈化」へ拾圓寄附して呉れた、感謝に堪へぬ、彼女は靈化運動か結んだ善果の一つである。

▲二日(月) 曇天、五時前起きて祈る、ア、力溢る、今日も起きて戦はん哉、瞑目すれば此所にも彼所にも往きて救はねば成らぬ人々が多い、麥は熟してゐる、どうしてつまらぬ御附合ひなどして遊んでゐられよう、ア、時は飛ぶ、生涯は短い、而してする事が多い、奮闘するのみだ、午後は芦屋邊迄訪問、夕は執筆。

▲三日(火) 昨夜妻も長男も氣分悪く、予は幾度か眼醒めて其世話をした、今曉

うとく夢寢の間に、一種淋びしい思ひの雲が起つた、こんな時に、曾ては堪らなく悲哀に打たれたものであつたが、直ぐ起きて祈り、主の近き事、やがて其榮光を拜すること、其時主と共に世を治むる事、此卑しき体も日の如く輝く事、「ア、善且忠なる僕ぞ」との御聲に接することなど想ひ起して忽ち心の曇りは晴れた、歡喜に咽んだ起きて馬太傳を難有拜讀した、夕は老松町の四辻で靈化運動舉行、十餘名の同志交るべく叫んだ、救世軍の熱心な兵士達も加つて來た。

▲四 日(水) 今朝某君と基督の復活に就いて語り合つた、君は肉体の復活を否み基督は神の子だから、死も、甦りの必要もないと謂つてゐた、君は餘りに抽象的、哲學的に基督を考へてゐる、然し基督教はモット具體的な事實である、例へば今天神橋の上で人殺しを見て來たと云つたやうな生々した實際の出來事だ、解釋や、理論は抑第二第三で、此事實を信するか否か、第一首要の問題だと答へて置いた。關西日報主筆、齊藤吊花君から手紙が來た「……過日天滿教會に於て初めて説教拜聴、基督の人格主義に關する高論、至極同感、難有拜聴仕り候……」氏は新島先生の薰陶を受けた

る人の由、故網島梁川氏とは無二の親友であつたとの事、夕方東京高商出身、三井物産の某君初めて來訪「……自分は曾て植村氏の説教を屢々聴いたが要領を得ず、海老名氏の説教は非常な雄辯ゆへ時に感涙を催したこともあつたが、歸つて考へて見れば何もつかむものなく失望して後禪學に走り、更に淨土宗に往つて漸く安心を得た、が併し餘りに現世を離れて、山にでも這入りたく成り、友人なども心配してゐる、それで煩悶して先生を尋ねて來た……」云々、語ることに殆んど二時間再會を約して別れた。

▲五 日(木) 庭前のツ、チ雪と咲き、幾株のバラは眞紅を呈し、青葉若葉の夏景色と成つたが、然し此日猛雨、見る間に憐れな落花燎亂の有様と成つて了つた、塩屋ミ、コザートの別荘に加藤姉を突然訪ふた、夕食を共にしながら楽しく祈り且語つた布哇の堀牧師から「……何卒我組合教會内に今一段靈化を味ひ、無私の眞義の尊重せられ候様御盡力の程願上候、青年牧師の中、靈的實驗の不足を認む何卒御指導を乞ふ……」との手紙が來た、君は同志社出身の先輩、十餘年來布哇傳道に従事せられてゐる。

▲六 日(金) 大雨、天陰々路上人稀れに、予も終日事務所に引籠り、夕方二三の

人々を尋ねた。

▲七 日(土) 「靈化」の同情者神戸の中田氏から小生が傳道慰勞にとて今朝態々三十金を贈られた、厚意多謝、感涙の外ない、が然し自分の傳道に何の慰勞の價値があらう、多年不成功の傳道のみして、何ら褒めらるべき理由もないのを遺憾とする大津の今井姉から書面が來た、「……歡喜に溢れて……」に依りてどんなに私は恵まれたことであらう、今も暇ある毎に取り出して涙で拜讀してゐます、信者の方にも未信者の方にも拜借してどんなに喜ばれてゐることであらう、其上に私は直接先生の御風姿を拜し直接あのほんとうに靈的の御話を伺ひ、午後の婦人會によりて受けた印象、あれに依りて私の生活は活氣が出來、感謝にみち／＼てまゐりました」午後増田銀行に重役の上杉君を訪ふた、何時もながら快活の人、近々天滿教會人會の筈である、早川商會の坂本君が尋ねて來た、君に福音を説くこと約一時間、近頃實業界の有爲の青年達が次第に眞面目に、純なる宗教を求むるやうに成つて來たことは喜ぶべき現象である。

▲八 日(日) 午前三時、眼醒めて祈ること約二時間、四隣聞として神澄み氣爽や

かに、主の現前を感じることに切であつた、丁度去年の此頃、想ひ出せば五月五日の朝から約二ヶ月間、予は殆んど眠らず、毎朝／＼二時三時から起きて祈つた、それが遂に靈化運動と成り、「靈化」の發刊と成つたのである、一ヶ年を経過して謂ひ知れぬ感があつた、ア、此一年間に予は如何に多く恵まれたことよ、過去十年廿年にも優つて、神は予に近き、意外の共鳴者、同情者を與へ給ふた、感謝に堪へぬ、此日臨時洗禮式舉行、丹波の福知山から態々上阪し、感涙に咽びつゝ受洗した島田姉は「靈化」の生んだ信仰の子である、眞劍の人である、夕の靈化運動も約八九十の好集會であつた。

▲九 日(月) 終日只新著に就いて思ひを凝らした、又もつまらぬと感じてガラリ一切を擲棄する氣に成つた、只茫然とした、風呂に這入り、庭の周圍を散歩しつゝも考へ續けたがダメ、夕方十餘種の書を取り出して見たが、それもダメ、ヤット十一時頃に成つて急にベンが動き出した、暫くにして生氣に充ちて書き直しにかゝつた。

▲十 日(火) 朝から書いた、齊藤吊花君から手紙が來た「本日歡喜に溢れて」一部求めて參り燈下耽讀、三分の二ばかり卒讀致しました、巻を措く暇なく面白さを感

しました、…「靈化」の日記は實に面白く有益でした「靈化」は理想的雑誌です、アナタその人の全生命であります、最後まで一人で書いて下さい、そこに漲つてゐるエネルギー、信仰、愛が私を非常に喜ばしめました、……」。

▲十一日(水) 朝三時頃眼醒めて考ふ、六時早天祈禱會、終日執筆、一人の來訪者なく、思ひ存分に書いた、一旦出來上つたものとして奇麗に清書してゐた約四十枚の原稿紙を、盡く反古にして新たに又書き直した、体力消盡の感がないでもなかつた、けれども心中の愉快は喩ふるに物が無い。

▲十二日(木) 午後は岡町へ越山姉の記念會に臨んだ、予は死後の復活体と、天國の實在とに就て語つた、此らの問題は全く神の默示に依る外ない、如何なる哲學者、思想家の臆説も想像に過ぎぬ云々、甦りが單に幽靈然たる無形の靈でなく、一種の靈化されたる形体のある如く、死後我らの住家たる天國も單に神と我との精神的一致や又は夢に夢視るやうな空漠の世界ではなく、靈化された、輝ける一種の場所があることに就て痛切に語つた。

▲十三日(金) 朝三時より夜明け迄祈禱及び默想した、古豫言者特にエレミヤの狂態、聖フランシスの裸体説教、日蓮の辻説法等何れも時代を警醒せん爲めの方便であつたことを思ふた、主の現前を一層感じ、信仰生活の徹底を期すること、財産も時間もモット聖別すべきこと、主の御榮への爲めには如何なる奇行狂態も敢へて辭せざること等思ひつゝ、夜が明けた。今日大本教や、多田某の無名教のやうなものが起つて所謂智識階級や、婦女や、金持連など感しつゝあるのは時代の變調とは云へ、實は神道佛教は勿論、基督教會迄が下火と成り、力なく、此らの人々を引付ける丈けの或物を缺いてゐるからだ、クリスチャンは此らの現象を一笑に附せず、寧ろ直接自己の責任として天に向つて熱涙懺悔すべきだと思つた。

▲十四日(土) 今朝臥しつゝ天國の喜びを染々と味はされ、「値貫き眞珠」に喩へられた主の御眞意がやゝ解せられた、ア、メツシヤの王國の一日も早く此地に實現せよが、其時義人は日の如く輝くであらう、罪人の首なる我も其榮光の中に加へらるゝ嬉れしき。

夕方茨木に病牀の關川姉を訪ひ、病氣は醫者や藥が治すのではない、自分が治すのだ、否自分と神との協力だ、其他のものは一切補助だ、大切だが根本ではない、自分で煩悶したり悲觀してゐては如何なる名醫も治すことは出来ぬと勵まして置いた、直ぐ京都高倉のメソヂスト教會に往つて靈氣に充ちた祈禱會に臨んだ、歸途神戸の中田氏に逢ひ、梅田驛に着く迄約一時間、少しの休みもなく徹底的信仰に就て語つた。

▲十五日(日) 朝夕ともやゝ集會を減じ何となく寂寥の感が起つた、とは云へ朝の説教は意外に恵まれ、講壇下の二三の人々が頻りに感涙を拂ひつゝあることに氣付いた、此日初めて出席した奈良高師出身の某姉に面會し、後で事務所に約二時間餘り語つた、自分は久しく信仰を求めてゐましたが其折を得ず、今日初めて救ひの喜びを感じ、感謝に堪へぬと嬉れし泣きに泣いてゐられた。

▲十六日(月) 午前中靜かに考へつゝ昨日の集會の朝は百に充たず、夕も五十に足らざりしことを思ふて、何か自分に過ちなきやと頻りに反省した、多少不安の念も起つた、が然し主は近く予に語り給ふた、パウロを見よと、受洗や、集會數の多少の如

き問題ではない、そんな外的、一時的の事に餘りに心を痛めては成らぬ、パウロの生涯を見ると何時も大集會のみ續けたのではなかつた、或は獄で、或は信者の宅で、或は川端の土手の上で、少人數相手に主を説いたのだ、彼に人を引付ける雄辯はなかつた、が然し雄辯のアポロ今何處にありやだ、パウロの残した不朽の寶はやツぱり書簡だ、否書簡中に残された彼の熱烈な信仰と愛とであつた、徒らに一時的盛衰に心を動かすのは御旨でないと感じた。女子青年會總幹事の河井道子嬢に逢ふた、此夏御殿場で開かるゝ夏期學校講師として一週間來援すべく依頼された、久しぶりに富士の高峰を擔端に見つゝ讀書執筆の快を食ふことが出来るであらう、夕は京都京南教會で説教した。

▲十七日(火) 午前中旅館の一室で讀書、午後は岡崎公園の圖書館で十餘種の宗教書を飛びつゝに讀んだ、夕説教を了へ、十二時過ぎ歸宅した、途中電車の中で、パウロやウエスレーの事など想ひ續けた。彼らは何所にも有力な教會を建てたのではない。只信仰を確立した迄だ、所々に追ひ廻はされ、迫害されてゐたのだ、一時的の成功失

敗など云ふに足らぬ、寧ろ生命に掛けて正純の信仰を確立し、宣傳し、絶叫することだと感じた。

▲十八日(水) 今朝五時過ぎ起きて早天祈禱會に出席した、既に半ヶ年間毎週繼續せる此祈禱會も今朝の如き非常に出席も増し、惠まれて來た、今日フト感じた、自分畢生の使命は活ける基督と其救ひの力を宣傳することだ、従つて明白に基督を言現はされぬやうな講演や、寄稿など一切拒絶の外ないと、生涯は短い使命は重大だ、只此一時を務めても足りないのに、何の其他の第二次の事に力を費す暇があらうと思ふた、自分は自分に共鳴し、信仰と主義を同ふする教會又は會合ならば如何なる教派如何なる小人數の集會にも喜んだ行つて助けようが、信仰や個性を無視して只協同だとか、協力だと云つたやうな外的な考から、強迫的に、押付け的に餘義なくされるやうな所には一切拒絶と覺悟した。之れが予に對する主の使命を全ふする所以で、同時に個性尊重の意義ある生涯を送る所以だからである、終日執筆、外は糸のやうな雨が降つてゐた。

▲十九日(木) 少々發熱頭は重つたが午後主婦會に臨み、終つて天王寺邊迄訪問した「靈化は一人の執筆で徹底してゐる、「神と偕に歩むの記」は非常に好い今後どこ迄も先生一人の執筆でありたい、こう云ふ風な宗教雑誌は他に比類がない」と謂ふやうな手紙や、傳言を色々に受けた、東京學院の遠藤君から禮狀が來た、「……先生の靈と犠牲とになれる靈化……私を勵まして下さるのは先生の聖靈に満てる信仰であります勵まされます、沈滞して居る宗教生活、偽善との戦、祈禱によつて……靈化は靈に餓へてる人々に分けてやります……」。

▲廿日(金) 早朝より病床の姉妹を訪ひ慰め、歸つて事務を取り、更に又他の病者を訪問した、夕の祈會も活氣旺盛の状態であつた、加州パークレーの大坪君から手紙と金が來た「……靈化毎號難有拜見して居ます、睡つてゐた信仰が、目さめかけてゐる様な氣持がします、何事も現代かぶれして居るものには尤も有益な讀物であります……」。

▲廿一日(土) 今朝祈の中にふとムーデーを想ひ出した、自分は彼の説教や、傳道

のやり方に餘り感心してゐない。人情話のやうな説教風、餘りに米國式な、廣告的(好い意味ではあるが)な傳道法を好まぬ、が併しやつぱり彼は偉かつた、兎に角殘してゐる、聖書學校は勿論、彼の一派が出来、今にムーデー流の信仰や、説教が中々熾んに流行してゐる、偉いものだ、之に反して理屈ばかり云つて、純なる福音を馬鹿にしてゐる人々には何一つ殘す所なく逝くのが多い、情けないとだやはり信仰のない人は一時元氣なやうでも早く老衰し殘す所はないのである。金森さんでも元の福音主義に復つたればこそ今日あるが、然らざればとくに世から忘れられてゐるのだ、三思せねば成らぬと想つた。熊本縣水俣の緒方姉から、名古屋の渡邊姉から親情溢るゝ書簡が來た「……天滿教會にお出になる方々は實に幸福と存せられ候、今もなほ暖かき御集りにみわ御懐しく存じ上候……」名古屋の某教會に出席したけれども「天滿教會の様に暖かに思はれ不申」、「教會に靈化も居らず」云々、ア、天滿教會よ、汝はしか稱せらるゝ價値ありや。

▲廿二日(日) 朝夕とも靈感の溢るゝを覺へた、集會も次第に増し、此日は西は垂

水、兵庫邊から、東は茨木、四條畷附近から汽車や電車で集つて來た、數通の端書や封書も受けた、何れも「靈化」への共鳴及び感謝の手紙であつた、煩悶せる一青年は此朝教はれたと云つて歡んでゐた、午後は病牀の西村兄や宮脇老兄など歴訪、活基督に就て語つた、會員中の一人から「……先生私はどうしても先生一派の信仰と、共鳴を感ずる事が出来ません、ですからたまらなく寂しさを覺へます……」との手紙が來た、自分は彼の率直と正直とを愛する、而して自分も曾て同じ途を辿つて來たのだから彼に少からず同情を表した、自分が今日の活基督の信仰に達する迄には約卅年かゝつた、さう直ぐ誰にでも分るものではない、全く秘義だ、が併し何人にもせよ、此信仰に達する迄は決して其心に眞の靈的平安も喜びもない事丈けは確かだ、之れが何より眞理たる活ける證據である。

▲廿三日(月) 雷雨あり、「靈化」執筆、長男の病快しとて久しぶりに椽側に出で、花をいぢる、食慾も不思議に進んで來た。

▲廿四日(火) 朝より執筆、外遊の杉野君から羅馬發の繪端書が着いた、至極壯

健で各地巡回中との快報に接した、二三の來訪があつた。池上大阪市長から市民教化に關する懇談したいから公會堂へ集つて呉れとの依頼狀が來たけれども遺憾ながら自分は缺席した、獨立獨歩、誰憚らず活基督を説いて根本的に市民教化をやりたいからである、廣い意味で、教會と市との提携は結構であるが、自分は寧ろ市民に罵られ、役人から迫害されつゝ基督を説いた方が一層有力に徹底的に市民教化が出來得ると信するから已なく斷つたのである。

▲廿五日(水) 神戸市に新たに家庭を造つた谷口君から今夜是非一泊すべく來て呉どの手紙を受け夕方急に尋ねて行つた、君は帝大の法科出身で新夫人は東京音樂學校出の才媛、今年同じく帝大工科を卒業した垂水の田淵君も來て四人圓座、夕餐を共にした、五時頃から十一時頃迄小止みなき信仰談に夜の更くるを忘れ、聽て頭を垂れて交るゝ熱い祈を捧げた、如何に彼らが神と基督を熱愛し、純福音に共鳴し、使徒的信仰に懷れつゝあるかを想ふて感謝に堪へなかつた「若し主が召給はゞ我らは何時でも献身する」と云つたやうな勇ましい決心と態度に自分は涙が零れる程嬉しかつた。

▲廿六日(木) 今朝神戸から歸つて直ぐ靈化を書かうとしたがどうしても筆が動かす、丸で思想の泉が枯渇して了つたかと思はれた、自分は窮した結果、只もう無理に祈り續けた、靈氣溢るゝを覺へ、とろゝと「炉邊」や、「主論」を書き終つた、夕は上町訪問。

▲廿七日(金) 今朝程疲れたことはない、只うとくとして七時頃迄臥床した、幾度起きて見てもダメ、どうしても主と交ることが出來ず又も寢轉んだ、漸くにして起き上り暫時祈り、生ける主の前にて聖書研究色々のことを思はされた、悪魔は自分の机の側で頻りに呷るのであつた、多分疲勞の勢であらう、「∴御前の信仰は間違つてゐる、基督は生きてゐない、現代人はそんな信仰を有たぬ、次第に人々は去つて了ふぞ。」自分はサタンよ退けと叫ばずにはゐられなかつた、覺へず書冊を傍に抛つて置いて獨語した。「サタンよ、異論などを云ふな、自分は一人に成つても好いのだ、此信仰が自分から奪つて了つたら何があらう、跡には只憐れに寂びしい殘骸あるのみだ、人が共鳴じやうが、すまいが、そんな事はどうでも好い、自分は只獨りで何所迄も此信仰に立

つて行くのだ、「次第に人が去つて了ふ」と云ふが、サタンよ退け、汝の巧言は事實が裏切つてゐる、此信仰に立つてから自分は一方に多少の友や、同情者を失つたけれども他方にはヨリ熱心な、眞實な友を天下に得た、ア、到る所に共鳴者がある、世界が廣く成つた、自分は「若し此で棄てられたら」布哇でも、朝鮮滿洲南洋の島々にでも往つて此信仰を宣傳するのだ……此活ける基督の信仰以外に何があるか、如何なる有力なるものがあるか」と叫んだ、「靈化」の注文が續々來る、書記の廣田君が又倒れた一寸困つた、一日も早く全快を祈る。

▲廿八日(土) 近頃や、疲勞の氣味で、(自分よりも他からさう云はれて)當分讀書執筆を廢する氣に成つた、會員達の我家庭への熱き同情は感謝に餘りがある。病氣するのは自分丈けの難義でなく、人に迷惑を掛けるからイヤだ。

▲廿九日(日) 今朝切に主を想ひ、榮への御顔を仰いで、堪へ入るやうに感じた、「我キリストに往く」と心から歌つた、ア、主に行う、活ける主に、世の終り迄我らと偕にゐ給ふ主に、朝拜はや、疲勞を覺へて力なく夕は不思議な程元氣に溢れた、集會

約七十。

▲卅日(月) 今朝も喜びに充ちて祈り且感謝した、今日朝日の社説に「根本は個人」と題して今日社會の現状の甚しく腐敗したとを論じ、ツマリは個人が眞に善良でないからだと結んでゐた、何も珍らしくはない、自分が近頃八ヶ間敷説いてゐる事だ、社會と斗り云つて、個人の救や聖めを度外視し、輕視せんとする人々が却て社會に後れ、社會から捨てられんとすることを憐れに思ふた、終日何となく力なきを覺へ、暫時讀書と執筆を廢して、専ら祈る事にした。

▲卅一日(火) 午前十時、中谷兄の嬰兒の葬式に臨んだ、一嬰兒の死は帝王、將軍大政事家の死に比して云ふに足らぬ程小さい事件であるが親に取つては特に日夜彼を愛し、育て、抱きつゝあつた母に取つては國家の興亡、世界の變動にも優る大事件だ、神に於てもさうである、神は此の小さい、一人の幼兒の生死をも、凡て其記憶のレコードの中に永久に留め給ふたのだ、一羽の雀さへ忘れ給はぬ神が此一小兒の生死をどうして忘れ給ふとがあらう云々」と説いた、全員緊張の様子であつた、夕は久しぶ

りに一切の仕事を廢して小供に成つて、小供らと共に遊んだ、金澤病院の宮川姉から優しい手紙が来た「……小さい私が今此うして先生に御目にかゝる事を心から御喜び申します、私筆とるのは始めて、御座いますがずつと前から主エス様に由りて御先生を御知り申して居ました、そしていつも未だ見ません先生の清い御事業の上に神様の御めぐみを祈らせていたゞいて居ました、忘れも致しません、昨年暮れ、寒い北風の吹く午後、静かに看護婦室で、カチ／＼と時計のきざむ音のみを耳にし乍ら「歡喜に溢ふれて」を讀ませていたゞきました、私は幾度も／＼膝を直してエス様に心から喜びの祈りをさゞげました、毎月御發行になります「靈化」をも一字々々くり返して讀ませていたゞいて居ります、ほんとうに口のへたな筆とつても亦へたな私はいまゞでに何度も先生に此心からの喜びを申し上げ様と思ひつゝ、筆のあとを耻ぢて、一人御祈り申して居ました、今日はどうしてもこれですまされませんで汚い筆をもかへり見ず、今此處でこんな澤山御禮申しあげます、いつまでも先生私達を主と御一所に導いて下さいます、切に／＼……廣い病院の一隅にひたすら主をひざまづきあふぎ奉る小さい婢

の一人居ります事を御思ひ出しになりました時、御祈りのはしに加へて戴けばほんとうに嬉しう存じます……」。



▲一 日水) 終日雨、心ゆく斗り祈りたいと思つて雨を犯して箕面山に上つた、轟々たる老松古杉は濛々として雨にどざざされてゐた、人足稀れに、數名の中學生がビシヨぬれに成つて歸るに逢ふた、やがて瀧に達した、夜來の雨は瀧の水量を増して凄まじい勢ひであつた。

谿聲、瀑聲、雨聲の中を金の鈴でも振るやうな綺麗なカシカの聲がまじつて夜は無限界へと沈んで往つた、只もう夢から夢の世界に引込まれるやうな眞の淋びしさであつた、夢に一銀行員に逢ふた、彼は若い文學士で銀行員の品行を矯正すべく倫理を説いてゐるが全く力がないと概いてゐた、自分はすぐ「生ける基督」と叫んだ、彼は直ちにうなづいた、そこだと賛成した時夢は醒めてしまつた、夜沈々、雨は益々降つて來た、十二時頃自分は急に眼さめてしみじみと主に交つた、ア、嬉れしい、心強い、「主は近し」何物かぬらい力が自分の全身をハタと握つてゐるかのやうに感じた。

▲二 日(木) 雨、早朝汽車に乗つて三田方面へと旅行した、途中ハイネの詩集を繙き、世界的戀愛詩人の熱腸から迸り出づる愛の歌を耽讀した、而して自分は此青年詩人の情人への愛を活ける主イエスへの熱愛として之を讀んで往つた、肉なる乙女や、世の情人への愛は何時しかさめて淋びしく、悲しく成るからである

おまへは年とつた

わたしは一層年とつた

我々の春は行つてしまつた。

お前は冷たくなりわたしは一層冷たくなつた。

冬が迫つてくると共に、あゝものゝ終りは悲しいものだ。

たのしい戀の惱みのあとからは戀のない惱みがやつて來る

生のあとには死がやつて來る。

(生田氏譯)

が然し神をラブする、イエスを戀愛する我らには此冷たい死の恐れがない、愈々行つて愈々春に成る、明るく、暖かく成るのみだと思ふた、ア、青春の戀、悲しい跡、

間もなく冷たく成るやうな一時的の情熱ではない、イエスを愛する我らの心はどこしへの春である、盡きせぬ歡喜の泉である。

▲三 日(金) 早朝より夕方迄事務所で、求道者の來訪を受けた、女子青年會の聖書の組で教育ある七八名の婦人達へロマ書を講じた、夕の祈會を終へて歸り、どうしたのか胸部はげしく痛み出し呼吸苦しく、夜半迄寢返りも出来なかつたが、翌朝不思議に快癒した、淡路の安原姉から岩屋傳道のことを懇々依頼して來た。

▲四 日(土) 今朝食事前にふと感じた、地獄、天國、惡魔、天使、十字架、復活などと云ふとは如何にも古臭い、天主教のやうな感じがして、多年我らの教會では殆んど説くものなく、偶々語つても寧ろ嘲弄的な形容として用ゆる位なものであつたが、近頃不思議にそれが生き返つて來たかのやうに感ぜられ出した、それは自分ばかりではない、寧ろ世界的傾向である、過日も若い工學士の某君が「自分は十字架なくして救はれぬ、地獄の苦みが恐ろしい」とまじめに語つてゐた、從來餘りに冷たい理屈に流れてゐたのが力のなく成つた原因で天國や地獄をモット確かにハッキリと説けるやう

に成らねば講壇に力のあらう筈はないと思ふた。夕は中川工學士の結婚式を司つた。

▲五 日(日) 朝は「イエスの豫言」と題して語つた、午後は故今井樟太郎君の十五週年紀念會で「予が聖書觀」と題して語つた、内村鑑三氏が病氣で來られなく成つたので、其代りを急に頼まれ、何を話さうかと随分惱んだ、會衆滿堂、疲れた体にもどこからか火の出るを覺へた、會員一同から予が家庭の病人の爲め特に多額の見舞金を頂戴した、感謝の外ない、願くば主厚く彼らに酬ひ給へ、三年越しの長男の病氣、娘の洋行、今回の妻の眼病等何らの蓄へのない自分の經濟には容易ならぬ打撃であつた物價最高値の折柄、どうしてやつて來たのか分らぬ、不思議だ、全く不思議である。

▲六 日(月) 小雨、早朝梅田から汽車で神々の住み給ふてふ淡路島へと向つた、明石驛下車、直ぐ小蒸汽に乗込んだ、波や、高か、りしも次第に風ぎ、約四十分で上陸した、橋平君と安原姉とが嬉しく迎へて呉れた、安原姉の宅は町はずれの海に臨んだ小綺麗な宅で、廣い天然の美景の裡に、同姉が心からの款待を受けた、共に感涙に咽んで祈つた、間もな、橋平兄を訪ひ、夕は大谷氏宅で小集會を開いた、神は不思議に

此石地のやうな場所にも傳道の門戸を開き給ふたのである、備中高梁の平井直子さんから「靈化」への縷々の謝状が来た、「……靈化が参りました時丁度氣絶者が氣付藥を與へられた様でした……昨夜十二時迄祈り……今朝は何となく愉快で早朝からいそぐと……」。

▲七日(火) 大谷家一泊、翌朝五時半頃起き、繪のやうな波の上の日の出景色、すがくしい朝の空氣を呼吸しつゝ、四五名の兄弟同道登山した、遙かに脈々たる淡路の連山を仰ぎ、風ぎ渡つた鏡のやうな大海原を眼下に見下しつゝ、山巔の岩影で、楽しい早天祈禱會を開いた、何れも大なる覺悟と、主への懺悔の涙をそゝいた、安原姉は昨夜殆んど眠る能はず、今朝早くよりイザヤ書を読んで主の召しを感じ、斷然萬難を排して餘生を主に捧べく決心した、多年主を遠つてゐたと云ふ或兄弟は熱涙懺悔、今後の決心を告白した、歸つて大谷氏と語ること約一時間、君は同志社出身の有力者、同地第一の資産家との、靈的宗教に共鳴して、頻りに予が再遊を熱望してゐられた。歸途神戸の中田姉を訪ふて、活ける基督を説く、近頃「歡喜に溢れて」を讀んで、信仰を

快復しつゝあつたことを喜ばれ、共に熱涙を拭ひつゝ祈つた。歸れば臺北の赤松姉が來てゐられた、夕遅く迄嬉しく語つた、在米の娘から手紙が來た、「……こちらへ來て初めて日本の美はしいことが分りました、春が來ても櫻が咲かず、淋びしい春でした、何かにつけて家郷病が起ります、その時は泣ける丈け泣きます……」

▲八日(水) 赤松姉同道、早天祈禱會出席、十數名のもものが祈つた、終日來訪者なく、夕方急に池田地方の會員を訪ふた。

▲九日(木) 今朝祈禱中に非常に教へられた。

▲十一日(金) ア、惠まれたる一日よ、朝から夕迄自分は只もう活ける主の御手に導かれつゝ此雨の日を、陰々たる梅雨の空を、歌ふて、歡んで、感謝に充されつゝ送つた事務所に出ると國際通信社の某君が初めて尋ねて來て、何となく心淋びしく、煩悶に堪へないから教へを乞ふとの事、約一時間語り再會を約して別れた、曾て廣島時代に親しくしてゐた聖公會の今泉姉が尋ねて來られた、互ひに語り祈りつゝ二時間に及んだ、自分の心にはもう教會教派の別はない、靈と靈との親しい交際である、互に

恵みを受けつゝ各己の屬する所に往つて火を投ずるとだ、其外に何の野心もない、夕方女子青年會に往き、歸れば田中夫人が上海の夫から久しく通信がないから祈つて下さいとの事、二人で講壇の前迄往き、自分は彼女の心から全く一切の恐怖心の取途かなく祈つた、「靈化」も次第に成長して來た、生れて漸く一ケ年にしか成らぬベビーだけれど、既に約二千の講讀者が與へられた。感謝である。

▲十一日(土) 天陰々終日大雨 流石に梅雨らしく成つて來た、こんな時は臺北の雨期を想ひ出す、が然し晴天よりか一層靜かに神に近づき、讀書が出来るから結構だ、或人が自分は頭が悪くて祈り出すと直ぐ眠るから困るとの話に對し、然らば眼を開けて御祈りなさい、眼を開けてゐても、心さへ活基督に集中すれば宜しい、必らずしも冥目するに及ばぬ、それで餘り物が見へて注意が亂れるやうなら、半ば眼を開き、半ばどち、只ぼんやりと物の色が視へる程度で御祈りなされと謂つて置いた。

▲十二日(日) 朝來陰雨、天暗く、遠からず献身して我らの許に働かんとする姉妹らの爲に祈り、主が其必要のものを備へ給ふべく熱求した、已むなくんば自分の乏し

い一部を割いても好いと思つた、朝は花祭で滿堂の會衆、神戸三菱職工學校長の小川君が態々來阪、禮拜に出席し同校の父兄會で語るべく求められた。夕の靈化運動は雨天の勢でもあらう、集會僅か五十餘名、淋びしかつたが必ずしも失敗ではなかつた、淡路から安原姉が態々出席して、献身の覺悟を語り、一同の共鳴を引起した。

▲十三日(月) 茨木に二三の會員を病床に訪ひ、夕は同地高等女學校の一女教師の二階座敷で安原姉と予と三人鼎座、九時過ぎ迄語り且祈つた、歸途汽車の中で自分がつくづく思ふた、如何に主がこの小さい、不信の我が祈にも答へて意外の所に意外の人物を起し玉ふかと感謝に堪へなかつた。

▲十四日(火) 終日陰雨、天暗し、午後婦人會、集會者二十に足らず、併し初から終迄靈氣に溢れた、予は來るべきメシヤの王國と、それに入るものゝ幸福を説いた、只もう感謝の涙であつた、續々熱心の祈が起つた、散會後雨を犯して稻田の橋本家を病牀の長女を慰めた、長のいたつきに顔もやつれて見へた、が併し予は懇々天國の喜びと、救の幸福を説き、生死病健一切を御手に委ねて一日の生涯を喜ぶべく勧めた。